48

324-121

マスター、オヴ、アーツ 村田勤著

宗教改革史

東京
警醒社書店

明治
41 4 1
内交

父が歸朝の日を待ちわびつゝそ
の樂しき日には得逢はで　三十五
年六月一日の未明　空しく逝きし
愛兒東洋雄の靈に此書を捧げ　以
て我等が不朽の愛の紀念と爲す

父母

A few Words to Rhetorical Students
On the importance of the study of Christianity:
By Professor George P. Fisher of Yale University, U.S.A.

I have in mind just now especially European History, and, in particular, the Period of the Reformation. Christ likened the spiritual kingdom which he founded to a minute seed which grows up into a lofty, spreading tree, and to a little yeast which a woman puts into a mass of meal, and which leavens the whole of it. The first simile is a symbol of the terrestrial progress of Christianity. The second is a symbol of its influence on human character, life and civilization. The first great victory of the Gospel was in the Roman Empire. Owing to it, the conquering barbarian Nations on the whole received the

Turn, Fortune, turn thy wheel
With smile or frown;
With that wild wheel we go not
Up or down;
For man is man and master of his fate.
—Lord Tennyson.

Gospel as a transforming and moulding influence.

This change, mighty in itself and its social and political powers, is one of the themes which the historical students must investigate and foster. The Crusades is another. The inspiring impulse was the Christian faith. They centralized the European political organization. Feudalism and monarchy were a consequence. Passing over we come to the Protestant Reformation. This was due to the ecclesiastical system and its defects which were developed in the middle ages. Besides this great historical movement, in its rise, in the controversies and crises involved in it, and the types of Christians and of the Church that arose, are thoroughly studied, only a superficial knowledge of modern history can be attained.

自序

宗教改革時代は其史料豐富にして汗牛充棟も啻ならず。その浩瀚なる史料を渉獵して創作的の著述を成さん事は、頗る難事にして、予は到底其器に非ざるを知る。予が此著に志しゝは今より十六年前なりしが、爾來業務に追はれて專心著述に耽るの暇なく、又參考書を購ふの資なく、且折々轉住せしを以て、僅かに圖書館の書籍を借讀して、其時代の史實、人物、及び思想と親昵せん事を勉めしのみ。(予は茲に京都同志社の圖書館と明治學院圖書館の恩惠を蒙りしを謝し、同時に帝國圖書館が此時代の歷史文學に全然缺如なる事を遺憾とす)。三十四年の夏、在同志社友人**ロムバード**教授(Prof. F. A. Lombard)の紹介により、北米合衆國**エール**大學に遊學する事となりぬ。奬學金の特典を領せしと雖も、尙少からざる學資と旅費を要せり。予の如き窮措大にして自費洋行の冒險を企つるを得しは、友人石原直太郎、古屋政次郎の兩氏、親戚山路菊次郎氏、時田ます子等の厚意に由れり。予は此書を

公けにするに方り、以上四君、及び予の渡米に際し同情を賜りし友人諸氏に向て眞摯なる謝意を表す。**エール**在學中は勿論、歸朝後も懇切に予を指導せられしし**ウ井リストン・ウオーカア**教授(Prof. Williston Walker)に特に予が滿腔の感謝を呈す。不完全ながらも、今日此書を公にするを得しは、全く諸氏の賜なり。尚此外に予が感謝を禁ずる能はざるもの二あり。一は**エール**大學附屬各圖書館より蒙りし恩惠にして、他は舊友德富健次郎氏より受けし恩義なり。去る明治二十三年予の處女作なる路錫(ルーテル)を博文館へ紹介し、剩へ校正の勞を執られし同氏に對し、予は茲に謝意を表すべき好機會を得しを欣ぶ。蓋し此書を著はすに至りし遠因は、予が**ルーテル**研究に胚胎すればなり。

予は**エール**大學圖書館に藏せらるゝ豐富なる各國語の史籍に對して、寧ろ望洋の歎を催ふせり。生嚼りの獨逸語は殆ど間拍子に合はず。久しく讀み習ひし英語を以てするも、尚もどかしさに勝へざりき。二年間に得たる結果は豫期の半にも達せざりき。歸朝後は微力の及ばん限り、債務を果すべき冀望ありしを以て、多忙なる勞働的生活を送り、靜かに筆を執るべき餘暇なかりしなり。然るに予は數年前より、冬休、春休、就中最も長き暑中休暇を利用して、出來る丈けづゝ稿を重ぬるの方法を採りぬ。左れば、此書は編を逐ひ章を蹈みて順次に書きしものにあらず。例せば、緒論は明治三十年反省雜誌に掲載せし『宗教改革の眞相』を骨子として、昨年の末書き直し、獨逸宗教改革の一五三〇年以前の分は、**ニューヘヴン**滯在中に書き、其年以後の分は、昨年の夏脫稿し、英國の宗教改革は四十年の冬休に、**メーリー**代の末まで書き置き、**エリザベス**の代の分は本年正月之を書き足しゝ類なり。此の如き次第なれば、或は統一を缺ける點もあるべく、重複に涉る記事もあるべく、又全體を通じて著者の思想の變遷せし痕もあるべし。

參考せし書目を一々列擧せんも嗚呼がましければ、單に予が座右を離さざりし數種を揚ぐべし。**ニューマン　メーレル　ウオーカア　フヰシャー　シヤッフ　チャールス・ビーアド　アルツォーグ　ケストリン　ホイセル　リンドセイ**等の諸著述、及び**ケムブリッヂ**近世史第二第三の兩卷是れなり。その中予の尤も敬重して史實の典據と爲しゝは、**ケムブリッヂ**近世史に收

められし專門大家の史文なりき。**リンドセイ**博士の新著は、獨逸の部に於ては、創見の看るべきものあるも、他の部分に於ては**ケムブリッヂ**近世史に據られし個處なきにしもあらず。予は宗教史又は教會史の類を多く參考せしとはいへ、政教の關係を繹ぬる事に重きを置しを以て、體裁に於てはその何れにも倣はざりき。去りとて又**ホイセル**の如く、宗教改革時代史と銘打て出るほどに大膽なる能はず。予は矢張宗教改革を中心として、その時代に於ける歐羅巴の趨勢、思潮、學風、扨ては政治、外交等の事象が、如何に此運動と關聯せしかを出來得る限り明瞭ならしめんと努めたり。期望の餘りに大にして才力之に伴はざりし爲に、那邊までその目的を達せしや甚だ覺束なし。斯道の諸賢冀くは教示を垂るゝに吝かなること勿れ。予は今後と雖も、益々勉勵して訂正增補を怠らざるべし。

終りに臨み、予を刺撃して該著編纂の志を起さしめし宗教改革史の著者、**エール**大學名譽教授、**チヨルヂ・パーク・フ井ッシャー**老博士の小傳を左に掲げんと欲す。

チヨルヂ・パーク・フ井ッシャー博士小傳

フ井ッシャー博士の芳名は、其著萬國史に由りて博く我邦の青年社會に知られたり。博士は千八百二十七年**マサチュセッツ**州に生れ、**ブラウン**大學卒業の後、**アンドヴア**神學校に入りて業を了り、尙獨逸に留學せられし後、一八六一年より一九〇一年に至るまで四十年間、**エール**大學宗教史教授たり。一八九七年米國史學協會は、博士を名譽會長に選擧したり。其著書は前顯二種の外に、教會史、基督教々理史、基督教の起源、合衆國殖民時代史等あり。一九〇一年退隱せらる。當年八十二歳。卷首に掲げし博士の自筆は、去る三十六年の夏、予の請に應じて起草し、態々郵便に託して送られしものなり。質に深謝に堪へず。

プロテスタント教が日本に傳りてより滿五十年に相當し、カルヴァンの誕生四百年紀念祭に相當し、英國のヘンリ八世王即位の四百年目に相當し、且寛容政策の木鐸なりし佛國のヘンリ四世王の暗殺せられし三百年紀念の前一年に相當する

明治四十二年三月三日

小石川の僑居に於て

著者識

凡例

一校正の際、事實年代等に誤謬なきやう注意せん考なりしも、業務繁忙の傍ら校正に逐はれしを以て、重もに字句の訂正に止まりて記事年代に及ぶこと能はざりき。恐くは多少の誤謬を免れざるべし。批評家及び友人諸氏の注意を仰ぎ、改版の際、訂正を加へんと欲す。謹んで大方諸賢の斧正を懇望す。

一地人名の發音は、成る可く世人の言ひ慣れたる英國音に據らんとせしが、佛朗西、獨逸、兩國に關するもの丶中には、その原音に從ひしもの寡からず。片假名に由りて原名原語の綴り方の想察し難きものは、往々原語を記入したれども、全體には渉らざりき。西班牙のカルロス一世にしてその後獨逸の皇帝となりしカール五世の如きは、止むなく拉丁音を用ゐたり。

一著者は此書が博く一般の讀者に讀まれん事を希望するが故に、專門家には不必要と覺しき事項にも註疏を加へ、又讀み易からんやうに傍訓を附

せし個處尠からず。歴史中の宗教的事項に關して特に注意を拂へり。

一挿畫の事に就きては、屢々躊躇せし末、一旦全廢する事に決心せしが、その後先師**ウオーカア**教授より、遙々師が數年前歐羅巴漫遊の際得られし繪端書數葉を寄せられたれば、予は之を挿入する事とし、序に同教授著**カルヴヰン**傳中の畫二三葉をも入るゝ事とし、又拙著**ルーテル**傳中にある挿繪二葉をも加へたり。

一明治三十年反省雜誌(中央公論の前身)に掲載せられし宗教改革の眞相、同三十四年聖書之研究に掲載せられし瑞西闘の宗教改革(但し**ツヰングリー**時代)の二篇は、大改刪の上その一部を用ゐ、三十九年度及び四十年度の新人紙上に現はれし**ルーテル**と**ロヨラ**、**ゼスイット**協會の元祖**ロヨラ**、**ジヨン・カルヴヰン**等の三篇中、第二第三の原稿はその一部を省き、改訂を加へし上、之を用ゐたり。以上各雜誌の編輯者に對して謝意を表す。

著者白

目次

宗教改革史目次

第一編　緒論

第一章　第十六世紀の劈頭に於ける世界の大勢……一

第二章　宗教改革の氣運……一四

第二編　獨逸の宗教改革

第一章　**ルーテル**の前半生……二七

第二章　赦罪劵の販賣—九十五個條の掲示及び其後の談判……四四

第三章　**ライプチッヒ**の討論……五八

第四章　**ルーテル**の聲援者……六二

第五章　開戰の喇叭三聲—**ルーテル**の論文……六九

第六章　法王の破門狀—**ルーテル**の斷乎たる反抗……七七

第七章　カロロ帝の地位と獨逸の國勢……八三
第八章　ルーテル　ヴオルムス國會に召喚せらる……九五
第九章　ルーテルの幽閉—禁令發布……一〇七
第十章　改革主義の傳播……一一六
第十一章　ウ井ッテンベルヒ市の騒擾—革命的分子排斥せらる……一二二
第十二章　政治上の事情及び改革運動と異分子の乖離……一二八
第十三章　農民の叛亂……一三四
第十四章　前後二回のスパイエル國會……一四五
第十五章　マルブルグの會見—獨瑞新教徒の提携成らず……一五五
第十六章　一五三〇年のアウグスブルグ國會……一六三
第十七章　シュマルカルデン同盟—ニュルンベルグの秘密和約—ユルテンベルグの恢復……一七三

第十八章　再洗禮派革命騒動の失敗—リユーベック市の黨爭……一八四
第十九章　調和策の不成功ヘッセン伯の重婚—シュマルカルデン同盟の分裂……一九一
第二十章　政治界に於けるカロロ帝の成功—新教諸侯の向背……一九八
第廿一章　トレントの宗教大會議及びシュマルカルデン戰爭……二〇五
第廿二章　假信條の强制執行と其反動……二一二
第廿三章　アウグスブルグの宗教和議……二二一

第三編　丁抹、瑞典、諾威に於ける宗教改革

第一章　總論……二二九
第二章　丁抹の宗教改革……二三二

第三章　諾威及びアイスランドの宗教改革……二四三
第四章　瑞典の宗教改革……二四五

第四編　瑞西蘭の宗教改革（ツヰングリー時代）

第一章　瑞西の國體……二五七
第二章　ツヰングリーの修養時代……二六三
第三章　ツヰングリーとルーテル……二六六
第四章　備兵及び外國の恩給……二七一
第五章　チューリッヒ中心の宗教改革……二七三
第六章　新教主義の傳播と再洗禮派の妨害……二七九
第七章　ツヰングリーの政治運動……二八二
第八章　チューリュヒの敗北——ツヰングリーの戰死……二八八

第五編　瑞西蘭の宗教改革（カルヴヰン時代）

第一章　カルヴヰン派とルーテル派の比較……二九一
第二章　カルヴヰンの修養時代……二九七
第三章　改信して宗教改革に從事す……三〇〇
第四章　著述——ジュネーヴ市滯在……三〇六
第五章　ジュネーヴ市の沿革……三一〇
第六章　ジュネーヴに於ける改革の端緒……三一三
第七章　ストラスブルグ滯在……三一九
第八章　カルヴヰンの奮鬪時代……三二四
第九章　カルヴヰンの事業の感化……三四一

第六編　佛朗西の宗教改革

第一章　該國の狀態……三四七
第二章　人文學と宗教改革……三五一
第三章　對新教政策の動搖と軟硬二種の改革家……三五六

第四章　カムブレー和約後に於ける新教徒迫害……三六三
第五章　ヘンリ二世の對新教策……三六九
第六章　新教の地盤固定して政治的勢力たらんとす……三七二
第七章　教派の爭政黨の爭と結合す……三七七
第八章　調和策の困難……三八一
第九章　兩教徒終に干戈に訴ふ……三八九
第十章　新教勢力の挽回——聖バルソロミユーの虐殺……三九七
第十一章　兩教派戰爭の再燃……四〇三
第十二章　加特力同盟の成立……四〇八
第十三章　王位繼承權の爭……四一〇
第十四章　ヘンリ四世の即位——ナント勅令……四一七

第七編　ネザーランドの宗教改革

第一章　ネザーランド人民の歴史及び其氣風……四二九

第二章　ブリップの地位及びネザーランド獨立の原因……四三五
第三章　ウヰリアム默公とグランヴェル僧正……四四一
第四章　王の方針と國民の不平……四四七
第五章　危機切迫——オレンヂ公の決心……四五六
第六章　アルバ侯の武斷政治……四六二
第七章　武斷政策の失敗……四六九
第八章　獨立運動の發展……四七五
第九章　パルマ侯の懷柔策とオレンヂ公の苦心……四八三
第十章　オレンヂ公死後の聯合共和國……四九三

第八編　蘇格蘭の宗教改革

第一章　蘇國改革の性質及び當時の國狀……五〇三
第二章　新說の傳播と政治界の變動……五一〇
第三章　ジヨン・ノックス小傳……五一六

第四章　親佛蘭の勝利と英國女皇の對蘇策……五二一
第五章　新教貴族の活動……五二六
第六章　カトー・カムブレシの和約と新舊兩派の大暗鬪……五二八
第七章　ノックスの活動——英國の應援……五三一
第八章　メーリー女皇の地位……五三七
第九章　メーリー信を國民に失ふ……五四〇
第十章　ノックス死後の蘇國教會……五四三

第九編　英國の宗教改革

第一章　英國に於ける宗教改革の性質……五四七
第二章　人文學の傳播と宗教改革の氣運……五五一
第三章　離婚問題と英國教會の獨立……五五九
第四章　ヘンリの治世に於ける宗教改革の進捗……五七〇
第五章　エドワード六世の代の急激なる改革……五八〇

第六章　メーリーの代の羅馬教復興……五八九
第七章　エリザベス女王の踐祚……六〇三
第八章　エリザベス時代の宗教改革……六一一

第十編　宗教改革の反動

第一章　ロヨラの前半生……六二六
第二章　ヱス協會の成立……六三二
第三章　ゼスイット協會の大活動……六三九
第四章　成功の原因及び結果……六四三

目次終

挿入圖畫目次

一 ルーテルの書齋及び其机—九十五個條を掲示せしウヰッテンベルヒ城附屬會堂の門扉—同會堂の內側（ルーテルとメランクトンの墓） 四四—四五
（但し舊の門扉は木造なりし爲朽敗したれば靑銅にて同模型のものを造れり。圖に示すは即ち是れなり）
二 メランクトン肖像 六四—六七
三 ルーテル肖像—ヴオルムス國會の時議場に宛てられし堂—ワルトブルヒ城 一〇八—一〇九
四 敎壇に立ちしカルヴヰン 三二四—三二五
五 カルヴヰンが說敎せしセン・ピエール會堂の內側及び彼が使用せし椅子 三四六—三四七

宗敎改革史

第一編 緒論

村田勤著

第一章 第十六世紀の劈頭に於ける世界の大勢

宗敎改革とは何ぞや

宗敎改革とは何ぞや。或人は、異敎化せられたる基督敎が、復古して使徒時代の單純なる福音に立ち戻りしなりといひ。或人は、ラチン人に對するチュートン人の反抗なりといひ。或人は、高僧等の奢侈敗德と、僧政の專橫に對する積年の鬱憤が、一時に破裂した結果なりといひ。又或人は、人間の理性が、敎權の羈絆を脫して、

個人性の獨立を主張せんとしたる企圖なりといへり。吾人は是等の定義の中、その一を採りて他を捨つるを欲せず。何となれば上擧の諸説は、皆多少の眞理を含蓄すればなり。然れども吾人は、宗教改革の如き複雜尨大なる歴史的事實に、完全なる定義を下さんとするの徒勞なるを信ずるが故に、寧ろ少しく方面を廣くして、此大運動を産出したる時代の趨勢を觀察し、併せてそを成功せしめたる、十六世紀に於ける思想界の大勢を窺はんと欲するなり。

人文史上に於ける十字軍の結果

十三世紀の末、即ち十字軍時代の末期より、歐羅巴の社會は、漸く駘蕩たる陽春を迎へんとする兆を示せり。百萬人の白骨を、**ホンガリー**及び小亞細亞の原野に曝らして、尚その目的を達する能はざりし、聖土回復の迷信騷ぎも、基督教國民を刺擊し、歐洲に於ける人文の進歩を助けし間接の効果に至ては、實に著大なりと謂はざるべからず。地理探險、遠洋航海の志望勃興し、貴族の貧窮に乘じて、市若くば市の同盟なるもの、種々なる特權を購ひ、隨て商業の進歩、

人智の發展を促がしぬ。

硝藥、羅針盤、及び印刷術發明の影響

硝藥發明せられて、戰術及び築城法の上に革命を起し、百姓町人をして、騎士の必ずしも恐るゝに足らざる事を了解せしめたり。羅針盤東方より傳來して、航海者を鼓舞し、山影と北斗星の見えざるに悸ちず、大海を冒して遠洋に出づるの勇氣を振起せしめたり。若し夫れ**グーテンベルグ　シユエッフエル　フスト**等の協力に由りて完成せし印刷術の發明が、人文學と宗教改革の傳播とを資けたる効果に對しては、吾人は適當なる讃辭を發見するに苦しむなり。初めて拉丁語の聖書を印刷せしは、一四五五年なりしが、夫より僅かに十五年を經過したる一四七〇年より、一五〇〇年に至るまでの三十年間に、一萬版以上の書籍及び小冊子印刷せられき(**ドレーパル**氏歐洲智力發展史、第二卷、一九九頁に出版の市名と其部數を詳記せり)。而して其過半は、古文學研究の中心たる伊太利の諸市の出版にかゝり、殊に**ヴエニス**市は第一位を占めたり。一五一七年以後の出版に

書籍印刷の狀況

『獨語集』の發賣高二萬四千部に及ぶ

土耳古人の歐羅巴と東洋貿易

つきては予未だ詳密なる統計に接せざれども、恐くは獨逸に於ける刊行は、伊太利に於ける.夫れに凌駕せしならむ。而してその尤も刊行の盛にして發賣部數の莫大なりしは、**エラスムス ルーテル**等を筆頭として、その他の改革家の筆に成りし著述なり。例せば當時尤も好評を博せし**エラスムス**の『獨語集』の如きは、二萬四千部を賣り盡せしといふ。兎に角印刷術の發明が、智識學問の普及と思想の交換を便利ならしめし事は絶大なりとす。(九十二頁參照)

十字軍士の遠征失敗に終り、小亞細亞、**シリア**、埃及等の地が、野蠻猛獰なる土耳古人の手に歸し、その後彼等が、更に黑海灣頭の兩海峽を渡りて、東羅馬帝國の諸領地を侵畧し、一四五三年、終にその首府**コンスタンチノープル**を占領するに及びて、從來伊太利の商人が、**アレキサンデリヤ**市に於て貿易するを慣例とせし、支那、印度との商業は、一大恐慌を來せり。當時埃及人のサルタンが、一年に收めし關稅の額、二百九十萬圓に達せし一事に徵するも、東洋

冒險心と利慾心とを合して航海熱を盛にす

發見時代と宗教改革時代の對照

貿易のいかに盛大なりしかを推測するを得べし。是に於てか、十四世紀の半頃より、葡萄牙人の先導によりて、旺盛に向ひつゝありし遠洋航海の冒險熱は、印度、支那、扨ては**マルコ・ポロ**が始めて歐羅巴に紹介せし、純金の瓦を以て其屋根を葺きたりといふ**チパンゴー**(日本)と、海上の直取引を開かんとする、一攫千金の利慾心に刺激せられて、一層高く燃え上りぬ。不思議や、葡萄牙人西班牙人等によりて、新島陸が續々發見せられつゝありし時代に於て、宗教改革の氣運も亦將に發展しつゝありしなり。航海者と綽名されし葡國の皇太子**ヘンリ**は、**ジョン・ウ井ックリッフ**の死せし十年後に生れ、**ルーテル**の生るゝ二十三年前に逝けり。**フス**の殺されしは、恰も**ヘンリ**が二十一歳の時なり。**バルトロメウス・ヂアツ**が、喜望峯を發見せしは、**ルーテル**三歳の時にして、**コロンブス**の亞米利加發見は、彼が九歳の時。**ヴアスコ・ダ・ガマ**が印度の**カルカッタ**に達せし時、彼は十五歳、**セスイット**派の元祖**イグナシオス・ロヨラ**は七歳の時。而して

新島陸及び印度航路發見の結果

ジヨン・カルヴ井ンの誕生に先だつこと十一年なり。冒險家なる西班牙の一將**コルテツ**が、**メキシコ**に上陸し、國王**モンテズマ**を欺き殺して、終にその國土と、その殆ど無限なる金銀財寶を强奪せし年、又世界周航の破天荒なる葡人**マゼラン**が、西班牙王の命を奉じて、**マゼラン**海峽を經て**フ井リピン**島に到り、その土人の爲に殺されし年は、恰も**ルーテル**が**ヴオルムス**國會に召喚されし年と同じく、一五二一年なりしなり(當時西歐諸港より印度に往復するには、約二個年を費したり。その航海費一隻につき(船の價額共に)四萬圓を要せしも、その利益亦莫大にして、約百五十萬圓に上りしことあり。一四九七—一六一二年間に印度貿易に從事せし船八百六隻にして、その內難破せしもの九十六隻あり(**アクトン**卿近世史講義五十八頁)。然れども利益の大なりし事は歐人をして此の如き危險に無頓着ならしめたり)。扨新島陸の發見と、印度航路發見とは、地理學上に一大變動を與へしと同時に、商業上に一大革命を惹起せり。從來東洋貿易の牛耳を執りて、その利益を壟斷せし伊太利の諸市、是より衰へて荷、西兩國人活動の代となりぬ。

天文學上の革命

顧て學術界の形狀を觀るに、第二世紀以來、歐羅巴人の思想を支配し來りたる**トレミー**の天動說は、將に其根柢を覆されんとす。地動說は、**フロレンス**の天文學者**トスカネリ**に由りて暗示せられ、**コペルニクス**　**ガリレオ**等に由りて確立せられたり。**トスカネリ**は**コロンブス**の友人にして、彼が西航の時、その海圖を作り與へし人なり。(此海圖は、**トスカネリ**が、**マルコ・ポル**の東亞旅行記に基きて製せしものにして、地球の周圍を一萬八千里と誤算したり。**コロンブス**が**サン・サルヴアドル**に着して、そを印度附近の一島ならんと斷定せしは、之れが爲なり)。**ポーランド**の大天文學者**コペルニクス**の誕生は**ルーテル**より十年前(一四七三)なりしが、彼は**ル**氏より三年前、七十歲の高齡を以て逝けり(一五四三)。**ガリレオ**は、**コペルニクス**の死してより二十二年目に、伊太利の**ピサ**に生れて、**マ**氏の說を祖述

コロンブスが印度に着せしと誤認せし理由

したり。僧侶頑冥にして地動說を排斥し、**ガリレオ**を窘めしが、學術上の眞理は、毫も彼等の拘束に頓着なく、駸々乎として長足の進歩を爲しぬ。要するに天文學上の新說は、遠洋航海を誘導せしが、その赫著なる成功は、亦天文學の爲に確實なる證據を提供したり。而して此兩者は共に人智開發に與て大功ありしなり。

古文藝復活

『神曲』の著者**ダンテ**（一二六五―一三二一）を先驅とし、**ペトラルカ**（一三〇四―一三七四）**ボッカチオ**（一三一三―一三七五）等を本隊とし、**ロレンチウス・ヴァラ**（一四〇七―一四五七）、**アリオスト**（一四七四―一五三三）、**タッソー父子**（父一五六九歿、子一五九五歿）、**マキアベリー**（一四六九―一五二七）等を以てその殿と爲せる古文藝復興は、實に近世思想の原動力たりしなり。

伊太利は文藝復興の中心

伊太利は、此復興運動の淵叢なりしを以て、歐洲諸國の青年學生は、多く此國に遊學するを光榮としたり。中にも尤も隆盛を極めしは、**フロレンス　ローマ　ヴェニス　ミラン**等の諸市なりき。

十六世紀の前半に入りては、古文藝の研究既に其隆盛を極め、歐洲の諸大學に、人文學の講座あらざるはなし。徒らに古人の作品を飜

人文學者の一派宗教改革の運動を贊助す

譯し、若くば之に摸倣するの風潮既に熄みて、創作的文學漸次世にあらはれ、隨て各國文學の特殊なる發展を促がしつゝありしなり。人文學が人心に及ぼしたる結果二樣あり。一方には異教的人文學者の一派を生せしと同時に、他方には基督教主義の人文學者を起せり。伊太利に於ては、自然主義及び懷疑論に傾きし者多かりしが、獨逸に於ては、古語の智識に賴りて、基督教を根本的に研究せんとする趨勢勝利を占めたり。是れやがて宗教改革の運動と迎合したる所以なり。

中世の美術と文藝復活時代の美術

美術界に顯はれたる天才巨匠に就きては、歐洲列國を合して一國と爲すとも、尙能く蔑爾たる伊太利一國に及ぶ能はざるべし。文藝復活時代の傑作を以て、之を中世の作品に比較するときは、假令美術の門外漢と雖も、恐くはその顯著なる相違を認めざるを得ざるべし。一は形式に偏して不自然に陷り、他は自然を寫せる中に優美雄大なる理想を寓せるを見る。前者を見れば、幽欝悲哀の念を生じ、

後者に對すれば自ら陽氣壯快の感なき能はず。吾人は兩者の間に、殆ど嚴冬と陽春、暗黑と光明、死と生との差別あることを認むるなり。**ラファエル　ミケルアンゼロ　レオナルド・ダ・ヴィンチ　チチアン**等の繪畫彫刻は、十六世紀の劈頭に於ける歐洲人心の反映に非ずして何ぞや。希望、活動、進歩、及び革新の氣の充滿せる、即ち是れ當代人心の趨勢に非ずや。

國民統合主義

西班牙

英國

此の如く盛んに勃興しつゝありし新學問、新美術、新人生觀は、到底中世傳來の教義信條と調和し得べくもあらざりしなり。

國民統合主義（ナシヨナリズム）は、近世史上の一大現象たり。**イベリア**半島に於ける基督教諸王國は、十五世紀の後半に於て、統一せる西班牙を形造り。同世紀の末、**ムール**人最後の堅壁たる**グラナダ**を陷れて、國運大に勃興したり。西班牙は、今や伊太利に於ける屬領の外に、新大陸に莫大なる領地を得て、帝國主義を實行せんとす。英國の大貴族は、三十年間の薔薇戰爭の爲に、家系多くは斷絶し、左なくとも財

佛朗西及び獨伊兩國

『國民性の統合は近世史の一大特色たり。古代史は重もに國家に關し、市府的國家に關す、中世史は世界的國家に反して、近世史は國民的國家を主眼とす』ーボワード教授『近世史の原素』（第一章）

產を失ひて零泊せしを以て、**ヘンリ**七世、**チュードル**朝を起し、其子**ヘンリ**八世、英邁の資を以て、王位を踐むに及びて、國家統一の基礎堅固となりぬ。**フ井リップ**二世　**ル井**九世　**フ井リップ**四世　**ル井**十一世等の如き、諸英主に由りて、着々經營せられたる佛朗西の中央集權制度は、十六世紀の前半**フランシス**一世の代に至りて、既に內顧の憂を絶ちて外征に轉せり。此統一の大勢に後れしは、西歐の强國中、唯獨逸と伊太利の二國ありしのみ。伊太利は**ミラン**侯國　**ヴェニス**共和國　**フロレンス**　**ネープルス**　法王領の五つに分れたり。獨逸は大小諸侯の領地、犬牙錯綜し、共和政治を維持せる少數の自由市その邊境に點在したり。而して之れが覇權を握れる**ハプスブルグ**家代々帝位を占めて獨逸に君臨せり。此二國は何れもその國の歷史的事情と、諸市諸侯の反目とに餘儀なくせられて、永く政治的の統一を全ふする能はざりしと雖も、その國民性の統合に至りては、既に發展しつゝありしなり。此の如く、近世時代の初めに

加特力主義は國民主義と相容れず

勃興しつゝありし、國民主義及び中央集權主義は、法王**グレゴリー七世**、**インノセント三世**等に由りて、著しく發揮せられたる法王の無上權及び僧侶の獨立とは、早晩衝突を避くべからざりしなり。況んや各國共に、寺領と稱して俗政府の支配を受けざるもの年を逐ふて增加し、又種々なる名目の下に、羅馬法廳が徵收する所の稅額莫大にして、殆ど國庫收入の半若くは五分の三に相當するものあるに於てをや。是れ實に國家の主權に關する問題たると同時に、經濟上の重要問題なりしなり。英國に於ては、法王と國王との爭端既に**ウ井ックリッフ**の時代に發し、佛國に於ては、**フ井リップ四世**、法王**ボニフェース八世**と爭ひて前者の勝利に歸したり。

プロテスタント教成功の一原因

その後**プロテスタント**主義起るに及びて、各國の司權者が、爭ふて之を歡迎せしは、政治上若くば經濟上の理由に基くもの少しとせざるなり。表面よりいへば、**プロテスタント**主義成功の一原因は、國民主義との契合に存したりと謂ふべきなり。佛朗西及び西班牙が、

獨逸が宗教改革の本源となりしの事情

プロテスタント教を採用せざりし理由は、一にして足らず。一は拉丁人種としてその趣味感情を伊太利人と一にせしに由るべきも、今一つの理由は此兩國が羅馬法廳に對して既に多大の特權を有せしに坐せずんばあらず。之に反して法王が國內の分裂に乘じて、尤も專横なる取扱を爲しゝは、獨逸なり。然らば則ち獨逸が宗教改革の本源となりしは、毫も怪むに足らざるなり。

上來舒べし如く、十六世紀劈頭の歐羅巴は、學問上に於ても、藝術の上に於ても、商工業上に於ても、政治上に於ても、一新紀元に入らんとしつゝありしなり。一大革命を翹望しつゝありしなり。宗教改革は、十八九世紀に於ける、政治及び學問の革命の先驅として現出したる一現象に過ぎず。吾人若し現代歐羅巴の文明を知らんと欲せば、須らく先づ宗教革命の歷史に溯らざるべからず。蓋し宗教改革はその時代に於ける有らゆる他の歷史を包含するものなればなり。

腐敗せし時代にも聖僧あり

第二章　宗教改革の氣運

ルーテルが改革を唱道せしは、十六世紀の初めにありしと雖も。その以前に於て彼と同樣若くば大同小異の說を唱へし者、擧げて算ふべからず。是等の改革の企圖は概ね失敗に終りしも、明かにその氣運の熟しつゝありし事を見るべきなり。

中世の末葉に於て、加特力教會就中僧侶の道德が頹敗せし事は、赫著たる事實にして、毫も辯疏の餘地なしと雖も、而も他の一方に幾多の聖僧知識ありし事を看過すべからず。殊に是等有爲の人物が幽閑なる山寺の中に蟄伏せし事を忘るべからず。抑も二世紀の末頃までは、未だ修道院てふものあらざりき。勿論**イエス**の時代に於て

修道僧の起らざりし所以

教會の俗化と修道院の必要

は、**パリサイ**宗徒に反動して起りたる**エッセニ**宗の一派あり。世を厭ひ山野に退隱して仙人的の生活を爲しゝが、その後**キリスト**教起り、世擧て其徒を冷遇迫害せし時代に於ては、未だ修道僧なるものありしを聞かず。良し之れ有りしにせよ。その勢力の微弱なりしこと疑を容れず。蓋し迫害の熾んなりし時代に在りては、教會の內部絕えず革新せられて信徒も自ら淘汰せられ、非常なる献身犧己の精神ある者に非ざれば、その中に留まる能はざりしを以てなり。

四世紀の初め基督教徒の勢力漸く增加し、**コンスタンチン**大帝が彼等の後援を藉らん爲に其宗教を公認するや。教勢勃然として振起し、信徒の數激增し、中には名譽利達を目的として聖徒の團體に加はる者、續出するに及びて、教會は漸次富榮に赴くと同時に、俗化の傾向も亦著しくなりぬ。是に於てか修道院の必要始めて起る。蓋し誠意篤信の輩は、俗化腐敗せる教會に在りて、眞正なる**キリスチヤン**の生活を營む能はずと信じたればなり。二三〇年に世を逝りし

タアチユリアン

聖アントニー

修道院陸續設立せらる

テルチユリアヌス(英、**タアチユリアン**)は、修道院主義の首唱者と稱せらるゝと雖も。二十年間、山中に仙人的生涯を送りし後、**ナイル**河畔の**メムフ井ス**附近に於て修道院を創立し、三五六年百餘歲の高齡を以て易簀せし聖**アントニー**こそ、眞に**キリスチヤン**修道僧の元祖と云ふべきなれ。

中世は實に修道院の全盛時代なり。吾人は修道僧を度外視しては中世の社會を了解する能はざるなり。六世紀の初め伊太利に起りし聖**ベネヂクト**の修道院を筆頭として、十世紀の劈頭、佛朗西の南方に**クルニー**修道院起りぬ。十一世紀の末に起りし**シトー**(Citeaux)の修道院は、その後同院の出身なる聖**ベルナード**の盡力に由りて隆盛を極め、十三世紀の初めには、有名なる聖僧**フランシス**　**ドミニック**等輩出して、各々布教に熱心なる修道院を開設したり。若し夫れ一〇九六年以後約二百年に渉れる十字軍時代に於て。其擧を援けん爲に起りし修道院、及び、半僧にして半武士なる混成團體に至ては一

修道院の俗化す

修道院の競爭

中世歐洲の貴族修道僧に由りて教化せらる

々枚擧に遑あらず。修道院は概ね淸貧と、凡人の企て及ぶべからざる克己制欲を標榜して起りしが。信仰の念盛なりし當時の人民が、高德の僧を欽仰するのあまり、欣んで土地、金品を喜捨せしより、幸か不幸か、修道院はやがて富裕となり、教會の俗化に反動して起りし素志に背きて、自ら俗化し了はるを常としたり。左れど一派の修道院腐敗する時は、他派の修道院之を憤慨して起りしを以て、その競爭は相互の精神を鍛錬し、多少俗化の傾向を防遏するを得たり。

中世の人文史上に於ける修道院の功勞は極めて著大なりとす。四世紀の半頃**ゴート**人に布教し、聖書をその國語に飜譯せし**ウルフ井ラス**。六世紀の末、四十餘名の門弟を率ゐて英國に渡り、**アングロ・サキソン**人の教化に從事せし**アウガスチン**。八世紀の初め博く**ゲルマニ**人の間に傳道したる獨逸人の使徒と綽名せらるゝ**ボニフエース**(獨、**ヴ井ンフリード**)。九世紀の半頃**スカンデ井ネビア**に基督教を傳へたる**アンスガル**の如きは、何れも皆修道僧に非ずや。中世の代、

俊英英才修道院に集まる

宗教改革と修道僧

歐羅巴の文權全く緇徒の手に歸したり。九世紀以後の暗黑時代に於て、將に亂暴なる武人等の爲に蹂躙せられんとせし古代の文藝學問を保護して之を後世に傳へしは彼等の功勞と稱せざるべからず。當時の碩學俊才も亦概ね修道僧なり。**ビート　アルクヰン　アンセルム　ドンス・スコトス　アベラード**及び**スコラ**神學の泰斗**トマス・アクワイナス**の如きは即ち是なり。果して然らば修道院は中世思想界の牛耳を握れりといふも過言にあらざるべし。彼等が農工業を首めとして、其他社會百般の事柄に及ぼし、影響も、亦鮮少ならず。左れど予が茲に特に高調せんと欲するは、修道僧が宗教改革に及ぼした る感化なりとす。彼等は絶えず教會の俗化的傾向に反對して、之を防遏せん事に努めたり。十一世紀の後半に於て、**グレゴリー**七世が**クルニー**修道院の精神に則り、多く其出身者を任用して斷行したる改革の如きは、即ちその適例なり。降て中世の末葉に至りては、修道院の中に神秘主義盛んに起り、教會が與ふる能はざりし宗教的生

神秘主義の大家

修道院は宗教改革の母

命を當時の社會に鼓吹したり。「獨逸神學」の著者**ヨハン・タウレル**。「基督の摸範」の作者と稱せらるゝ**トマス・エ・ケンピス　エックハルト　ルイスブレック**(Johann Ruysbroeck) **ヨハン・ヴエッゼル**等は即ちその重なる代表者なり。彼等は社會的宗教に反對して個人的信仰を高調し、理論に反して實踐躬行を重んじ、神學と儀式の外に宗教心の滿足を得んと試みしなり。其說は伊太利　獨逸　佛朗西　**ネザーランド**等に蔓延して、幾多の小團體を生じたり。神妙に加特力教會の羽翼の下に在りて從順を裝ひたればこそ、法王の忌憚に觸れざりしが、その所說は**ルーテル**の意見と殆ど大差なし。**ルーテル**が**バイブル**と**アウガスチン**の著書に次ぎて**タウレル**の「獨逸神學」を愛讀せしといふは、蓋し偶然にあらず。知るべし宗教改革の精神は修道院の中に胚胎しつゝありしことを。

然れども十四五世紀頃の神秘論は、著しく萬有神教的の傾向を有して、福音的の活動力を缺けり。是れその受動的服從に安んじて攻

基督教の活動力はバイブルに在り

勢的態度を執る能はざりし所以なり。眞成なる基督教の活動力は必ずや之をバイブルに獲來らざるべからず。予請ふ歴史に徴して之を証せむ。十二世紀の頃、佛朗西の南部に起りし**ワルデンセス**の一派(開祖**ピーター・ワルド**の名に因みてかく稱せらる)は、バイブルを根據としてその説を立てたり。彼等は聖書を自國の語(即ち**プロヴァンス**語)に飜譯し。自由に之を解釋し。僧俗無差別論を主張し。洗禮と晩餐禮以外の五聖典を排斥し。不品行なる僧侶の司式せる聖典の不都合を鳴らし。赦罪券、及び死者の爲に捧ぐる祈禱の無効力なるを斷言したり。讀者は必ずや、その所説の**プロテスタント**主義に酷似せるを看て驚き給ふならむ。勿論彼等は宗教の倫理的側面に留意し、信と行との一致を重んじたり。此點に於ては彼等は**ルーテル**教徒に優りしならんと思はる。その後獨逸と瑞西蘭に於て改革主義の唱道せらるゝを聞きて、彼等は大に之を喜び、一五三〇年、使者を重なる改革家の許に遣して、四十七個の問題につきて其教示を仰げり。

ワルデンセスの説プロテスタントの教義に酷似す

彼等の意見プロテスタント教徒と投合す

迫害虐殺無辜の良民を亡ぼす

ジョン・ウ井ックリッフ

エコラムパヂウスと**ブーケル**は之に對して長文の答書を贈りぬ。彼等はその返答に基きて信仰告白文を起草し、新教徒と氣脈を通じて大に活動せんとせしが。此事早くも**フランシス**一世の聽聞に達し、迫害漸く加り、**トレント**宗教大會議の召集されし一五四五年に及びて殘忍非道なる虐殺行はれ、約六十日間に三千の男女小兒を屠り、生き殘れる男子を槽奴と爲しぬ。運良く一命を全ふせし者は概ね瑞西に遁れたり。

ルーテルの誕生に先だつこと恰も百年前、六十の高齢を以て世を去りし英國の**ジョン・ウ井ックリッフ**は、**オックスフオールド**大學の教授なりしが。國王**エドワード**三世及び有力なる貴族の庇護の下に、謂々の辨を振て羅馬教會に反抗し。僧侶社會の腐敗を攻擊し。儀式及び教義の重要なる部分を非難し。聖書を國語に飜譯したり。彼が此の如き過激の言説を敢てして尚羅馬教會の爲に罰せられざりしは何故ぞといふに、その頃は恰も法王が佛國の國境なる**アヴヰニヨン**

異端を恐れて屍を焚く

に囚擒せられし時代にして、且英佛兩國間に百年戰爭のありし際なるを以てなり。一四一五年**コンスタンツ**の宗教大會の決議に由りて、**ウ井ックリッフ**の墓を發き、その屍を焚きしは、寧ろ滑稽に類するの觀あり。その後**ロラーズ**(Lollards)の徒が、**ウ井ックリッフ**を擔つぎ、その說を曲解し、社會主義を唱へて失敗せしより、氏の說を祖述する者一時殆どその痕を絕ちしと雖も、**ヘンリ**八世朝の改革運動が、**ウ井ックリッフ**に負ふ所少からざるは、爭ふべからざる事實なりとす。

ヤン・フス

眞實に彼の志を繼ぎて起ちしは**ロラーズ**に非ずして**ボヘミア**の**ヤン・フス**なり。當時**ボヘミア**の朝廷は英國の王室と姻戚の關係ありしより、兩國人の交通稍々頻繁にして、青年學生の英國に留學せし者多かりき。**フス**夙に**ウ井ックリッフ**の著書を繙き、その說に私淑し。盛んに羅馬教會を攻擊し。その教理に反對を唱へしより。彼は終に**コンスタンツ**の會議に召喚せられたり。**フス**は**シギスムンド**皇帝の

フスはウ井ックリッフを祖述しルーテルの說はフスと暗合せり

保護券を懷にして其召喚に應せしに、帝は法王方の壓迫に餘儀なくせられ、無法にも**フス**を殺せり(**ルーテル**の誕生に先だつこと六十八年)。**ルーテル**云へるあり。『我は是まで知らずして**ヤン・フス**の說を主張し、且之を敎へたり。**スタウピッツ**も知らずして予に彼の說を敎へたり。要するに我等は不自覺的の**フス**黨なりしなり。**パウロ**と**アウガスチン**も全く**フス**黨なり』と。**ボヘミア**人、帝の處置の不法不義を憤りて、獨逸と戰ふこと二十七年の久しきに及べり。一四九八年**フロレンス**に於て非命の最後を遂げし**サン・マルコ**會堂の說敎僧**サヴォナロラー**は、**ウ**、**フ**兩氏とは少しく趣を異にすと雖も、僧俗共に古代の文藝に熱中して、豪奢淫靡に耽けれる**フロレンス**市に於て、遠慮會釋なく修道僧の制慾主義を說きて、道德を革新せんと計りし勇氣に至ては、實に賞するに餘りありとす。**サヴォナロラー**の殺されし時**ルーテル**は既に十六歲の少年なりしなり。

サヴォナロラー

上來述べし如く、加特力教會の細工的教義と、煩雜なる儀式と、

宗教大會議に由りて教會を改革せんとす

僧侶の專横且敗德とは、人心の深奥なる宗教的要求を滿足する能はずして、神秘主義の傳播を促がし。聖書的基督教の振作を喚起し。僧政反抗の輿論を蔓延せしめたり。法王の**アヴィニヨン**囚捕(一三〇九―一三七六)漸く終はるや。兩法王の確執起り、一四〇九年**ピザ**に大會議を開きて第三の法王を選擧し、前二者に代らしめんとせしに、兩法王辞するを肯んぜざりしを以て、一時に三法王の併立を見るに至れり。三人の法王が、何れも基督の代理、聖**ペテロ**の繼承者と稱してその教權を爭ひし奇觀は、天下の人心をしてその適歸すべき處に惑はしめ、識者爲政者の間には法王を輕侮する念を生せしめたり。

法王の威嚴地に墜つ

引き續きて開催されし**コンスタンツ**(一四一四―一四一八)**バセル**(一四三一―一四四九)の宗教大會に於て、法王の分爭は漸く落着せしが、當時の最大問題たりし教會内部の改革に至ては、終に何等の決議を見る能はずして了はれり。

ヒメネス僧正

惟り西班牙に於ては、識見卓拔なる**ヒメネス**僧正(Ximenes)の指導の下に改革を斷行するを得たり。**エラスムス**に一年後れて希臘語新約聖書の註釋を公にせしは此人なり。扨上擧の宗教大會に於て改革の必要を唱へし者は、俗人の間に多く、之に反對せし者は僧侶の間に多かりき。曩きに**フス**を焚き殺し。**ウイツクリッフ**の屍を發き。**サヴォナロラー**を亡ぼし。又**ワルデンセス**教徒の住みし二十二個村を燒き盡して無辜の良民三千人を屠殺したる頑冥なる羅馬教會は、未だ自ら改革の必要を認めざるなり。改革の氣運已に熟して而して自ら改革せず。萬民改革を要請して而して自ら之に應せず。左れば一五一七年**ルーテル**が改革の警鐘を撞くに及びて、天下翕然として之に趨きしは、蓋し大に其理由ありと謂ふべきなり。

改革の氣運既に熟す

マコーレイ卿嘗て加特力教國とプロテスタント教國とを較論して曰く。

歐洲列國中最も豐饒にして有望なりし境土も、羅馬教會の支配によりて貧窮に陷り、政治的の自由と智力的の活動とを失ふに至れり。之に反してプロテスタントの諸國は元不毛の地と稱せられ、蛮族の住處たり、餓死に至るまで、工夫と勞力とを積みて沃野に化せられ、加之幾多の政治家、哲學者、詩人を輩出せしとを誇れり。例せば伊太利と蘇格蘭とを比較せよ。此兩國に於ける天然界の狀態は如何ありしぞ、又四百年以前の有樣は如何ありしぞ。然るに今や羅馬の周圍にある境土とエデンバロ附近の境土とを對照せよ。法皇政治の影響如何は想既に半に過ぐるものあらむ。十六世紀の頃歐洲諸帝國中の首座を占めたりし西班牙が今やゞ落の極に陷りしと、又自然界の障害物多くして且其國域の甚だ狹小なる、和蘭の過去三百年來の進歩は、吾人に同一の學課を教ふるに非ずや。諸君が獨逸を遊歷して羅馬加特力の州より プロテスタントの州に移るとき、瑞西蘭に遊歩して加特力の區より プロテスタントの區に入るとき、愛蘭に於て加特力の郡より プロテスタントの郡に赴くとき、必ずや文明の程度に高低の差あるとを發見すべし。太西洋の彼岸に於ても亦同一の理法行はる。看よ合衆國のプロテスタント教徒はメキシコ。ペルー。ブラジル等の羅馬加特力教徒を遙かに凌駕して進みしに非ずや。又看よ下カナダの加特力教徒は、プロテスタントの活潑なる企圖と活動とに圓機せられながら、猶沈滯の狀況を守れるに非ずや。天下の大勢は斯の如し。然るに羅馬加特力教に從屬せる佛朗西人の獨り旺盛なるは何故ぞや。然り佛人は時々過激に失すと雖も、大國民たるを失はず。此は一見例外なるが如きも實は矢張上述の理法に洩れず。何となれば羅馬教國と稱するものゝ中、佛朗西ほど羅馬法廳の權力微小なるは、他に其比を見ざる所なればなり。（バーバー會社出版マ氏英國史卷之一、四十五頁）

第二編　獨逸の宗教改革

第一章　ルーテルの前半生

獨逸の宗教改革史は、其使徒たる偉人物の經歷、性行、思想、信仰と密着の關係を有するが故に、予は是よりルーテルの前半生に就きて畧述せんと欲す。

ルーテルの誕生

ルーテルの兩親は、ツーリンギア森林の近傍なるメーラ村の農夫なり。瑞西の改革家なるツヰングリーも、均しくアルプス山腹なる農夫の兒なれども、此には相當の資產ありて、彼には擔石の蓄なし。父ハンス・ルーテルはメーラ村にて生活の道を立つるに不便なりしより、鑛夫とならん目的にてアイスレーベンに移れり。その妻マルガレタが此處にてマルチンを擧げしは、千四百八十三年の十一月十日の夜なり。

夫より數月の後、**ルーテル**の一家は更に**マンスフエルド**に移住せり。

兩親の爲人

此地に來りし頃より、生活上に幾分の餘裕を生じ、相應の資產を積み、**ハンス**は遂に該市の一名譽職にさへ選擧せられき。但し此事は**マルチン**の稍々成人せし後の事にて、彼が幼少の頃は具に貧苦を嘗め、母と共に山林に入りて薪を拾ひし事など彼が後年の物語に見へたり。兩親共敬虔なる加特力教信者なりしが、母は信神の念特に篤かりし。父も勿論神を信じたれど、極めて坊主嫌ひの人なり。兩親が非常の苦勞丹精を以て其子女を養育せし事、又家庭と學校との別なく、子女を打擲する事は當時一般の風なりしとはいへ、父**ハンス**が**マルチン**に對することゝ嚴重に過ぎし模樣は、**ルーテル**成人後の物語によりて明かなり。扨も不思議なるは、此農夫婦が其愛子に高等の教育を授けんと志せし事なり。父**ハンス**の目的は、世間一般の父兄と等しく、只我愛子をして學問を以て身を起し名を擧げ、名譽利達の地位に立たしめんと欲せしに相違なからん。父**ハンス**が**マルチン**をして法律を專修せしめし事

父ハンスがマルチンに對する希望

と、**マルチン**が修道院に入りしを甚だ不快に感せし事は、即ち之を證するに足るべし。**ルーテル**は初め**マンスフエルド**に學び、後**マグデブルヒ**に移り、更に**アイゼナッハ**に轉じ、茲に三ヶ年を費しぬ。彼は所謂苦學生にして、具さに貧苦を嘗めしが、音樂の嗜好が緣となりて、該市の篤信家なる**コッタ**夫人に助けられしは、方さに此頃の事なりしなり。夫より彼は獨逸にて當時最も名高かりし**エルフルト**大學に入り、父の所望に從ひて法律學を修め、一五〇五年業を卒へて**マスター・ラヴ・アーツ**の學位を領し、夫より尙大學院に留りて尙深く法律の專修に從事せん目的にて、故鄕より**エルフルト**に還へりし後、醂然思ふ所ありて朋友に謀らず、父母の許諾をも待たずして、**エルフルト**なる**アウガスチン**派の修道院に入りぬ。時は一五〇五年七月十七日にして**ルーテル**時に年二十一。

エルフルト大學に入る

世を遁れて修道院に入る

心機一轉の由來

ルーテルの心機一轉は、彼が身を宗教界に投せんとする第一歩なれば、之を詳述するの要あらむ。但しその出家に就きては內外二樣の原

外面の事實

『疑惑は人を僧たらしむ』

内心の類的奮鬪

因あるが如し。外部の事情は充分明瞭ならざれども、概ね左の如し。**ルーテル**は**エルフルト**に疫病流行せし爲一旦歸省せしが、程經て**エルフルト**に還へらんとせし途中、劇しき雷雨に逢ひて大に駭き、我命は最早なきものと思ひしにや、突然『助けたまへ聖**アンナ**よ。吾は僧とならむ』と叫びぬ。彼は夫より二週間の後その誓に從ひて**エルフルト**の修道院に入りしなりといふ。此外種々なる傳說あれども、多くは信憑すべからざるものなり。然れども此は單に外面の事實にして、吾人は之を以て滿足すること能はず。**ルーテル**が此の如き誓約を咄嗟の間に爲すに至りしは、平生その心中に往來せる感想に基かずんばあらず。當時の諺に、『疑惑は人を僧たらしむ』といへり。想ふに彼は宗教上の問題につき、疑惑して決し得ざるものありしならん。**マクデブルヒ**。**アイゼナッハ**。**エルフルト**等にて受けし教育は、多少宗教的にして、教師は概ね僧侶なりしなり。彼は**エルフルト**大學にありしとき、その附屬圖書館に於て始めて拉丁語の聖書を讀みしといへり。彼は當時

『光明にあこがるゝ幼兒』

多側面なる趣味

深き心に強き煩悶を生ず

人の運命に關し、神及び**キリスト**に關し、就中自己の救につきて種々なる疑惑に包圍せられつゝ、深刻なる靈的奮鬪を經驗したりしなり。彼は**テニソン**卿のうたひし如く、『闇中に泣き叫ぶ幼兒、光明にあこがるる幼兒』なりしなり。堅氣一徹の父は、素より熱烈なる少年の心底に潛める疑を散ずるに由なく、又後年彼が『青樓とビーア・ハウスの集合處』と冷評せし**エルフルト**市、及びその粗暴放肆なる大學生の氣風が、**ルーテル**の煩悶を除去するに何等の効力なかりしや必せり。**ルーテル**がその法律書を捨てゝ**バイブル**を取り、世を棄て家を離れて內心の平安を得んと決心せし時の心の狀態は、正さに上述の如くなりしなり。**ルーテル**は音樂を好み、殊に笛を吹くに巧みにして、詩歌文學を愛せり。**ヴエルギリウス**。**プラウツス**。**テレンチウス**。**キケロ**等の詩文は彼の尤も好みし所なり。彼は宗教心深くして往々冥想に耽りしと雖も、而も愉快にして活動的なり。凡そ眞摯なる人間は、一たびその胸中に湧き來りし人生最大の疑問を等閑に附し去ること能はざるなり。彼は

（人生の行路煩悩は逆くべからず、要は解脱の道を得るに在り）

（エルフルト修道院内の指導者）

その目的を達する爲に、自己の安逸をも、富貴をも、名譽をも、學位をも全く打忘れて、修道僧となるの決心を爲しぬ。此の如き宗教上の疑問に惱まされし者、當時獨逸の諸大學生中、豈に獨り**ルーテル**のみと謂はんや。十六世紀といはず、獨逸といはず、現今日本の青年中にも**ルーテル**と同性質の難問に苦心する者擧げて算ふべからず。否苟も眞面目に此人世を觀じ、此宇宙を觀じ、而して自己の安心立命の地を見出さんと欲する者は、多少皆**ルーテル**と相似たる經驗を通過せざるを得ずと雖も、其結果に於ては天淵の差あり。或青年の煩悶は華嚴の瀑布に歸着し、他の青年の煩悶は無神無理想自暴自棄なる獸欲主義に陷り、**ルーテル**の夫れは**キリスト**の救、天父の愛に歸着したるの差あるのみ。

ルーテルが入りし**エルフルト**の修道院は、其名こそ**アウガスチン**派なれ、實は著名なる**ヒツポー**の監督聖**アウガスチン**の說きし福音主義の神學を敎ふるにあらずして、中世神學の舊套を守りしなり。當時該院の敎師として勢力ありし**ヨハン・ナチン**は**ガブリエル・ピール**。**ピーター・デーリイ**等を尊崇し、尙溯りては以上の二人が師とせし**オツカム**の**ウヰリアム**を祖述したる人なりければ、**ルーテル**もその敎に從ひて彼等の說を攻究したり。左れど**ルーテル**の目的は神學の研鑽に非ずして、自己の心靈の救濟を得るに在りしを以て、只辯論の巧妙を旨とする中世の神學說は、彼に何等の慰安を予ふる能はず。寧ろ當時の學者が、難解にして惑ひ易しとして斥けたる**バイブル**を、繙讀せんことを願ひしに、**ナチン**は宗規に由りて之を禁止したり。彼は最初の一個年は小僧として、その後は一人前の修道僧として有らゆる難行苦行を積み、祈禱、讀經、懺悔、斷食に餘念なく、又師の命ぜし如く諸大家の神學書を讀み渉りしと雖も、彼の心中に蟠まれる疑團は、未だ少しも氷解せず。彼は日夜罪念と戰へども、之を逐ひ拂ふ能はず。その心眼に映ずる神は依然怒りの神にして、慈愛深き天父にあらず。**キリスト**は恐るべき審判官にして、仁恤（あはれみ）ある救主にあらず。彼は茫然自失の境に立てり。彼は煩悶の餘り卒倒せしことあり。當時**ルーテル**は、肉落ち骨高く色蒼ざ

（在院中ルーテルの苦心）

向上的熱誠燃えて火の如し

ルーテル、スタウピッツに遇ふて始めて釋然

めし一青年なりき。抑も彼が斯の如く深く心を苦めしは何故ぞ。蓋し彼が罪に對せし觀念の極めて深刻なりしが爲なり。彼は、他人が見て以て何等の罪なしと爲し、點に罪を發見したり。何となれば彼は自らの德を神の德に比べてその間天淵の差あるを見て悲しみ、又自らの罪を神の聖きに照らして愈々自らの汚れたるに氣付きたればなり。嗚呼纖弱の人間を以て全能至聖の神に對し、心靈の救を完ふせんと欲する所謂向上心の熱誠、**ルーテル**の如く切實なるは罕なり。舊教徒が**ルーテル**を目して修道僧の苦行に堪へざりし懦弱漢と爲すは僻目の太甚しきものなり。**エルフルト**に於ける彼の同盟は皆その篤信を賞して、彼を『若き聖者』と呼ぶに至れり。

ルーテルが自ら筆紙に悉しがたしといへりしほどの苦悶に沈みつつありし際、彼に最も深厚なる同情を表せしは、**サキソニア**州に於ける**アウガスチン**派修道院の總督たりし**スタウピッツ**なり。**ナチン**の禁制を解きて**ルーテル**に聖書繙讀を許せしのみか、反てそを奬勵せしは

ルーテル大僧光明に接す

偉人の生涯には劃然たる變轉期あり

此人なり。信仰に由りて神に交るときは、人は神の義に與ることを得るてふ眞理を**ルーテル**に暗示せしは此人なり。**スタウピッツ**の慰安は**ルーテル**にとりて恰も大旱の雲霓に外ならず。彼は今や闇中に一道の光明を得たり。是より奮發一番、行を逐ひ句を辿りて、新約全書を熟讀玩味し、終に羅馬書四章以下に掲げられし**パウロ**の大議論に至り、彼は飜然として救の秘義に到達せり。古來偉人の生涯には劃然たる變轉期あるが如し。使徒**パウロ**は、**ダマスコ**の途上に**イエス**の幻影を視。**アウガスチン**は、**ミラン**庭園の無花果樹の下にありて天の啓示に接し。**アシシ**の聖者**フランシス**は、**ポルチオンキュラ**の禮拜堂に到る敷石を歩行せし際、天の召を蒙り。**カルヴァン**はその紀傳家が區々に推定する所の『或突然の改信』によりて新效に投じ。**ロヨラ**は、負傷の爲保養中、その家屋に異樣なる震動を感じて出家の決心を爲しぬ。予は信ず偉人の生涯にあらはるゝ突然の變轉は、その實内部的感想の發展に基く所のものなる事を。

ルーテル確信によりて起てり

ルーテルは確信によりて起てり。信仰により神の義に與る事を信せり。彼は救はれて內心の平安を得たり。要するに、彼が一個人としての宗教改革は**エルフルト**の修道院に在りしとき、既に成就せられたり。彼は尙その後も依然僧たる修業をつゞけ、且聖書研究に熱心したり。修道院を離れ、將た羅馬教會に反對せんなどとは當時彼が夢にも想はざりし所なり。然れども鋭錐永く囊中のものにあらず。彼は學問上にその才鋒をあらはすと同時に、又事務の才幹あることを示せしを以て、初見以來望を彼の將來に囑せし**スタウピッツ**は、屢々彼に大切なる教務を命せしが、一五〇八年同氏の計ひにて彼を**ウ井ッテンベルヒ**の修道院に移せり。此寺院は**エルフルト**のものよりも小なれども、彼をして同市に新設されし大學に教鞭を執らしめん爲、かくは轉住を命ぜしなり。

ルーテル、ウ井ッテンベルヒに移住す

扨此**ウ井ッテンベルヒ**といふは、有名なる獨逸七選帝侯中の長者なる**フリードリッヒ**侯の領分にして、**エルベ**河畔にある幾爾たる小邑なり。一五一三年の調に據れば、人口僅かに三千許、課稅し得べき家屋三百五十六戸ありしのみ。家屋概ね矮小にして、街衢も亦不潔なり。商業振はず、人民遲鈍にして、而も風俗は紊れたり。**メランクトン**は此地に來りて滋養物の得難きを喞ち、**ルーテル**は當市の繁昌を蟻蛭に譬へ、且風儀の惡しきを歎じて他に移住せんと思ひしこと一再に止まらざりき。此の如き一小邑の名が歐洲全土に響き、天下有爲の青年が東西南北より笈を負ふて集るに至りしは、一に此地が宗教改革の牙營たりしに由らずんばあらず。

ウ井ッテンベルヒの今昔

改革運動と新大學の隆盛

該大學は一五〇二年の創立にかゝる。**フリードリッヒ**選帝侯が此學校を起すに方り、顧問の任にありてその計畫を資けしは、侯の侍醫にして元**ライプチヒ**大學の校長たりし**マルチン・ポルリッヒ**博士と、前文に記せし**ヨハン・スタウピッツ**の兩人なり。**ポ**氏は文科の學長となり、**ス**氏は神學科の學長となりぬ。**ウ井ッテンベルヒ**大學はその初め微微として振はず。一五〇五年には學生の數五十六名に下れり。屢々

ウ市俄かに繁昌に赴く

閉校の相談が持ち出されしほどなるが、宗教改革の運動の開始せらるると共に、天下の耳目此新大學に聚り、俄かに勃興の氣運に向へり。

ルーテルと同時代の一學者**ウ井ッテンベルヒ**市は眇たる一小市のみ。人民の住家は極めてみすぼらしく、小さく、古く、且低き木造の家屋のみ。市といはんよりは一古村といはん方適當なり。然るに今や全世界より此地を指して來る者數知れず。或者は之を見んために、或者は改革家の謦咳に接せん爲に又或者は學問せん爲に來る」。一五二一年に一學生のかき殘せし記事あり。一讀吾人をして**ウ井ッテンベルヒ**の昔を偲ばしむ。曰く、『目下當地に滯在する學生約千五百人あり。殆ごすべての學生は行くにも、住まるにも、聖書を携帶す。彼等の中には**サキソニア**人あり。**プロシア**人あり。**ポーランド**人あり。**ボヘミア**人あり。**スワビア**人あり。瑞西人あり。**フランコニア**人あり。**ツーリンギア**人あり。尙その外の國々より來れるものあり。彼等は皆能く一

『全市學生に占領せられ且彼等に保護せらる』

ルーテル教授の任に當る

羅馬に派遣せらる

致和合して生活す。『全市恰も學生によりて占領せられ、又彼等に由りて守護せらるゝ如し』。又**メランクトン**がその一友人に送りし書中に、今日は吾家の食卓の周圍に、十一種の言語の混用せらるゝを聞けり。中には拉丁語、希臘語、**ヘブライ**語、**マヂアル**語、西班牙語等を語る者あり」と。**ウ井ッテンベルヒ**大學の盛況想半に過ぎむ。

ルーテルは最初、自ら好まざる辨証學と**アリストートル**の物理學を敎へしが、**ス**氏の推薦により往く々々神學敎授たるべき準備として、**ウガスチン**の神學を組織的に研究する事となれり。然るに一五一一年彼は**サキソニア**に於ける**アウガスチン**派修道院の爲に重要なる用務を負びて羅馬に派遣せらるゝ事となりぬ。此事は單に彼に取りて名譽なりしのみならず、後の改革運動に絶大の關係を及ぼせり。その發程は一五一一年の九月の末頃にして、その**サキソニア**に歸りしは一五一二年の二月なり。扨羅馬は西歐羅巴に於ける基督敎の中心點にして、聖**ペテロ**よりその法權を相續せりと稱する歷代の法皇が其居を

羅馬に入りし時の感想

『地獄の上に建てられたる都』

占むる所、且教會史上にその名聲を輝かし、高德を謠はれたる無數の傑僧、聖者、殉教者等の生死せし所なり。未だ伊太利の地を蹈まざりし以前に於ては、彼は羅馬に對して一種言ふべからざる崇敬の念を抱きぬ。故に彼が長き旅行の末雲霞・飄渺の中に、羅馬の都城を認めしとき、彼は覺へず『アヽ神聖なる羅馬よ。我汝を愛す』と呼ばはりしなり。然るに此都府に留まること百餘日、彼は日々古跡靈場を巡拜し、名僧知識と交を訂し、種々なる儀式を守り、又徐ろに僧侶及び市民の風俗、人情、信仰を視察せし中に、彼が羅馬に對せし崇敬の念は、漸次薄らぎて、驚愕と憤慨之に換はれり。終に羅馬を辞せんとするや。彼の炯眼は已にその眞相を看破せり。曰く、『若し此世界に地獄ありとせば、羅馬は恰もその上に建てられたる都府ならむ』と。彼後年或人に語りて曰く、『人ありて我に万金を贈りて抑留せんとするとも、我は羅馬行を癒せざりしならんと』と。以て彼が此旅行に由りて得たりし利益の莫大なりしを推測するを得べし。

正教授の椅子を占む

任務漸く重し

ルーテルの意見は中世神學と相容れず

ルーテルは**ウイッテンベルヒ**に歸りし後、更に神學の研究に從事せしが、一五一二年の秋、神學博士の學位を領し、教授の席に上りぬ。彼は先づ聖書註釋學の講座を受け持ちて、詩篇、羅馬書、加拉太書等を講ぜり。一五一五年以後、**ザキソニア**州及び**ツーリンギア**州に於ける十一の修道院を監督すべき任務を兼ね、懇切に各院の僧侶を教導したり。又**スタウピッツ**の勸に由りて彼は市内の會堂にて說教する事となりしが、その說教たる、全然中世神學者の舊套を脫却したる嶄新奇拔なる說教なりければ、市民は甚だ之を欣べり。

ルーテルは既に疑惑の境涯を通過して確信の盤石を蹈めり。而して彼が掬し得たる宗教的實驗が、當時一般に行はれたる羅馬教の教義と相合はざるは勿論、彼は**トマス・アックワイナス**が**アリストートル**の哲學に基きて、組織したる**スコラ**神學の誤謬を看破せしが故に、その神學の上に建てられたる教理信條が、純粹なる初代的基督教の教旨に背ける事を認めざるを得ざりき。然れども性來保守的にして愼重なる

保守的改革家

ルーテルの腦裡に新教神學の發展せし時代

中心的思想

ルーテルが座右を離さゞりし先聖

ルーテルは容易にその兩者の調和し得べからざる事を信ぜず。彼は**スコラ**神學者の句調に倣ひて自說を說明せんと努め、その不可能なるを見るや。中世獨逸の神秘派の慣用語を學びて自己の思想をいひあらはさんと企てたり。彼は改革家たるに似ず、出來得るかぎり舊きを守りて新しきを趁はざらんと欲せしなり。一五〇八年より一五一七年に至るまでの十年間は、その後彼が天下に道破せし**プロテスタント**教義が、彼の腦裡に於て着々發展し組織立てられたる時期なり。彼の神學の中心點は人は信仰に由りて義とせらるといふ甚深强固なる意識に存す。其神學は實驗に基くが故に、火あり。血あり。生氣あり。楚々として人の肺腑に徹す。彼が神學は**バイブル**本位なり。神學教授の椅子を占むるや。先づ聖**パウロ**の書翰と詩篇を講じ初めたり。彼は**ニコラス・ドリラ**の註釋を參考せしが、須臾も座右を離さゞりしは**アウガスチン**。**ベルナード**。**ゲルソン**(詳しくいへば**ゲルソン**村の**ジャン・シヤルリエー**、佛國アルドン又州に在り)等の著書なり。又彼は獨逸

パウロに歸れ

自覺が羅馬教の教理と相容れざる事を覺る

改革家として檜舞臺に登るべき資格備はれり

の神秘派中、殊に**ヨハン・タウレル**の說の、自說に酷似せるを見て驚きたり。彼は一五一五―一五一六年間に於て、熱心に神秘派及び**アウガスチン**の著書を研究し、尙進んで**パウロ**の書翰と對照し、己れが曩きに發見せし如くに感じたる救の說が、實は多くの先輩によりて唱へられ、且福音書の本旨に適合せるものなる事を確知するに至れり。是に於てか**アリストートル**を棄てゝ、**パウロ**及び**アウガスチン**に歸れとは、即ち**ウイツテンベルヒ**神學者の警語となりぬ。

ルーテルが自己の主張と羅馬教會の教義との間に氷炭相容れざる點ある事を自覺せしは、一五一六年の半頃より後の事なり。翌年の九月に至りて一層明かに此事を承認して、そを公衆の前に演說したり。**ウイツテンベルヒ**市は勿論、其近鄕に於ても彼は既に說教者として好評嘖々たり。彼は又大學教授として學生等の推重する所の一人物となりぬ。獨逸青年の笈を負ふて此地に學ぶ者、年と共に多からんとす。彼は經驗に於ても、學問に於ても、辨舌に於ても、將た文章に於ても、既に

公的生涯に入るべき資格備はれり。春秋を重ぬること正さに三十四回。

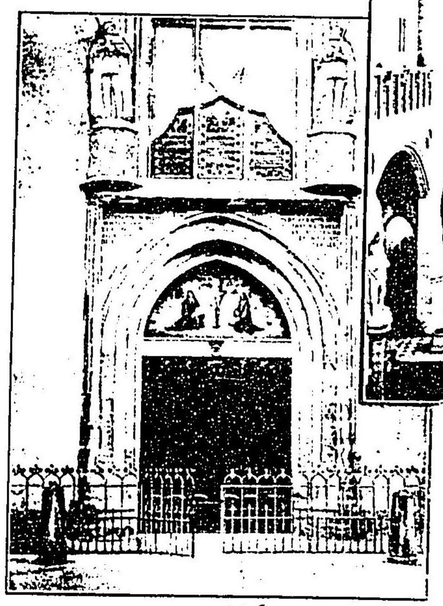
第二章　赦罪券の販賣—九十五個條の掲示及び其後の談判

宗教よりも藝術に熱心なる法王レオ十世

一五一三年法王ジユリウス二世の崩御せらるゝや。僧正會議は伊國フロレンスの豪族ロレンゾードメデチの第三子を其相續者に選擧したり。宗教よりも寧ろ藝術に熱心なるレオ十世即ち是なり。當時法王の收入は、歐洲の諸帝王に超越して約二百五十萬圓の巨額に上りしと雖も其生活の豪奢にして交際費の莫大なりし爲歲入の不足を告ぐるを常としたり。況んや先代法王が着手したる聖ペテロの大伽藍

ルーテルの書齋及び其机

同會堂の内側
（右側にルーテルの墓左側にメランクトンの墓あり）



九十五個條を掲示せしウヰツテンベルヒ城附屬會堂の門扉

ヨハン・テッツエル

ルーテル、九十五個條を掲示して討論を挑む

の建築は、年々鮮らざる經費を要するに於てをや。是等の不足を塡充せん爲に**レオ**は赦罪券の販賣を開始せり。獨逸に於て其販賣を引受けしは、**マインツ**の大監督**アルブレヒト**なりしが、彼は更に**ドミニック**派の修道僧**ヨハン・テッツエル**に命じ、諸方を巡廻して之を賣り捌かしめたり。**テッツエル**は世故に熟したる老僧にして辯才あり、到る處歡迎せられて愚夫愚婦の心を收攬せしが、諸侯等は之を喜ばず。**フリードリッヒ**侯の如きは**テッツエル**の領外に入ることを禁じたり。左れど侯の領地は犬牙錯綜して他領と相接すること密切なるを以て、**テッツエル**は侯の禁止令に依りて痛痒を感ずること少し。彼が**ウ井ッテンベルヒ**を去ること僅かに數十町なる、**ユーテルボック**に(**マグデブルヒ**の領分に屬す)來りし時の如きは、**ウ**市の人民殆ど家を空ふして**テッツエル**の說敎に隨喜し、且つその券を購へり。**ルーテル**此有樣を目擊して憤慨禁ずる能はず。終に一五一七年の十一月一日即ち近鄕より人の多く集合する諸聖人の祭日を擇びて、該市城附きの敎會の門扉に九

印刷せられて歐洲各國に散布せらる

十五個條を掲示したり。此九十五個條は、主として赦罪券に關する彼の意見の大要を列擧し、且その弊害を指摘し、尚此問題に就きては博く世間有識者の批評を求め、親しく來會し得る人々と討論を交へむ考へなりしなり。此の如き事は當時の習慣に徴して毫も異とするに足らざる事件なりとす。強いて他の場合と相違せる點を求めんか。そは彼が提出せし問題の、頗る實際的にして貴族にも一般人民にも了解し易きのみならず、彼等が直接に其利害を感じつゝある事件なりし點に存するのみ。原文は拉丁語なりしに、やがて獨逸語にも飜譯されて印刷に附せしが、諸方よりの申込續々輻輳して、之に應じ兼ぬるほどの繁昌を呈せり。三千言を超えざる一小冊子は數週間を出でざる中に、翼を張て獨逸の各州をはじめ、歐洲諸國を飛び廻りつゝ、遂に巍然として**チベル**河畔に聳ゆる法王殿を襲へり。赦罪券の賣行は此小冊子の爲に殆ど中止の姿となりぬ。然らば**ルーテル**が掲示せし此爆裂彈的の九十五個條は、如何なる名文なりしかといふに、その理論より見るも、將

法王の態度

手應へある駁論

たその文章よりいふも、彼がその後公にせしものに比して反て見劣りする程のものなり。然れども彼の特色たる俗人的態度と、鋭敏なる判斷と、高尚なる道念と、信仰によりて義とせらるゝといふ確信とに基きて、赦罪券販賣の弊害と不道理を指彈せし點は、世人をして一讀其大膽に驚かしめ、再讀その道理に首肯せしめたるなり。

マインツの大監督より送附し來れる書翰並に九十五個條の印刷物により、始めて此事を耳にせし法王は、修道僧仲間の一悶着に過ぎずと信じて、雲煙過眼の態度を持し、**デッツエル**は一友人の助力を得て九十五個條に對する辯駁書を公にし、事已に落着せし事と思惟したり。**ルーテル**と同派の修道僧の間にも彼の言論を以て過激輕卒の嫌ありと思ひし者寡からず。但しその駁論中尤も手應へありしは、**インゴルスタット**の**ヨハン・エック**博士と、羅馬市の宗門裁判所の審判官なる**マッツオリニ**といふ修道僧の草せしものなり。一五一八年の春**ルーテル**その反駁書を公にせしが、此は曩きの九十五個條と異りて頗る周到に

考究し、且念を入れて起稿せし論文なり。此論文題して斷案錄といふ。彼は十三世紀以來、幾多の法王等が實行し來りし赦罪券の販賣を不道理として非難し、又中世の神學者等が之につきて構成せし辯解に、公然不同意を唱へたり。彼が九十五個條を掲示するや。實は此問題に關して討論熟議を求むる意見なりしに、世論の沸騰豫想外に劇しく、自己の意見を速かに決着して、之を公にせざるべからざる場合に立たされしなり。斷案錄の發表によりて**ルーテル**の立場は明瞭となりぬ。然り羅馬法廳の意見と氷炭相容れざること已に公然の秘密となりぬ。羅馬法廳は斷乎たる處置に出づるか。或は有耶無耶の中に理り去らんか。二者何れかを擇ばざるべからず。

ルーテルの反駁書『斷案錄』

吾人は此事件の進行を舒するに先だちて、少しく赦罪券の性質歷史につきて略述する所あらむ。

赦罪券制度の由來

一見不道理千萬と覺しき赦罪券の販賣も、遠くその由來を尋ぬれば、相當の理由存するなり。抑も初代の教會に於て、重大なる罪惡を犯し

し者あるときは、教會はその者を破門して聖徒と絶交せしめたり。若し其人懺悔して教會に復へらん事を願ふときは、會衆一同の面前にて公けにその罪を告白せしめ、尙その上に懺悔の證蹟をあらはさしむ。斷食、施與、奴隷解放等の事是なり。之を罪の贖償（つぐのひ）といへり。如上の贖償の輕重は教會の會議にて之を定めしが、その懺悔の眞實にして僞りなき場合、又はその人羸弱にして長き斷食に堪へがたき場合にありては、往々その贖償を輕減し、又は贖償の種類を變更せしことあり。その後教會愈々膨脹して諸事複雜となり、僧俗の職掌明らかに區劃せらるるや。元會衆の前にて爲しゝ公けの懺悔は止みて、僧侶に對する秘密懺悔行はるゝに至れり。僧侶が肆まゝに犯罪者を取扱ひて贖償の輕重を過たざらん爲に、精密なる規定作られ、罪の重きものは贖償も隨て重く、數個年に渉りて之を課せらるゝと雖も、その輕き者に至りては、情狀の酌量によりて輕減せらるゝが一般の習にて、讀經、祈禱、施與等の度數を加減せられ、中には罰金にて濟まさるゝ事あり。此罰金の制度は

罪の贖償

秘密懺悔の始め

罰金の習慣

敎罪券の原因

巧妙なる代贖論

古くよりゲルマニ人種の間に行はれし風習より來りしものゝ如し。彼等の間には殺人犯さへ罰金（ヴェール、ゲルド）にて赦せし例ありしなり。又中世の頃より、贖償の新法として聖處巡拜、及び寺院寄附金の功德を說きそめぬ。寺院に喜捨する所の金に減罪の功德ありと信ずるに至りし事は、即ち敎罪券の原因なり。初め罪人に對する贖償の輕減は、僧侶の手に委ねられしが、後監督の職權に移され、更に代を經て法王一人の掌中に專有せらるゝに至りき。

然るに十三世紀以來神學者等は、如上の習慣に種々巧妙なる理窟を附して、愈々そを複雜ならしめたり。その一說にいはく、聖徒の善行は共有物にして、甲の剩れるを以て乙の足らざるを補ひ得べしといふ說なり。即ちキリスト一人の死は、萬人の罪を代贖する功德あるが如く、聖者等の非凡なる德行は、彼等自身の罪を贖ふに餘りあるが故に、そを融通して他の罪業深重の凡夫の罪を贖ふを得べしといふ說を生じぬ。此は平安朝の末頃良忍が說きし融通念佛の說と相似たり。而し

永久の刑罰と一時的の刑罰

てキリスト及び既に天に在る所の聖者を始めとして、尙世にある所の聖者の善行美德の積りつもりて餘れる處のものは、悉く法王の指圖によりて何人にでも自由に分與せらるゝを得べし。敎罪券はそを頒布する方法として適當のものなりとは、十五六世紀の頃世間一般に信せられし所なり。

更に奇怪なるは、尤も多く人間の小刀細工を加へたる懺悔禮なり。此禮は羅馬敎會七聖典の一として尊まる。その順序は始め懺悔、告白、贖償、敎免の四ッに分れしが、その後敎免と贖償とはその順番を顚倒せり。扨て以上の手續を經たらんには、罪人は全く救されて救に入る事を得べきかといふに然らず。斯の如くせば永遠の刑罰を免かるゝを得べしと雖も、一時的の刑罰は尙脫する能はず。そを脫せんには、別に贖償を爲さゞるべからず。而してその贖償は神の義に照らしてその適否を定むべきが故に、僧侶と雖も之を明言すること難し。若し其贖償に不足あらんか。其人は死後煉獄に於て之を償はざるべからず。

悔改と後悔

赦罪券の功德

此の如き憂なく、且預じめ煉獄の苦を避けんと欲せば、宜しく赦罪券を購ふて滅罪の道を安全ならしむべきなり。又說を爲して曰く、懺悔に二種あり。一は眞に心の奥底より發するものにして、他は卑しき利害の念に基くものなり。一は悔改といふべく(Contrition)、他は後悔(Attrition)と稱すべきのみ。後悔丈にては不充分にして永遠の刑罰を免かるゝに足らず。左れば告白及び赦免禮の功德に依賴して一時的の刑罰を免かるゝやうに心がけざるべからずといふ。中世の僧侶が人民の宗教的畏怖心を巧みに翻弄して、自在にそを操縱せし手際驚歎の外なきなり。理論上よりいへば、赦罪券の功德は元一時的の刑罰と、其結果たる煉獄の苦を免かれしむるのみにして、永遠の刑罰と罪業を滅する上に何等の關係なきものとせられしが、漸次兩者の上に効力あるが如く吹聽せらるゝに至れり。

赦罪券に關する教理思想の發展は概ね上述の如し。兎に角此は危然たる中世の神學系統の一部を形造れるものなり。一部の破毀は全

意味深長なる時事問題

ルーテル國民の輿論を代表す

部の崩壞を來たさずとするも。事、法王の教權と利益に關すると大なるを以て、決して些事として默笑に附するを得ず。況んや天下の輿論喧々囂々として鼎の沸くが如く、贊否の論、辨難の聲霰の降るが如く、**ルーテル**の一身に蝟集するに於てをや。彼は、多數の獨逸人が暗々裡に憂慮し、憤慨し、或は疑惑しつゝありし適切なる時事問題を拉し來て、その耳目を聳動したるなり。彼は**エラスムス**のいへりし如く、僧侶の胃袋を攻擊し、羅馬法王の三層冠に觸れたるなり。波瀾の小ならんことを冀ふも、豈得べけんや。

討論問題の個條書を教會の門扉に貼附せし時は、彼は一個單獨の修道僧に過ぎざりしが、數個月の後、彼は輿論を代表すべき公的人物となりぬ。彼の背後には同僚あり、學生あり、又多數の學者、貴族、人民ありて、陽に陰に彼を擁護せんとす。特に終生一たびも直々會見するの機なく、又個人としては死に至るまで舊き信仰を守りし**フリードリッヒ**選帝侯の扶翼は、**ルーテル**をしてその生命を全ふせしめたる最大原因な

法王ルーテルを羅馬に召喚せんとして成らず

り。設し彼をして一個の修道僧ならしめば、羅馬法王の絶大なる權威を以て彼を挫折し、彼を沈默せしめ、將た彼を血祭するに於て何の困難かあらむ。侯の保護と國民の輿論とは、**ルーテル**に對する法王の處置を甚だ困難ならしめたり。羅馬法廳の意見は、彼を以て法王の職權に容喙する所の異端者と爲し、一五一八年七月彼を羅馬に召喚する事に決せり。彼その命に應じて羅馬に赴きたらんには、生きて歸へらん望みなし。彼はその友人にして**フリードリッヒ**侯の秘書官たる**スパラチン**に諮れり。**スパラチン**は侯に訴へ、侯は又**マキミリアン**帝に奏上せり。是に於てか羅馬召喚は見合せとなり。その代りに獨逸に駐在する法王の使節**カエタン**僧正と、**アウグスブルグ**に於て會見する事となりぬ。

カエタン僧正とルーテルとの會見

カエタン僧正と**ルーテル**との會見は十月十二日に始りて十四日に終れり。僧正は初め温容甘言を以て**ルーテル**を說諭し、その異說を速かに取消し、將來に於てまた之を唱へず、且敎會を騷動せしむべき一切の行動を愼むべき事を誓はしめんとせしが、彼は聖書と敎父等の說と法王の命令と正當なる道理とに反せし事を唱へし覺えなしと言ひて、取消を拒めり。（敎父等の說と法王の命令の信ずべからざる事は、彼この後に至りて之を悟りしなり）。是に於てか、**カエタン**は柔和なる態度を捨てゝ、强硬手段を執り、屢々大喝して**ルーテル**を威嚇し、その辯解を聽かず、遮二無二彼をして自說を取り消さしめんとせしが、**ルーテル**頑として從はざりしより、談判は不調和に了り、**ルーテル**は恰も九十五個條揭示の一周紀に**ウヰッテンベルヒ**に歸着したり。彼は**アウグスブルグ**を去るに先だちて、再三**カエタン**僧正に書を奉りたれども、何等の返答なかりき。『奇怪なる空想を懷ける眼光鋭き獨逸の獸奴』とは、僧正が怒に乘じて**ルーテル**を罵りし言葉なりき。**ルーテル**は歸校後直ちに**カエタン**との會見始末書を公にせしが、彼に同情せる輩は皆その態度の男らしかりしを賞し、暗に伊太利人が獨逸人に對する傲慢無禮に激昂せり。**ルーテル**の評判高まると共に、是まで微々として聞ゆる所

カエタンの早變り

『獨逸の獸奴』

ウ大學の繁昌

なかりしウヰッテンベルヒ大學の名聲俄かに天下に嘖々たり。該大學は新事件の火元にして、ルヽ氏はその張本人なれば、フリードリッヒ侯もそを斜らず嬉れしく思召され、爾來氏の一擧一動に注意し、萬一の場合には其重要なる地位を賭して氏を保護せんと決心し給へり。左れば羅馬方にてルーテルを處置せんとせば、先づ侯の同意を得たる後にあらざれば不可能なり。元サキソニアの貴族にしてその頃法王廳の侍從僧を務め、スパラチンの友人にして且フリードリッヒ侯の信用を得たるミルチッツが其撰に當りしは、之れが爲なり。彼獨逸に入りて赦罪券問題に關する世論の向背を窺ひしに、五人の中三人までルヽテルの味方なるを發見して驚き、威壓手段を用ふるの不得策なるを信せり。彼フリードリッヒ侯に謁して法王の親翰並に黄金薔薇の勳章を呈し、懇懇の次第を縷述せり。又侯の顯官、ウ市の役員等へも皆贈物を配りぬ。かくてアルテンブルヒに於てルーテルと會見するや。ミルチッツは柔和謙遜を旨として彼を厚遇し、テッツエル等の言を不當と

ミルチッツの懐柔手段

エック博士論戰を挑む

ユダの接吻

し、ルーテルの義憤に同情し、先づその感情を柔げ置きて後、法王に謝罪的の書翰を裁せん事に同意せしめたり。ルーテルはその約束の如く、極めて謙讓にして穏和なる一書を法王に上れり。若し羅馬法廳及びルーテル反對家がミルチッツの處置に贊同して之を助けたらんには、彼は圓滿に此事局を治め得たらんやも未だ知るべからず。然るに事志と齟齬せし爲、ミルチッツの苦心もあはれ水泡に歸せんとせり。況んや曩きにルーテルの九十五個條に駁擊を加へしインゴルスタット大學のエック教授は、怒髪冠を衝かんとする勢にて、彼に論戰を挑みつつあるに於てをや。ルーテルも一時はミルチッツの甘言に魅せられしが、省慮の末大に之を憾み、袂別の際ミルチッツに強いられし接吻をユダの夫れに比するに至れり。

第三章　ライプチッヒの討論

エック博士の人物及び學殖

カールスタットの飛入

ライプチッヒの討論は一五一九年の六月下旬より七月中旬に渉れり。**インゴルスタット**大學と**ウ井ッテンベルヒ**大學とは元來競爭の姿にて、その間柄圓滑ならざりしを以て、**ルーテル**の友人なる諸教授彼と同行し、二百名許の學生は武裝して護衛の任に當れり。**エック**博士は當時知名の神學者にして殊に雄辯を以て聞ゆ。年は**ルーテル**より二歳の弟なるも、後者の痩せこけて骨々しきに反し、彼は躰軀肥滿なる偉丈夫なり。其風采は學者より軍人に適せり。口を開けば、音吐朗々、破鐘の如く、往々詭辯を弄して傍聽せる彌次馬の喝采を博するに妙を得たり。但其學殖才氣共に侮るべからず。扨此討論會のとき、**ウ井ッテンベルヒ**方を代表せしは**ルーテル**一人にあらず。其同僚にして寧ろ先輩なる**カールスタット**も亦之に加りしなり。九十五個條の掲示されし頃、**カ**氏は羅馬にありしが、歸鄉後**ルーテル**の人望盛んなるを見て少しく嫉妬の色あり。自らも百五十二個條の掲示を試みて陽に**ルーテル**を扶け、陰にその名聲を凌がんと欲したり。**カ**氏はその後、終に**ルーテル**と爭ひて過激なる再洗禮派に投ぜし人なり。

腹黑きエックの魂膽

蹴て論敵**エック**の魂膽如何と窺ふに、彼は素より理論を戰はして、眞理の歸着する所を看んとするの公平なる態度を執らず。只辯舌に由りて**ルーテル**を論破し、彼をして尋常に降參せしむるか。左なくば底の底まで彼を追ひつめて異端者たる正體を天下に曝露せんと欲せしなり。

論戰は先づ**エック**と**カールスタット**の間に開かれしが、**カ**氏は到底**エック**の敵手にあらず。七月四日より**ルーテル**と**エック**との顏合せとなりて討論數回に渉れり。**エック**が攻勢を取り、**ルーテル**が受太刀となりしは事實なり。論破策の不可能なるを看るや。彼は乃ち窮追策に變せり。彼は縱横無盡に質問の矢を放てり。**ルーテル**は竟に彼が最後の堅壁と頼める、聖書と道理てふ立場によりて禦がんと試みたり。彼は既に法王の教權を否定し、歴代の法王等の指令書に誤謬ある

ルーテル宗教大會の決議に過誤あるなを斷言す

事、及び初代の宗教大會が法王の無上權を承認せざりし事を明言したり。討論中**フス**の名のあらはるゝや。**エック**はすかさず切り込んで、『然らば足下は**フス**を異端者と見做さるゝか』と問へり。**ルーテル**が之に應へて**フス**の唱へし教理の中に、明かに基督教の眞理と認むべきものゝ存する事、即ちその眞理は加特力教會と雖も譴責すべからざる事を斷言するや。彼は然らば『足下は**コンスタンツ**の大會が彼を異端者として彈劾せしを誤と思惟さるゝか』と肉薄せり。**ルーテル**此場に臨んで如何んぞ避易すべき。彼は斷乎として『然り宗教大會と雖も過ちしことあり。今後とても之れなきを保すべからず』と答へたり。嗚呼**ルーテル**は既に**ルビコン**河を渉れり。羅馬教會内には、最早かゝる大膽不敵の異端者を容るべきの地なからむ。**エック**は**ルーテル**の天地容れざる羅馬の教敵たる事を明示し、且つ自ら羅馬に急行して破門狀の發布を促がしつゝあり。**ルーテル**は自ら豫期せしより以上に論歩を進めしことを知れど、今更退却すべくもあらず。彼は最早聖書と道

ドグマ主義と合理主義の兩刀使ひ

理てふ盤石の上に立ちて、獅子の如く奮鬪し、成行を神に委ぬるの外、他に取るべきの途なきを信せり。（アゝ聖書と道理。一は**ドグマチズム**の端を開き、他は合理主義の基礎となる。教權一たび教會の手を離れてより、論爭百出底止する所を知らず）。彼の勇氣は一難を經る毎に一倍し來りて、終に決死の大勇氣を振はんとす。史家某評すらく、『**ミルチッツ**との會見の時ほど**ルーテル**の柔和なりしことなく、**ライプチッヒ**討論會の後ほど彼の勇壯なりしはなし』と。彼は**エック**の追窮に遇ひて始めて自家の立脚地を知了すると同時に、世人をして又之を知了せしめたるなり。

第四章　ルーテルの聲援者

斷じて行へば鬼神も之を避くるとかや。**ライプチッヒ**の會議にて**ルーテル**の態度愈々明確となり、羅馬教會が彼を嚴罰に處せんといふ噂頻りに傳はるや。獨逸人民が彼を景仰して其擧を扶けんとする精神、一層强固となりぬ。又人文學者の**ルーテル**に聲援せんとする意向も、亦此頃に至りて始めて明瞭になりぬ。抑も人文學者は中世の神學を墨守せる加特力教の僧侶とその意見の合ふべき筈なし。殊に獨逸に於ける人文學者の巨擘なる**ロイヒリン**が、頑冥なる僧侶輩の爲に喧嘩を吹きかけられし以來、兩派の反目一層甚しくなりぬ。人文學者の中には自ら二種の人物あり。一は靜かに古文學の普及を計り、且科學的精神を社會に鼓吹せんと欲する者にして、**エラスムス**、**ロイヒリン**、**メランクトン**等之を代表せり。他は昔し希臘羅馬に行はれし自由討究の精神を以て、當時の制度習慣を批評攻擊し、之に由りて種々なる革

斷じて行へば鬼神も之を避く

人文學者の聲援

人文學者に二種類あり

新を實行せんと欲する者にして、**ウルリッヒ・フォン・フッテン**は即ちその適當なる代表者なり。如上の相違はあれど、北歐の人文學者は、南歐の夫れに比ぶれば、頗る眞面目にして、宗教的傾向を有せり。**ルーテル**の如きも人文學の感化を受けて、古代羅馬の詩人文豪を慕ひしが、希臘語の造詣深からざりしと、早くより宗教問題の研究に專らなりし爲、彼は人文學者の列を脫して宗教改革家となりぬ。一人にて此兩方の資格を兼ねしは、彼の親友にして同僚なる**メランクトン**なり。

予は茲に**ルーテル**に次ぎて獨逸の宗教改革のために赫著なる功勞ありし**メランクトン**の小傳を舒せんと欲す。

メランクトンの小傳

フ井リップ・メランクトンは獨逸人文學者中の巨擘にして殊に**ヘブライ**語に長せし**ロイヒリン**の姪孫なり。彼は大伯父の推薦により、希臘語の教授として一五一八年**ウ井ッテンベルヒ**大學に來れり。一四九七年二月十六日を以て獨逸の**ブレッテン**(今の**バアデン**大侯の領內)に生る。其父は精巧なる甲冑師にしてその州の諸侯に召抱へられ、又

メ氏少ふしてロイヒリンに發ほる

十七歳にしてマスター・オヴ・アーツの學位を得たり

嘗て獨逸皇帝の勅令を奉じて甲冑一組を製作せし事あり。母は即ち**ロイヒリン**の姪にて淑德の婦人なり。**フ井リップ**十歳の時、父は其妻と五人の子供を殘して世を去りければ、**ポルツハイム**に在りし**ロイヒリン**、長子**フ井リップ**を引き取りて彼を敎育することゝなりぬ。是れ此神童が、その天才を發揮すべき最初の好機會なりしなり。

一五〇九年**フ井リップ**は**ハイデルベルヒ**大學に入り、三年の後此校を卒業して**バチエラー**の學位を受け、夫より**チユービンゲン**に轉じ、一五一四年十七歳にして**マスター**の學位を領せり。當時**チユービンゲン**大學に人文學の良敎師ありしより、彼は此方面に向て長足の進歩を爲しぬ。卒業後直ちに**チユービンゲン**大學に於ける古語の敎師に任せられたり。保守主義の**スコラ**神學者と**ロイヒリン**の間に爭論起りしとき、彼は深く叔父に同情を寄せて中世神學者の頑冥を惡めり。彼が改革運動に向て一歩を進めたるは、此時にありと謂ふべし。

メランクトン弱冠にして其才學既に一世を傾動するの概あり。叔

メランクトン肖像
（畫伯デ＃ーレル寫）

三大學競ふて此少年學士を聘せんとす

希臘語に於てはルーテルの先生

父**ロイヒリン**はその非凡なる天才に驚き、その頃人文學者の泰斗と目せられたる**エラスムス**も亦口を極めて彼を賞賛したり。**メランクトン**の才名喧傳せらるゝにつれ、彼を招聘せんとせしは、**インゴルスタット　ライプチッヒ　ウ井ッテンベルヒ**等の大學なりしが、彼は古くして且大なる他の二大學の招きを辭し、創立日尚淺くして萬事不整頓なる**ウ井ッテンベルヒ**大學に赴任するに決せり。其時年漸く二十一歳。赴任匆々、彼は青年講學法の改良てふ演題にて一場の演說を爲し、大に同僚及學生等の喝采を博せり。就中**ルーテル**は最初より博學にして信實なる一友を得たるを悅びぬ。希臘語に於ては彼は優に**ルーテル**の先生なりしなり。一五一八年の末より**ルーテル**の世を去りし一五四六年に至るまで約三十年の間、此二人の交誼終始親密にして渝ほることなく、肝膽相照らし、長短相補ひて、改革運動の爲に盡瘁せり。

扨人文學者等が一時筆を揃へて**ルーテル**に聲援し、羅馬教會に向て一齊射擊を試みし時の勢は、その凄しさ言はん方なかりき。當時既に

人文學者ルーテルの擧を賛成す

フッテンの小傳

頽齡に傾けるロイヒリンは、私かにルーテルの擧を嘉みせしも、爭論を懶しとして之に與せず。碩學エラスムスはルーテルの書翰に答へて暗に翼賛の意をほのめかし、(エラスムスのルーテルに對する態度の變せし事は後章にあり)。ルビアヌスは遙かに伊太利より書をルーテルに寄せて、天下公衆の望を彼に囑せる事を告げ、且人民の輿論を後楯として羅馬法廳と戰はん事を勸めたり。

獨逸の人文學者中、勇壯なる援助をルーテルに申込みしものはフッテンなり。フッテンは年壯氣鋭の士なり。彼エラスムス及びロイヒリンを尊び、文章を作り、詩を賦すと雖も、野心勃々として到底書齋に靜座し得る人物にあらず。最初ルーテルの騷動を耳にするや。單に僧侶間の捫着として顧みざりしが、ライプチッヒ討論以後其擧の大に國運の消長に關するものあるを見るや。蹶然起て之に投せり。著作數種あり。詩に於て殊に妙を得たり。一五一七年皇帝陛下より獨逸詩宗の月桂冠を受く。一五一九年の冬、一書を著はして羅馬教會を諷刺

フッテンの奇文

シッキンゲン

ルーテル武力的援助を排斥す

し、痛快冷刻を極む。その中に三づくしの奇文あり。曰く、『ローマより放逐せらるべきもの三あり。正直と穩和と廉潔是なり。巡禮者がローマより携へ歸るべきもの三あり。汚れたる良心と不消化と空財布是なり。ローマの尤も恐るゝもの三あり。帝王及び諸侯の一致團結と人智の開發と自己の瞞着手段が露顯する事是なり。ローマにて擯斥さるゝ事三あり。貧乏と敬神と正義是なり』と。全篇の語句概ね此類なり。フッテンの友にフランツ・フォン・シッキンゲンあり。彼は當時獨逸の騎士中にて鋒鋒たる人物なるが、ルーテルの擧の政治に關係あるを見て奮て之に加はりぬ。一五二〇年の始め羅馬教會のルーテルを窮迫すること愈々急なるを見て、危害の彼に及ばんことを慮り、ルーテルを己が城内に引取りて自ら防衛の任に當らんと申越せしことあり。シッキンゲン、フッテンの徒は動もすれば武力を以て羅馬に反抗せんとする氣構へありしなり。ルーテルにして若し彼等に擔がれたらんには、切角の改革運動も一喜劇に終りしならんも、ルーテル

人文學者の聲援頼むに足らず

は疾く彼等の立脚地が自己の立場と異れるを看破し、一切武力の援助を斥け、徹頭徹尾聖書を盾として羅馬教會と戰はんと決心したり。

左れば人文學者の聲援は、一時改革の運動を進むる上に多少の補益ありしに拘はらず、兩者は決して永久の朋友にあらざるを明示せんとす。此運動のやゝ過激ならんとするや。彼等の多數は種々なる口實を設けて分離し去れり。勿論終りに至るまで改革運動の爲に忠實なる助力を予へし者なきにあらざりしも、そは極めて小數なりき。**エルフルト**大學の校長**スペングレル**の如き、**ウヰッテンベルヒ**大學の神學教授となりし**ユスツス・ヨナス**の如き即ち是なり。

ルーテル破門を覺悟す

斷乎たる決心

第五章　開戰の喇叭三聲——ルーテルの論文

ライプチッヒの討論の結果は、**ルーテル**をして羅馬教會と分離する最後の決心を爲さしめたり。法王の破門狀日ならずして彼の頭上に降らんとす。然れども彼は殺鰊として屠所に就くの羊たらんことを願はず。左手に**バイブル**を握り、右手に道理てふ利劍を執て、大喝一聲、是非を天下、少くとも祖國の同胞に訴へんとす。一五二〇年七月、彼は**スパラチン**に書を寄せて曰く、『殺子は既に投げ出さる。予は最早羅馬の厚情と憤怒を兩つながら度外視す。予は彼等と調停を圖り又通信せん事を願はず。彼等我書類を焚かんと欲せば、その爲ずがまゝに任かさむ。左れど予にも亦火あり。之を以て、有らゆる異端を假裝する所の法王の教書を焚き拂はんのみ』と。その決心の確固なりしこと推して知るべきのみ。

開戰喇叭の第一聲

愛國の熱誠と羅馬に對する憤慨とが此檄文と成る

『獨逸國の基督教徒たる諸侯に奉るの書』は、彼が吹奏せし開戰喇叭の第一聲なり。倉卒の中に起稿せしものなれども、立論巧妙にして覇氣横逸、筆佳境に入れば、往々風雲を喚び起すの概あり。有らゆる側面より僧侶政治の弊害を罵詈痛論し、獨逸諸侯の助力を藉りて法王殿の魔窟を襲はんと企てしなり。從來同種類の書を公にせしものなかりしにあらず。エラスムス。フッテンの著書の如きは是なり。然れども彼等は皆拉丁語を以て記せしものなれば、そを閲讀し得るものは、學者僧侶に限りて一般の俗人に知られざりしが、今やルーテルは拉丁文のものゝ外に、極めて平明にして活氣ある獨逸語のものを出版せしを以て、その販路廣く、隨てその感化も亦深大なり。如上の小冊子の如きは、一週間を出でずして四千部を賣り盡し、數臺の印刷機械も尚その需要を充たす能はざるほどなりしといふ。扨て此書は僅々百有餘頁の小冊子なれども、改革の主義精神を、遠慮會釋なく、短刀直入的に、論述して殆ど餘蘊なし。愛國の熱誠と、羅馬に對する憤慨とは、凝つて此檄文を

改革多方面に渉れども其根本は宗教の改革に在り

法王殿を固むる三面の堅壁

成しゝなり。その論旨頗る多岐に渉る。巡禮者の制限法、僧侶獨身制度の廢止、祭日の減少、大學學制の改良、行商の制限、妓樓の禁止、貧民救恤法、乞食の取締等、凡そ當時の社會に存せし有らゆる宿弊を羅列して、之れが改良の方案を示せり。一閲吾人をして轉た三善清行の奉事を思ひ起さしむ。但しルーテルの論旨若し茲に止まらば、そは一篇の社會改良策に過ぎざるべし。然れども彼の大旨意は、宗教の革新を以て有らゆる他の改革の根本と爲すに在り。即ち羅馬を中心とせる僧侶專制々度を破壞して、獨逸國民の獨立教會を設立せんとするに在り。彼は此意見を遂行する手段として羅馬教會を其根柢より覆さんと欲するなり。

夫れ法王殿が、頼みて以て鐵壁と爲す所のもの三あり。僧侶の權力は王公の俗權に超越すと唱ふる事是れその一なり。聖書の眞意を解釋する權能は法王之を獨占すといふ主張是れその二なり。法王の外、何人と雖も、宗教大會議を召集するの權なしといふ事是れその三なり。

ルーテル法王殿の鉄壁を目して紙壁と爲す

攻撃の要點

羅馬法王は、此三匝の壘壁中に栖籠りてその威嚴を保ち、その權勢を振ひつゝあるなり。**ルーテル**より見れば、此壘壁は鐵製にあらず。紙と藁にて製せしものにして、吹かば將に飛び散らんとす。故に彼は是等の壘壁に向て巨大なる砲彈を連發せり。その要點を摘めば、法王の權威は、すべて人間の作爲發明したるものにして、神の定め給ふ所にあらず。人間としては、法王と個々の信徒に、何等の差別なし。神の前には、萬人皆平等にして、僧俗の區別なく、信徒は悉く僧たるを得べき權利あり。又聖書は、基督の心を有する眞成なる信徒の智識經驗に照らして、了解し得らるべき神の啓示なり。基督教の眞理は凡て聖書に淵源するが故に、聖書に由りて証明せられざる教理及び制度ありとせば、そは神より出でしに非ずといふに在り。尙宗教大會召集の事につきては、古代の帝王がそを召集せし事例を引き、又法王に過誤ある場合には、大會はそを矯正すべき權利あるを主張したり。最後に獨逸に於ける宗教稅の重くしてその法王に納むるものゝ、皇帝に納むるものより多額

第二の開戰喇叭

人爲的の儀式を排斥す

なるを指摘し、且その用法の宜しきに適はざる事を論示したり。

第二の開戰喇叭は『羅馬教會の**バビロニア囚擒**』と題するもの是なり。彼は此書に由りて僧侶政治の基礎を破壞せんと企てしなり。抑も加特力教の組織に依れば、僧俗の區別甚だ嚴重にして、俗人は全く僧侶司式の下に儀式を守り、心靈の救を全ふすべき者なり。換言せば、僧侶は神及基督と俗人の間に立ちて、仲裁の役を勤むる者なり。而して其儀式の重なるものを七聖典と爲す。洗禮。聖晩餐禮。堅信禮。懺悔禮。潔齋禮。按手禮。婚禮是なり。以上の儀式は僧侶之を司るに非ざれば、何等の功德なきのみならず、却て違法瀆神の行爲と認めらる。然るに**ルーテル**は、洗禮と晩餐禮以外の聖式は、基督の創設せしものに非ずとして、之を排斥し、又晩餐式は**キリスト**の犧牲を意味し、そのパンは**キリスト**の肉と變じ、その酒は**キリスト**の血と化するといふ教理を否定し、尙從來僧侶の外、唇に觸るゝ事を許されざりし葡萄酒を、廣く俗人にも飲ましむべしと主張したり。**ルーテル**の意見を積極的にいへば、宗

ルーテル僧侶の仲裁を無用視す

教の極意は全然内部的心靈的のもの、即ち神に對する個人的の關係に存すと爲すなり。彼は此主義を取るが故に、人間がその罪を悔ひ改めて救に入るには、別に僧侶の仲裁に依頼するの要なく、只靈と眞を以て靈なる神を拜し、その恩寵に浴し得べしと唱へたり。簡言せば彼は純粋の基督教は、只聖書の中に見出さるべきものにして、羅馬教會の所謂聖傳なるものは、後人の附加したる善巧方便に過ぎずと爲すなり。

聖傳は人爲の方便

此議論は羅馬教會に取りて一大打擊なり。致命的打擊なり。而もルーテルは平然として、我は福音的眞理の上に立てるが故に、異端者にあらずといふ。其大膽不敵實に驚くに堪へたり。

ルーテルの大膽不敵

第三聲『基教徒の自由』

開戰喇叭の第三聲は『基督信徒の自由』と題する小冊子なり。此はミルチッツの勸めにより、法王に奉らん爲にその所信の要領を記せしものにして、拉丁語と獨逸語にて草し、直ちに之を印刷に附しぬ。その拉丁語の一本に書翰を添へて、之を法王の許に致せり。此書翰表面には、尊敬と謙讓とを裝へりと雖も、その裏面には皆を決して羅馬を睥睨す

ルーテル著述中の小眞珠

る剛膽なる巨人の姿を認めずんばあらず。

扨ルーテルの著書中の小眞珠と稱せらるゝ此の小冊子は、キリスチアンの享受すべき自由の意義を明かにして、德を養ひ、信仰を練磨する道筋を示せり。彼は神學論の枝葉に渉らず。人は信仰によりて義とせらるゝといふ原理を土臺として、信仰の生涯の中に充分なる自由ある事を說けり。斷食苦行を以て、全く無用とはいはねど、かゝる修行は人を善良にする効力なく、只內心に存する信仰の表章として價値あるのみ。而してその單純なる信仰は、僧侶の引導を藉らずして救を完ふするを得るなり。此信仰を有する者は凡てのものを有し、之なき者は凡てのものを失へるに等し。此信仰の中にこそ基教徒の自由を見出し得るなれ。凡ての信徒、此自由を享受し、僧侶の仲裁なくして神と交るを得ば、何ぞ僧俗の區別を立つるを要せむや。果して然らば、信徒は皆僧侶たるを得べしと論じたり。請ふ予をして此書中より美はしき左の一節を引用せしめよ。『善行は善人を作らず。只善人が善行を爲

僧俗無差別論是れ彼が祝靈に似たる點

獨逸國民教會を述べんとす是れ彼の素志

破門狀に對する防禦策

すのみ。**キリスチアン**は自己の中に生きず。**キリスト**と隣人の中に生く。然らずんば其人**キリスチアン**に非ず。眞の**キリスチアン**は信仰に由りて**キリスト**の中に生き、愛に由りて隣人の中に生くべきなり』。

以上の三大論文は皆一五二〇年中に公にされしものなり。その社會人心に波及せし影響は、迅速にして深厚なり。**ルーテル**は法王の權力が國家に超越するを排し、獨逸國民の中に獨立の教會を建設せんことを主張し、それと同時に僧侶社會の改革を斷行せんと欲せしなり。是れ彼が獨逸の諸侯及び國民に提供したる改革案なりしなり。是れ彼が將さに出でんとする法王の破門狀に對せし防禦策なりしなり。

破門狀公布せらる

法王尙中世の權勢を夢む

第六章　法王の破門狀—**ルーテル**の斷乎たる反抗

ルーテル三たび開戰の喇叭を吹けり。**レオ**如何に文藝に熱中すればとて、之に對して東風馬耳の態度を持續するを得べけんや。況んや曩きに**ルーテル**と對論せし**カエタン**僧正、**エック**博士等は一日も早く破門狀を發せんことを、法王に迫りつゝあるに於てをや。果せる哉一五二〇年六月十五日の日附を以て此破門狀公布せられたり。滔々數千言。措辭謹嚴。一語苟もせず。文章極めて典麗、一字の批すべきものなし。左れどその文中に顯はるゝ思想と理論よりいへば、明かに中世的にして、**レオ**法王は依然**グレゴリー**七世、**インノセント**三世時代の權勢を夢みつゝあるなり。**ルーテル**の九十五個條、若くばその三大論文中の意見に對して何等の答辨を試みざるは勿論、理も非もなく、現世に於ける神の名代たる權威を賴みて、一喝の下に**ルーテル**及び彼と一

破門狀の內容

エック博士破門狀を携へて獨逸に來る

味の異端者共を沈默屏息せしめんと敦圉くのみ。**ルーテル**を路可傳十五章中の放蕩兒に比し、六十日以內に前非を悔ひ改めて神の館なる敎會に復歸せんことを勸告し。若し飽まで頑冥不靈にして、其命に從はざるときは、斷然異端者として處分すべき旨を記せり。又天下一般の門徒に向ひて、**ルーテル**の著書を繙き、之を授受し、賣買する事を禁じ、見付け次第是等の書籍を焚き棄つべしと命したり。全文四十一個條。その中尤も力を注ぎしは、異端者を焚き殺すは**キリスト**の靈に對して罪惡なりといへる當時の識者の說に辨駁を加へし一條なり。此はいふまでもなく、**ルーテル**等に對する處置を嚴重にせんとする伏線を布けるに外ならず。

此破門狀は、天下に公布せられしと雖も、その第一に目指されしは、改革運動の本家本元なる獨逸なり。法王の命を負びて獨逸に來りしは、**エック**博士なりしが、法王の人選確かに其當を失へり。**ルーテル**の人望良かりしと反比例に、**エック**は極めて不評判の男なりき。彼は**ル**

青年學生の妨害

破門狀寸裂せらる

ウ市掲示を拒絕す

ーテル及び彼を助くる所の者に對して、私怨私憤を晴さんとせしのみならず、獨逸の貴族、諸大學、監督等に對してその貫目餘りに輕かりしを以て、その重大なる使命を全ふせん事頗る困難なり。彼の到る處、上は王公より下庶人に及ぶ迄、**ルーテル**の味方あらざるはなし。殊に血氣の青年中に多く、動もすれば暴力を以て破門狀の掲示を妨害せんとす。南部の諸市に於ては、兎に角强き反對なくして掲示の手續を了りしが、北部に進むに隨ひて、人民の激昂いよ〳〵著しく、當局者中にも、往々法王の脅迫を恐れずして**ルーテル**に與みし、掲示に應せざるものあり。**エック**の**ライプチッヒ**市に入るや。一團の學生**ウ井ッテンベルヒ**より來りて、人民を敎唆せしより、市內は忽ち不穩の狀を呈し、一旦掲示せし破門狀は寸々に引裂かれ、**エック**は**ドミニック**派の修道院に逃げ込みて保護を請ひ、夜陰に乘じて該市を出立したり。**エルフルト**市に於ては、其反抗一層猛烈にして、全く掲示する運びに至らざりき。**ウ井ッテンベルヒ**市は勿論之を拒絕したり。該市の當局者謂へらく、『此破

フリードリッヒ侯の信仰と政治家としての立場

改革運動の消長、侯の去就

門狀は全く**エック**の誤れる報告に基きて發せられし者にして、獨逸の事情に迂遠なるの致す所なり』と。此際獨逸の有力なる諸侯及び知名の學者より、**フリードリッヒ**侯に向ひ、**ルーテル**をして法王に對し、斷然反抗的態度を執らしむるやう勸告し來りしもの、三十名以上に上れり。勿論法王は、侯に慇懃なる親翰を贈りて、**ルーテル**の處分に盡力せん事を依頼し來りしなり。侯が此書翰を落手せしは、恰も新任皇帝**カロロ**の戴冠式に列せんとて、**ケールン**市に逗留中なりき。

侯はその信仰の立場よりいへば、依然加特力教徒にして**ルーテル**派に屬せむ考なかりしを以て、侯が今後**ルーテル**の運動に對する方針は全く政治家たる立場より、之を決定せざるべからず。此時侯の向背が改革運動の消長に關するや大なり。**ルーテル**の運命侯の隻手に在りといふも過言にあらず。左はいへ天下の輿論と獨逸國民の願望は、聰明なる侯の觀察を洩るべくもあらざるなり。侯が碩學**エラスムス**を召してその意見を叩きしは此頃の事なりき。又**ウイッテンベルヒ**大學の學生等が、破門狀の出でしを聞きて、多く退校したりとの風説を耳にせらるゝや、特に**スパラチン**を遣して、その實況を探らしめ給へり。

ルーテルの勇フリードリッヒの智共に稱すべし

破門狀ルーテルを威嚇するに足らず

スパラチンその風説の無根にして**メランクトン**に六百人許、**ルーテル**に四百人許の聽講生ある事を復命せしかば、侯は大に安堵したまへり。熟慮の末侯は法王の破門狀を意とせずして、從來の如く**ルーテル**を保護する事に決せられたり。侯は是より双手をひろげて**ルーテル**をわが背後に立たしめ、皇帝と法王とを巧みに操りつゝ、捕子遊(こをとり)の奇藝を演ぜんとす。**ルーテル**如何に勇なりとも、**フリードリッヒ**侯の智なかりせば、決して其改革の使命を全ふするを得ざりしならむ。惟り前者の勇敢を賞して後者の遠謀に氣付かざる者は、未だ共に獨逸の宗教改革を談ずるに足らざるなり。

ルーテルは、法王の破門狀の出でしを聞きて毫も慌かず。蓋し**ライプチッヒ**の討論後彼は此事あるべしと豫期したればなり。彼はその確信の基礎を聖書に据えしが故に、破門狀を讀みて苟にもその所見を

動かし丶所なし。彼が平素愛讀せし加拉太書の一節、『我儕にもせよ。天より使者にもせよ。若しわれらが曾て爾曹に傳へし所に逆ふ福音を爾曹に傳ふるものは詛はるべし』てふ**パウロ**の語は彼に無限の慰藉を予へたり。彼は數月前友人**スパラチン**に贈りし書中に明言せし如く、法王が彼の著書を焚きし復讐として、彼は今や法王の破門狀を焚き拂はんと決心せり。此は實に一五二〇年十二月十日の朝なり。かねて大學内の掲示場に廣告せしを以て、教授學生等は云ふも更なり、市民も多く集合したり。場所は**エルステル**門外にて、その後紀念の爲に植ゑられたる槲樹は、今向繁茂して四百年前の椿事を想像せしむ。火の燃え上るを待ちて、彼は先づ歴代法王の指令書を輯めたる書籍を火中に投じ、然る後破門狀を焚けり。彼はその燃えつくせしを見て同僚と共に引返し丶が學生は猶居殘りて馬鹿騒を爲しぬ。

破門狀を焚く

時勢の變遷驚くに堪へたり

ルーテルは法王の破門狀を焚きし破天荒にあらずと雖も、古來有力なる帝王の外、未だ嘗て此の如き行爲を敢てせしものなし。一個の僧侶にして破門狀を焚き棄てしは、彼を以て筆頭となさゞるべからず。嗚呼昔しは**ハインリッヒ**四世を戰慄せしめし法王の破門狀も、今や一個の修道僧を威嚇するの力だになし。蓋しその修道僧の背後に、幾多の勢力潛伏すればなり。吾人は**ルーテル**の狂言よりも寧ろ時勢の變遷の大なるを驚かずんばあらざるなり。

放蕩息哀を法王の膝下に請はず

第七章　カロロ帝の地位と獨逸の國勢

六十日の猶豫期限は經過したれども、法王の所謂放蕩息は悔改めて、哀を法王の膝下に請はざるのみか、破門狀を焚きて羅馬教會の宗規を無視したり。正當にいへば、彼は最早法律の保護に依頼する資格を剝れ、何時、如何なる惡徒の手にかゝりて殺さるゝとも、その下手人は罪に

政權に賴りて破門の實を擧げしめんとす

獨逸の政治的事情

帝位はハプスブルグ家の獨占

七選帝侯中間に立ちて帝を制し小諸侯を壓す

問はるゝの恐なきなり。然るに獨逸國民は、上下擧てその敬慕せる英雄的代表者を擁護するを以て、法王の破門狀は空文となりて行はれず。終に止むなく、皇帝の權力を藉りて**ルーテル**を處罰せざるを得ざるに至れり。左はいへ獨逸の憲法は、帝の獨斷を以てそを遂行するを容さざるが故に、此事件を**ヴオルムス**の國會に諮詢する事となりぬ。吾人は**ルーテル**の**ヴオルムス**召喚を舒するに先だちて、獨逸の政治事情を畧述するの必要あるを覺ふ。

十六世紀の獨逸は、政治的に未だ統一せる國家を成さず。上に皇帝あり。帝位は一四三八年以來事實上**ハプスブルグ**家の獨占に歸し、選擧帝政といふは、殆ど名のみに止まりて、其權力益々加はりしと雖も、歷代の帝王概ね自家の繁榮を謀るに熱心にして、獨逸の國運を伸張するに冷淡なりき。況んや七選帝侯を筆頭として有力なる諸侯も亦各々その權勢を擴張せんとして、屢々帝の政策を妨ぐるに於てをや。諸侯の下に騎士の一階級あり。その末葉は收入極めて寡き上に、絕えず諸、

小貴族苦しまぎれに暴行を逞ふす

同盟市

中等階級の勃興

農民悲狀を極む

以上諸階級の利害衝突

侯の壓迫に苦めらるゝが故に、騷擾混亂に乘じて萬一の僥倖を得んことを冀ひ、又常に商賈農民に向て暴戾誅求を擅にす。中世の頃黨を結びて山賊を働きしは、是等の貧乏貴族なり。屈棒貴族とは彼等に附せられし名稱なりき。市の同盟は既にその隆盛期を越えたれども、十五世紀中に絕大の富强を誇りし**ハンザ　ライン　スワビア**等の同盟市の或ものは、尙儼然として一敵國の姿を爲し、その强大なる市に至ては、優に諸侯と拮抗するほどの勢力を振ひぬ。又一方には近世史上の最大勢力たらんとする中等階級は、今や將に其頭を擡げんとしつゝあるなり。社會の最下層を占めてその生活狀態の尤も憫然なりしは農民なり。中世の末葉より近世の初めにかけて百姓一揆の續出せしは、恰に其故ありと謂ふべし。詳細の事情は後章百姓一揆の中に綴述すべし。却說以上列擧したる各階級は、互にその利害を異にして相爭ふのみならず、選帝侯の中にも、諸大名の中にも、騎士の中にも、將た諸市の間にも、往々相反目して分爭せんとする傾向あり。抑も獨逸の政治的及

獨逸の眞統一は一八七一年の出來事

統一の遲かりし理由

マキシミリアン帝崩御

カロロ五世帝踐祚

び民族的統一は、開國以來の大問題にして、そが理想通りに實現せられしは、今より僅かに四十年前の出來事に屬す。遠心力即ち諸侯分權の傾向強くして、求心力即ち中央集權帝政主義の勢力は終に之を壓倒するの機會なかりしなり。一面より觀察せば、七選帝侯は舅姑の如く、その他の諸侯は小舅小姑の如く、皇帝は殆ど養子の如き觀あり。此故に微力なる者その位に在れば、恰も傀儡の如く、有力者之に代ると雖も、猶親分たるに過ぎず。況んやその親分たる帝王が、宗家の權榮を先きにして獨逸の利害を後にするに於てをや。

一五一九年一月**マキシミリアン**帝崩御せられ、爾來六個月間その後繼者の選擧につきて劇しき暗鬪ありしが、終に先帝の孫にして、既に一五一六年西班牙の王位を嗣ぎし**カロロ**を選擧する事に決せり。西班牙にては**カロロ**一世、獨逸にては**カロロ**五世と號す。**カロロ**の最大競敵たりし佛王**フランシス**一世は落選の恨を呑めり。扨此**カロロ**は、**フランシス**一世及び英王**ヘンリ**八世と相並んで、歐洲の政治舞臺に於ける大立物たらんとす。父**フ井リップ**は**マキシミリアン**の子にして、西班牙の**フヱルヂナンド**王とその后**イザベラ**の女なる**ジョアンナ**を娶り、その間に生れしが即ち**カロロ**なり。一五〇〇年**ゲント**の宮中に呱々の聲を揚げぬ。**カロロ**の祖母即ち**マ**帝の皇后は、**ブルグンド**侯**カロロ**勇敢の女なりしを以て、侯戰死して嗣子なく、その國亡ぶるに當り、その屬領たりし**ネザーランド**は**ハプスブルグ**家の所有に歸したり。**カロロ**は、**ハプスブルグ**と、西班牙と、**ブルグンド**との三王室の血統を一身に傳承せしと同時に、その領地及び屬領も悉く繼承したるなり。即ち墺太利　**ネザーランド**　**ブルグンド**の一部。西班牙本國と、その屬領たる**ナポリ**　**シチリア**　**サルヂニア**　及び新大陸の占領地即ち是なり。彼は單に西班牙王としても、歐洲列强の首座を占めて英佛と拮抗するを得たりしに、父の早世は彼をして**ハプスブルグ**家の所領を兼治せしめ、祖父の崩御は彼をして更に獨逸皇帝たるべき顯榮の地位に立たしむるに至れり。

一五〇〇年カロロ西班牙領ネザーランドのゲント市に生る

稀有の幸運兒

Aachen (Aix-la-Chapelle) に於ける戴冠式

一五二〇年十月二十三日**アーヘン**に於て戴冠式を擧行せしとき、帝の齡は猶二十一歳に滿たざりき。**カロロ**登極の時、獨逸の國是に基きて凡ての政策を定めん事を誓ひしと雖も、此は一場の形式に止り、彼は依然**ハプスブルグ**家の利益を第一として萬事を打算せり。彼は獨逸語を解し得ざるのみならず、又獨逸人の心事をも了解する能はざりき。彼はその生地たる**ネザーランド**及び**ブルグンド**の事情に精通せしが、その後西班牙との關係益々親密なるに及びて、西班牙人の見地よりその行動を定めんとする傾向を生せり。然れども彼の全生涯を一貫する所の大目的、即ち彼が其地位勢力を利用し、非凡の才幹と巧妙なる外交術とを振舞はして成就せんと欲したる目的は、**ハプスブルグ**家をして永く歐洲に雄視せしめんとするに在りしなり。

帝が畢生の目的

フランシス一世の政策

フランシス一世は、**カロロ**の精神を看破し、その歐洲の均勢を維持する上に大害あるを唱へて、彼の經綸を破らんと企てしを以て、茲に**オルレアン**。**ハプスブルグ**兩家の大衝突を生じ、二十四年間に四回の大戰

二十四年に沙るガルレアン、ハプスブルグ兩家の衝突は四回の戰爭を惹起せり

國民主義の發展は十六世紀の大勢

カロロの外交的辣腕

爭を見るに至れり。是等の戰爭は概ね佛王の不利に終りしと雖も、**カロロ**を制肘してその權力を肆まゝに伸ぶるを得ざらしめ、且間接に宗教改革の運動を扶けてその傳播を自由ならしめし事は、その著しき結果なりとす。左れど**ハプスブルグ**家の權力を張らんとする**カロロ**の計畫が失敗に歸せし事は、決して佛國の牽制運動にのみ歸すべからず。更に之よりも大なる原因あり。十六世紀に於ける歐洲の大勢なりし國民主義の勃興に背戻せし事是なり。英、佛、西等の邦々に於ける王權の擴張は、國民主義の發展と並行して行はれしが故に、兩者相扶けてその目的を達せしと雖も、獨り獨逸に於ては、**ハプスブルグ**家の强大は、獨逸全體の利益とならず。寧ろ後者は前者の犧牲に供せらるゝ傾ありしを以て、兩者共に充分その目的を達する能はざりしなり。

外交家としての**カロロ**の敏腕は、既にその選擧競爭の際に顯はれたり。**フランシス**が、その富裕なる財力を惜まずして、選帝侯等の或ものを己が陣方に引入れ、且英王**ヘンリ**の後援を藉らんとせしに拘はらず、

初めて召集すべき國會に於ける重要問題

法王の無上權疑問となる

終に**カロロ**の爲に機先を制せられしは、單に**カロロ**が**ヘンリ**と親戚の關係ありし一事にのみ歸すべからず(**ヘンリ**八世の后は**カロロ**の叔母)。若年の**カロロ**が、巧みに**ウルセー**僧正を操縱し、以て**ヘンリ**を我味方に抱き込みし手際實に驚歎に堪へたり、(帝は二たび**ウルセー**を法王に擧げん事を約束せしが終にその約束に背けり)。

即位後匆々彼が決着すべき問題は、**ルーテル**處分の一件なりき。最初の國會は一五二一年の春**ヴオルムス**市に開會する事となりぬ。**ルーテル**を此國會に召喚すべきか。將た召喚せずして、直に異端者として處置すべきか。若し召喚するとせば、單に自說取消の諾否を答へしむべきか。或はその言說に就きて辯護する自由を許可すべきか等の事は、隨分喧ましき問題なりしが、結局召喚の上自說辯護の特權を予へ、然る後國會が判決を下す事に決ぜり。此一事は既に法王の發布したる破門狀を、輕忽にして其當を失せしものと宣告するに等し。法王の無上權は、宗教界の事に關してすら、既に動搖し始めたりと謂はざるべ

異端事件に對するカロロ帝の態度

からず。

扨て新帝は、宗教の事に就きて、如何なる意見を懷かれしかといふに、彼素より神學上の事に暗くして、**ルーテル**が何故羅馬教會に反對するや。その理由を知るに苦めり。若し夫れ個人としての信仰より見れば、彼は祖父**マキシミリアン**の寛厚なる正統主義と、その子**フ井リップ**二世の熱狂的信仰との中間に位し。年波の寄るに從ふて漸次後者の立場に接近せしが如し。**ヴオルムス**にて**ルーテル**を死刑に處せざりしを老後に至りて後悔せし一事、偶ま以てその証と爲すべし。左はいへ**カロロ**の立ちし舞臺が、**フ井リップ**の夫れよりも廣かりし如く、その器の大小も亦日を同ふして語るべからず。況んや政治的動機は、宗教的動機よりも帝の政策を形成する上に、ヨリ大なる力を有せしに於てをや。當時の法王が大抵温厚なる聖僧に非ずして、一大政治家の資格を具へし人なる事は、云ふまでもなく、讀者の知悉せらるゝ所なるが、**レオ**は元來その政治家としての立場よりいへば、**フランシス**一世を扶け

帝レオに貳心あるを看破す

カロロ獨逸國民の輿論を畏る

ルーテルの人望が其絶頂に達せし時代

てカロロの權力を減殺せんことを願ひしなり。然れども**ルーテル**の處分事件が、思の外六ヶ敷なり行きて、その裁判を**カロロ**の盡力に待たざるべからざる場合に立ち至るや。彼は心ならずも、その政策を枉げざるべからざる必要に迫れり。**カロロ**は具さに法王の心事を看破せるを以て、眞正直に**ルーテル**事件に全心を注ぎて、速かに事を處理せん事は、寧ろ法王に利にして、己れに不利ならんことを氣遣へり。況して即位後初めての國會なれば、愼重に獨逸代表者の意向を考へて、穩當の處置に出づべき必要あるに於てをや。

扨て獨逸に於ける改革運動の形勢如何と窺ふに、その凄まじさ言はん方なし。一五一九年より一五二一年までの三年間は、殆ど獨逸國民の凡てが改革に左袒せんとせし時代なり。**ルーテル**が國民的英雄として推戴され、擧國一致、彼の指導の下に羅馬に反對せし時代なり。教會內部の惡弊を芟除し、特に獨逸に對する宗教上の重稅を廢し、僧侶仲間の敗德を刷新するなどの事に關しては、何人も異存を唱ふるものな

宗教改革は天下の輿論に合す

教會分離には反對多し

法王の勅使アレアンドロの觀察

かりしなり。又教會の權力過大なるを憤慨し、僧侶階級の跳梁を抑へて、信仰の自由を獲んとする願望よりいへば、歐洲何れの人民と雖も之に贊同せざりしものなからむ。若し夫れ斷然羅馬教會より分離して獨立の新教會を設置し、別に教理、信條、儀式等の事を定めんとするに至ては、その困難固より絶大なるべし。又到底分離を免かれざるべし。創業は守成よりも易く、破壞は設立よりも手輕なるは、古今東西其軌を一にす。**ヴオルムス**國會の開會前に於ける改革贊成者は、その數莫大なりしと雖も、その動機目的は千差萬別にして、只大體の方針に一致せしのみ。但しその人心激昂の有樣は實に非常なりしなり。法王の勅使として**ヴオルムス**に遣されし**アレアンドロ**の報告に依れば、彼等の一行は旅行中殆ど宿泊に困難し、到る處侮辱を受け、幾度か危險に遭ひ、武士は途上彼等を視て顏を顰め、氣早き侍は屢々欄に手をかけしほどなりしといふ。『十中九人までは**ルーテル**と呼び、殘る一人も法王殿倒すべしと叫び、而して彼等は異口同音に宗教大會と連呼す』。蓋し彼等

法王の諷刺畫賣行盛なり

カロロ帝とシギスムンド帝一時勢一變す

ストロンゲの評能く穿てり

は之を獨逸國内に開催せんことを願へるなり。實に『草木も石もルーテルの味方』たらんとする勢なり。法王及びその勅使等の諷刺畫、ヴオルムス市中の店頭に鬻がれ、グラナッハやデューレルの描きしルーテル及び彼に因める畫の賣行極めて良く、出版物の五分の四は悉く改革に關係あるものにして、ハンス・ザッハスの『ウ井ッテンベルヒの夜驚』と題せし書は、當時の呼物となりぬ。國會開始前に於ける獨逸人心の趨勢推して知るべきなり。此際カロロ帝がルーテルに對して、百年前シギスムンド帝がフスに對せしと同一の方針に出でゝ、彼を血祭したらんには。獨逸國内に、フス黨の亂よりも尙大なる爭亂を生じたらんと火を睹るよりも明けし。明敏なるカロロ豈此事を察せざらんや。況んや羅馬駐劄の帝の大使マヌエルは、頻りに書を寄せて、法王殿の外交の機密を洩らし、ルーテル利用の手加減を丸ロロに暗示するに於てをや。『チヤールス五世帝』の著者アームストロング氏が帝を評して、『ルーテル問題は少年帝をして大人たらしめたり』と言へりしは、眞なる哉。

第八章　ルーテル　ヴオルムス國會に召喚せらる

ヴオルムス市の沿革

カロロ五世帝は、アーヘンの戴冠式を了りし後、徐ろにヴオルムスに向はせ給へり。そは翌年の正月下旬その地に召集せらるべき國會に列席せんが爲なり。ヴオルムスはマインツの東南十里餘の處に在り。十七世紀の末、ルヰ十四世王の爲に大破壞を蒙りし以來、頓に衰へて、現今にては人口二萬許の小都會となりしと雖も、十七世紀の初には七萬餘の人口を有せし繁昌なる都なりき。此國會はカロロが即位後初めての事なれば、一擧一動愼重の態度を採るべきは勿論なるが、而も重要なる問題の多く堆積せる中にも、ルーテルの處分問題ほどその關係の

法王の大使

大なるはなし。獨逸國民は云ふも更なり、歐洲諸國の人民皆鶴首翹足して此問題の成行如何に注意しつゝあるなり。法王は外交術に老練なる**ギロラモ・アレアンドロ**と**マリノ・カラッチヨリ**を**ヴオルムス**に遣して、その敏腕を揮はしめたり。帝も亦公けの大使の外に多くの間諜を羅馬に放ちて、絶えず法王殿内に密議せらるゝ外交上の秘密を探らしめたり。**ルーテル**は一介の修道僧に過ぎずと雖も、彼既に獨逸の輿論を背負ふて立てるが故に、帝の處置宜しきを失はゞ、獨逸國民全體の感情を害はんこと必せり。初度の國會に人望を落さん事は決して帝に取りて得策に非ざるべく、又將來の施政上に圓滑を缺かんこと、炳焉として火を見るが如けむ。帝は終に議員多數の希望を容れて**ルーテル**を召喚する事に決し、同時に旅行保護券を與へ給へり。勅使**スツールム**が召喚狀と保護券とを携へて、**ウ井ッテンベルヒ**に達せしは、三月二十六日にして、**ルーテル**は四月十六日までに**ヴオルムス**に到着すべき命令を受けたり。多分かくあるべしとは**ルーテル**も預じめ察し居

帝の苦心

ルーテルを國會に召喚す

ルーテル死を決して征途に上る

たる事なりしが、彼は心中私かに死を覺悟せしものゝ如く、四月二日發軔に臨み、後事を親友**メランクトン**に託せしとき、明かに其意を洩らしぬ。沿道**ルーテル**を觀んと欲して集まる者堵の如く、彼が投宿する旅舍の門前は肩摩毂擊の狀を呈せり。奬勵の聲稱賛の語は常に同行者の耳朶を打ちしが、策士の權謀、敎敵の陰險手段も亦絶えず彼を陷いれ、又は彼を威嚇して、**ヴオルムス**に入らざらしめんとしたり。此際**ルーテル**の親友等は彼に內外の事情を報じ、百難を排して**ヴオルムス**國會に出頭し、飽くまで年來の主義を一貫すべき事を勸めたり。

ヴオルムス到着の有樣

望遠塔の番人が、其角笛を吹き鳴らして、**ル**氏の一行の到着を報せしは、十六日の午前十一時に近き頃なりき。勅使**スツールム**騎馬にて先導し、**ルーテル**はその三人の同行者と共に、粗末なる馬車に打ち乘りて之に隨ひ、彼を出迎へん爲に途中まで出張せし友人**ユスツス・ヨナス**は、騎馬にてその後を護れり。此一行の市內に入るや、街上俄かに喧騒となり、忽ち見物人の山を築けり。**アレアンドロ**は樓上より此狀を望

見しつゝ怫然色を爲して曰く、『咄彼等はやがて夫の狡猾奴が奇蹟を行ふと吹聽するに至らん』と。

ルーテル一本鎗の技を演ぜんとす

眞摯卒直なる木强漢は、今や權謀術數に富める策士連の狂奔せる街衢に來り、彼等の目前に於てその一本鎗の技を演せんとす。十六日の午後は高卑僧俗の訪客織るが如くなりしが、その談話の中心は、明日國會議場に出でゝ如何に返答すべきかといふ點に集りぬ。

四月十七日ルーテル出頭前の狀況

翌日の午前十時には式部長パッペンハイム皇帝の使者としてルーテルの旅宿に來り、同日午後四時國會に出頭すべき旨を傳へたり。議場は該市監督の宮殿內に設けられしが、定刻の少し前に至りてパッペンハイム、スツールムの兩氏はルーテル案內のために來れり。ルーテルの旅舍を出づるや。街路は立錐の地なきまでに老若男女を以て埋められ、窓といふ窓は頭上頭を橫たへ、屋根の上さへ時ならぬ人の雲たなびきて、ルーテル等は身動きもならず。スツールムはかゝる雜沓の際、ルーテルに萬一の變ありてはと案せしを以て、故と豫定の道を通らず、庭より庭に拔け傳ひて漸く議場に達せり。議場の周圍にある庭園にも數多の人々待ち居りしがその大部分はルーテル方と覺しく、『男らしくやれ』。『死を恐るゝな』。『躰は死んでも、來世があるぞ』など、口々に彼を勵ましゝが、就中名高き勇將フルンツスベルヒ卿が、自ら經驗せし戰爭にことよせて彼を鼓舞し、『御身若しその擧の正しきを信せば、神の名によりて勇進せよ。神必ず御身を棄て給はざるべし』といへりし一語は、深くルーテルの心に銘せしなるべし。

フルンツスベルヒ卿の奬勵

議場に起ちしルーテルの容貌風采

ルーテルの議場に入るや。萬目彼の一身に聚り、凡ての視線はその一點一笑に集中せり。『夫の愚物は微笑しつゝ入り來りしが、周圍を一瞥せし後やがて眞顏になりぬ。皇帝を仰ぎ視し時は、その首靜止の態度を持しがたきが如く、そを左右上下に搖かしぬ』（アレアンドロ日記）。ルーテルは中背中肉なるも、骨格頗る逞ましく。顏色は蒼白なれども、眼光炯々として人を射る。心靈的奮鬪の經歷と不撓不屈の意力とは、唇邊眉宇に髣髴として現はる。彼は修道僧の法衣を纏ひ、當時の習に從ひて剃髮し、輪形

辯護士シユルフ

の部分丈を剃り殘せり。此日陛下に代りてルーテルに質問する任務に當りしは、トリエル大監督の家臣なるヨハン・エックにして、(前に屢々出でしインゴルスタットのエックとは同名異人なり)、ルーテルの扶助者として彼の側らに坐を占めしはシユルフなり。シユルフはウ井ツテンベルヒ大學の法學教授なるが、ブリードリッヒ侯の命によりてルーテルの爲に、辯護の勞を執りしなり。

如何なる問や發せられむ。之に對するルーテルの返答は如何ならむと、半は好奇心、半は憂慮に充ちて待ち構へたる滿場の眼は、誰いふとなく、若年の皇帝と、その前に扣へたるルーテルとを交はる〳〵視くらべて、その對照を作るに餘念なきもの丶如し。尊儼無比なるハプスブルグ家の主權者と、無位無祿の修道僧—賤農の家に生れたる一貧兒—而も一枝の筆と三寸の舌を以て、天下に輿論の風雲を捲き起したる傑僧!!　誰か是等の事を想ふて其奇異なる對照に愕かざらんや。嗟呼王公と一匹夫!!!　メーリー・スチユアートとジヨン・ノックス。チヤー

感慨に充ちたる議場

自由民權の勝利

ルス一世とクロムエル。フ井リップ二世とネザーランドの乞食黨(レギユオー)。チヨルチ三世と北米十三州の叛民。ル井十六世と佛國の第三階級(チエール・ビター)。凡そ近世史上に顯はれたる是等の諸現象は、皆其淵源をヴオルムス國會の該事件に有するに非ざるか。少くとも平民の輿論が王公の暴力に勝つに至れるは、古代中世の歷史にはその類例を見ざる事實ならずや。若し夫れ最近四百年の歷史を達觀し來るときは、此は是れ人間天賦の自由權利が帝王の專制主義に反抗して着々勝利を占めたる痕跡ならざるはなし。果して然らば、我邦に於ける明治二十三年の國會開設も、亦四百年前のヴオルムス國會議場のルーテルに負ふ所なしと謂ふを得べきか。

エックの一喝議場の寂寞を破る

氣味惡るき寂寞はエックの一喝に破れたり。エックはルーテルに打向ひ、其面前のテーブルの上に列ねたる二十冊許の書藉を指しつ丶、是等の書物は皆足下の著はせしものなるや。足下は是等の書中に記述せし意見を取消す事を肯んずるや。或は飽くまでそを固執せんと

欲するかと問ひしに、**シユルフ**は傍より其書名を一應讀み上げられはと注意したり。書記の之を讀み上げし後、**ルーテル**は徐ろに起立して、夫等の書物は凡て彼の著述たるを承認する事、尙その外にも彼の著はし、書物ある事を答へ、扨てその書中に記述せし各種の意見を取消すべきや否やに就きては、事甚だ重大にして信仰、救濟、聖書等に關係するを以て精確適當なる返答を爲さん爲、何程かの猶豫を與へられん事を請へり。**エック**の問と**ルーテル**の答とは、何れも最初は拉丁語、次ぎに獨逸語を用ゐて陳述されしが、**ルーテル**の返答は甚だ低音にて、隔りたる議席に在りし者はそを聽取する能はざりき。故に列席者の多數は、**ルーテル**の意氣銷沈してその平生に似ずと爲し、或は自說を取消す下地ならんかと大早計に氣遣ひしものさへありしなり。後世の史家も此事を疑題の一となしゝが、近頃に至り、此は**アレアンドロ**が、**ルーテル**をして議場に長廣舌を揮はしめざらんと、百方手を廻はして仕組みし陰謀の裏を掻かん爲、**ルーテル**方の參謀等が預じめ彼に言ひ含めしも

憮然たるルーテル

其內幕

のと知られたり。扨て**ルーテル**の要求を容れて猶豫を予ふべきや否やにつき、帝はその顧問官を集めて、選帝侯等は相互に、各階級の議員等も夫れ〳〵打寄りて相談せしが、法王の勅使等の反對ありしに拘はらず、陛下は議員多數の意見を採用し、**エック**をして特別の思召を以て一日の猶豫を許す旨を**ルーテル**に傳へしめ給へり。

帝返答の猶豫を許す

四月十八日(木曜日)午後四時過、**ルーテル**は昨日の如く護衛せられて庭づたひに監督の宮殿に達せしが、庭園には數千の群衆打つどひて喧囂を極む。皇帝が諸侯を隨へて議場に入御せられしは六時頃なりき。此日議場に宛てられし室は昨日のよりも稍廣かりしが、猶立錐の地なきまでに雜沓し、高貴の人々さへ席を得るに迷惑せられ、止むなく佇立せし方多かりき。**ルーテル**は二時間近くも待ちあぐみつゝ、議員一同の着席すみし頃、議場に導かれて席に着きしが、その時夕陽已に沒し暮色蒼然として山野を掠め、堂內には燭光の煌々として輝けるを見き。皇帝陛下、皇弟**フエルヂナンド**殿下(一五五六年**カロロ**の後をつぎて獨逸

四月十八日の出頭

議場の雜沓

燦然たる光景

皇帝となるべき人を首として、七人の選帝侯、各國大使、大名小名、騎士、自由市の總代等の儼然として居列べる有樣、昨日に優りていと華やかなり。但し**アレアンドロ**と**カラッチヨリ**の兩人は、異端者に演說を許し事に不平にて議場に出でざりき。**ルーテル**の顏色も此日は一層引立ちて元氣に溢れたるが如し。議場の鎭靜するを待ちて**エック**先づ口を開きて返答を促し、かば、**ルーテル**は起立し、一揖の後大要左の如く答へたり。彼はその著書を三種に區別し。第一種は信德修養の目的を以て記述せしものにして、敵味方の差別なく萬人の共に是認する處のものなれば、取消すべき必要なしと答へ。第二は獨逸國民が上下一樣に苦痛を感じつゝある法王の虐政を攻擊せしものなれば、之を取消すは即ち法王の虐政を助長するに外ならざれば、忠誠なる獨逸の臣民としてかゝる處爲に出づるを欲せずと言へり。第三種の著書は法王に味方する所の或人々に辨駁を加へしものにして、その中に過激の語、誤謬の點ありしを承認すと雖も、而もその大體の旨意に至ては、之を

ルーテルの確答

滿面汗玉の如し

取消すこと能はずと結びぬ。尙語を續けて、若し四福音書及び豫言者の言によりて、その說の誤れるを明かに證明辨破する者あらば、彼は欣んで自說を取消すべく、又その著書を自ら火中に投ずべしと附言したり。**ルーテル**は以上の旨意を拉丁語を以て語りしが、**エック**の依賴に由り再び獨逸語もて之を反復したり。此時**ルーテル**は神氣の興奮劇しく、滿面に玉の如き汗を流しぬ。**エック**が陛下の命に由りて更に簡短明瞭なる返答を爲せよと催促するや。**ルーテル**は再び起立して左の如く語れり。

最後の返答

皇帝陛下が明確なる答を所望し給ふが故に、予は謹んで左の答を陛下に致さむ。予は聖書の證據に由り、又明晰なる理論に由りて、わが誤れる事を證明せられざる限りは、自說を取消すこと能はず。予は宗教大會若くば法王の決議に信賴する能はず。何となれば此兩者は雷に誤りし事あるのみならず、又互に矛盾せし事あればなり。我良心は神の言に從ふ。良心に逆て行動するは不安全且不正直な

エックとルーテルの押問答

西班牙人の切齒扼腕

り。神我を扶けさせ給へアーメン。

此後**エック**更に陛下の指圖を受けて、**ルーテル**に譴責的の宣告を爲しゝが、其中に**エック**が宗教大會は嘗て過誤に陷りし事なしといふや。**ルーテル**はそを否定して、確かに有りし。我其證據を擧げ得べしと答へしより、暫く兩人の間に押問答起りしが、陛下は之を中止せしめ、やがて玉座を離れて議場を退かせ給へり。貴顯の退席後、議場は俄かに騷々しく、西班牙人は足踏みして**ルーテル**を罵り、『彼奴を焚き殺せ』と罵りしものさへありしが、多數の獨逸人彼を取圍みて萬一を警めしものから、西班牙人も終に何等の暴行を加ふる能はず。**ルーテル**は安全にその旅舍に着きぬ。議事堂を去らんとするに當り、**ルーテル**群集の間に立ちて双手を高く揚げて凱旋の意を表し、又旅舍に歸りて自己の室に入るや。素志貫徹せりと連呼して打悅びぬ。**フリードリッヒ**侯は秘書官**スパラチン**を召して、**ルーテル**の言語の適當なりしを稱し、只少しく大膽に過ぎたるを惜みたまへり。又侯の弟**ヨハン**に向ひて、『予

獨逸人の激昂

が今日聞きし所に依れば予は**ルーテル**の異端者たる事を信ずる能はず』と宣へり。想ふに多數の貴族等は侯と同感なりしならむ。一般人民の感激は非常にして殆ど狂暴となり、その夜は市内到る處に**ルーテル**を賞贊し、西班牙人伊太利を詛へる語を聞きぬ。**ヴォルムス**に在りし英國大使**トンスタル**本國政府に報じて曰く、『獨逸人は到る處**ルーテル**の爲に熱中して我を忘れんとす。法王の權力の下に壓服せられんよりは寧ろその生命を賭せんと欲する者萬を以て算ふべし』と。

ヴォルムス市中の貼紙

第九章　ルーテルの幽閉——禁令發布

四月十八日の夜中、**ヴォルムス**市の辻々に、『童を王に戴く所の國民は禍なる哉』(傳道書十〇十六)と記るせし貼紙を爲しゝものあり。そ

の意恐くは獨逸國民の輿論感情を理解する能はざる少年を、王に選擧したる愚妄を諷するに在りしならんか。果して然らば、諷する者誤れり。カロロは年少しと雖も、胸に成竹ありたればなり。カロロは、既に數年前より、西班牙に於て異端撲滅を實施しつゝありしなり。如何ぞ獨逸に於て正反對の方針に出づるを得んや、彼はその性情に於て純乎たる西班牙人にして、夙夜念とするは、ハプスブルグ家の繁榮に在り。獨逸の國是の如き、豈具さに顧慮するの遑あらむや。彼がルーテルに對し、最初より斷乎たる處置を執る能はざりしは、法王の外交方針と獨逸諸侯の反對とを恐れしが爲のみ。

四月十九日陛下は、有力なる諸侯を召集して、その意見を徵し給へり。彼等の多數は、暗にルーテルを庇護して、調停を計らんと欲したり。帝はかねて佛語にて認められたる意見の筋書を取り出して、そを自ら朗讀し給へり。その大要は、ルーテルに向ひ禁令を發布して、法王破門狀の旨意を貫徹せんと云ふに在り。諸侯はその後集會を重ねて二十二

（驍勇の皇帝胸に成竹あり）

（帝が夙夜軫念とし給ふ點）

（帝の意見已に決せり）

ルーテル肖像
（クラナッハ寫）

ヴォルムス國會の時議場に宛てられし堂

ワルトブルヒ城

兩者意見の根本的相違

日に至り、**ルーテル**の尤も信頼する**トリエル**の大監督を筆頭として、調停委員數名を擧げ、最後の調和を試みせしむる事に決せり。然れども此は初めより殆ど成立の見込なかりしなり。政治家たる帝の統一主義と、良心判斷の自由を主張する**ルーテル**の個人主義とは、その間に千里の差ありて、到底調和し得らるべき性質のものに非ざるなり。果然**トリエル**大監督の調和策は、水泡に歸しぬ。**ルーテル**は四月廿六日**ヴオ**市を出發し、**アイゼナッハ**に一泊し、同行者の多數と別れて**メーラ**村の親戚を訪ひし後**ウ井ッテンベルヒ**に向へり。五月上旬に至りて、霹靂一聲**ルーテル**の凶報傳りぬ。その風說は區々にして一定せず。或者は騎士**シッキンゲン**彼を拉し去りて保護しつゝありといひ。或者は平素**フリードリッヒ**を敵視せし**ベハイム**某が彼を生擒せしならんと推測し。又或者は**ルーテル**は法王の間諜の爲に斬り殺され、其屍某鑛山に發見されたりと傳へたり。此の如き風說は、尾をつけ鰭を生じて電光石火の如く傳播せり。**ルーテル**が行衛不明となりし噂の傳は

ルーテルの凶報傳はる

風說區々

ヴオルムス市は鼎の沸くが如し

アレアンドロの烟眼

るや。人心の激昂非常なりしが、就中**ヴオルムス**市は鼎の湧くが如く、騎士四百餘名將に叛亂を企てんとすと貼紙せしものさへあり。法王方の貴族等の心配一方ならず。法王の勅使等は人民の怨府となりて危險を恐れ、一時大に狼狽せり。そは**ルーテル**に對する欽慕の情が、獨逸人の間に一層高まりて、禁令の發布を困難ならしむるが爲なり。左はいへ怜悧なる**アレアンドロ**は、容易く世人の噂に信を置かず。粗ぼ事の眞相を看破して、**サキソニア**の狐(選侯を暗指す)の仕業ならんといへり。**ウヰツテンベルヒ**市に向け、**ルーテル**の安否生死を問合はし來る者、櫛の齒を引くが如くなりしが、親友**メランクトン**すら絶えて彼の消息を知らざりき。

フリードリッヒ侯の妙策

却説**ヴオルムス**にて法王方と**ルーテル**との調和策不首尾に終はるや。聰明なる**サキソニア**選侯は、將來の事件容易ならざるべきを察し、密かに**スパラチン**に命じて、**ルーテル**を一時何處へか隱匿ふやうに命じ給ひ、**ルーテル**も出發の前夜、**スパラチン**より其旨を傳へられしなり。

一場の狂言

新約聖書の飜譯に着手す

獨逸文學史上に於けるルーテルの貢献

五月二日、彼が二人の同行者と共に、**アルテンスタイン**附近の山道を旅行しつゝありしとき、覆面の騎馬武者數名、俄かに顯はれて彼を拐帶し去りしといふは、其實一場の狂言に過ぎざりしなり。然るに其秘密はいと嚴かに保たれて、選侯の弟**ヨハン**及び**メランクトン**の如き人々すら數旬を經し後までは、全く事の眞相を知らざりしなり。**ルーテル**は選侯の居城なる**ワルトブルヒ**に幽せられ、頭髮を生やし、鬚髯を蓄へ、劍を負ひ、騎士の服裝を着け、名を**ユンケル・ゲオルグ**と改めて、優遊自適の生涯を送りつゝありしなり。左れど元氣潑剌たる彼は、久しく其閑散に堪ふる能はずして、新約聖書の飜譯に從事したり。當時獨逸語には多くの方言ありしが、その尤も著しき區別は、高地と低地、即ち北方と南方との相違なりき。**ルーテル**が高地獨逸語の粹を拔き長を採りて、流暢なる聖書の飜譯を成就し、それが廣く世間に流布せしより、高地獨逸語が終に獨逸に於ける文學上の言語と一定するに至りしなり。左れば**ルーテル**の獨逸文學史上に於ける功勞の大なる事、言を待たずと雖も、

彼が新約書の飜譯を、僅々數月の中に成就せし事を奇跡の如く驚くには及ばず。當時新約聖書の獨逸語に譯されしもの、既に十四種類もありたれば、彼は少くともその中の數種を參考として、便利を得しなるべく、且彼は拉丁譯よりも希臘の原本に照らして譯せしとはいへ、希臘語の力不充分なりし爲、原意を誤りし個處鮮しとせず。要するに彼の功勞の要點は首としてその獨逸語の巧妙にして且雄健なるに在りとす。若し夫れその飜譯聖書が、宗教改革の運動に與へし影響に至ては、吾人は殆ど適當の讃辭を見出すに苦しむなり。羅馬方の一雄將なりし**コホリオス**の評は能く當時の實況を寫せり。『**ルーテル**の新約全書は、續々版を重ねて、廣く一般人民の間に行はる。仕立屋も、製靴師も、又婦女子及び無學の輩までも、凡そ少しく獨逸語を讀み得る者は、有らゆる眞理の源泉として熱心に之を研究す。或者はそを暗記し、或者はそを懷にして暫くも身を離さず。彼等は數ヶ月にして一廉の學者に成りすましたりと自信し、信仰及び福音の事に關しては舊教信徒は愚か、僧侶

羅馬教の名士コホリオスの批評

宗教的智識の普及

修道僧、扨は神學博士とでも、議論を戰はすを辭せざる意氣込なり』と。

アレアンドロ禁令を視て感涙に咽ぶ

カロロ帝は、五月廿六日即ち日曜日の禮拜式の終りし後、かねて獨逸語と拉丁語もて正式に認められし禁令に署名せられしが、その時帝は莞爾として**アレアンドロ**に打向ひ、『是にて御身も滿足に思ふや』との御下問あり。**ア**氏が感涙に咽びつゝ、あまたゝび陛下に謝して退席せし時の樣子は、宛ながら鬼の首を取りたらんやうなりき。夫より三日の後、即ち二十九日に、法王と帝との間に對佛秘密同盟の討結せられし事を思ひ合せば、年若き**カロロ**のいかに抜目なきかに、讀者も一驚を喫せらるゝなるべし。扨その禁令は、法王の破門狀に讓らざる嚴しき沙汰にて、**ルーテル**及び彼と同意見を抱ける者は、之を異端者として焚刑に處し、異端者の著書は、悉く之を焚き拂ひ、今後その類の書を印刷し、授受し、繙讀するを禁ずるといふ旨意なりしが、如何せむ眞面目に**ルーテル**の著書を焚き拂ひしは、遠き外國(英、蘇)のみにて、肝腎の獨逸國にては、禁令もその功を奏せず。**ルーテル**等の著書、到る處の諸市にて公然販賣

禁令の大要

禁令行はれず

その行へれざる理由は地方分權に在り

せられ、羅馬教會反對の書籍は、尙熾んに梓に上されつゝありしなり。此の如き奇異の現象は、中央集權制度の發達せる英國、佛朗西、西班牙の如き邦々に於て、殆ど有得べからざる事なれども、獨逸の國狀は予が前章に述べし如くなるを知らば、讀者は必ずその止むを得ざる結果なるを合點し給ふなるべし。帝にして是非共その禁令を實施せんと欲せば、兵力を用ゐるの外途なく、帝自ら此策に出でなば、獨逸は二分して一は羅馬方に屬し、他は**ルーテル**に味方して、戰雲容易に收まるべくもあらず。帝がその孰れを取るべきやに就きて、苦心しつゝありし時に當り、**フランシス**一世は密かに戰備を整へて、伊太利に於ける**カロロ**の領地を奪はんと企圖しつゝあり。**カロロ**は既に法王と同盟を約し、更に英國の**ヘンリ**八世と提携しつゝ、外交上に於て既に機先を制せり。然れども帝は更に戰爭の用意に着手すべき必要あるを以て、悠々として異端者處分の爲に、永く獨逸に留まる能はず。匆々**ヴオルムス**國會を終結し、英國に迂廻して西班牙に向へり。兩王の第一戰は一五二一年

帝の苦心

カロロとフランシスとの第一戰

法王の交代と其政策の變更

の秋より始まり、一五二五年佛軍**パヴヰア**に大敗し、**フランシス**王捕虜となるに及びて漸く和を結びしが、一五二七年再び開戰となりぬ。

是より先き法王**レオ**十世は、一五二一年十二月に崩御せられ、**アドリアン六**世その後を襲ひて、依然帝と同盟をつゞけしが、一五二三年**アドリアン**示寂し、**クレメント**七世即位するや。乃ち**カロロ**を捨てゝ佛國と結べり。

帝政務をReichsregimentに委ね

此の如く政局多端なりしを以て、帝は**ヴオルムス**を去りてより九年間自ら獨逸の地を蹈むの遑なく、政治の大體は之を指圖せられしとはいへ、詳細の始末は之を二十餘名の貴族を以て組織せらるゝ攝政局に委ねられたり。獨逸の異端者に取りては、帝の兵馬倥偬こそ此上なき仕合なりしなれ。彼等は鬼の留守に洗濯するの好機會を得たり。但し改革運動の困難も亦將に輻輳せんとす。

紀念すべき一五二一年

ルーテルの人望天に冲す

改革に贊成せし人々の動機

第十章　改革主義の傳播

紀念すべきヴオルムス國會のありし一五二一年に、西班牙の冒險家コルテツは、新大陸にありてメキシコ占領を遂げ。最初の世界週航者なるマゼランが、フ井リピン群島を畧取して、身は非命に斃れしと雖も、副船長デルカノは之に屈せずして歸航を續けし年なり。此年に於て改革運動は隆盛の極に達し、ルーテル　エラスムス　フツテン等は空前の人望を肆にしたり。就中ルーテルの如きは、預言者エリアに比せられ、人の貌を取りて此世に降りし天使と仰がれぬ。羅馬法廳及び僧侶の無學不智を攻擊せし點に於て、ルーテルとエラスムスとは共に其目的を一にするが故に、人文學者は概ね此運動に贊成したり。農民は僧侶の壓制を脱せんと欲し、且宗教税の減少を期待せしが故に、ル氏を彼等の救濟者として尊宗したり。騎士等は俗權を執れる高僧等に反抗して、自家の運命を開拓すべき時機到來せしが故に、ルーテルに加擔せしならむ。此の如くその動機の種々雜多なるに拘はらず。祖國を愛し、羅馬教會の壓制に反抗せんとする點に於ては、則ち一致せり。然れども若し愈々聖ペテロ以來、千五百年の長久尊嚴なる歴史を有せる教會と分離して、獨立の新教會を起さんとする場合に臨まば、泰平を祈る保守主義の徒輩は、恐くは之に從ふの勇氣なからむ。又過激急進を喜ぶ輩は、ルーテルの行動を尚手緩るしとして慊然たるものもあらむ。更に改革の主義目的の那邊に存するやを解せずして、雷同阿附せし彌次馬に至りては、唯其時の形勢と一身の利害より打算して、輕々しく進退を左右せんのみ。一五二一年は、ルーテルがヴオルムスの議場に猛虎の一聲を留めて、ワルトブルヒの嵎に逃避したる年にして、その翌年より續々異分子の脱離するあり。又改革運動もその區域いよ〳〵廣がりて、その唱道者の巨腕を以てするも、殆ど御すべからざらんとす。然りと雖もルーテルの天下に呼號せし所、眞個の反響を喚び起さずしては止まず。改革の永續的分子は、今や深く且廣く人心に浸潤せんと

贊成者の分析

猛虎一聲ワルトブルヒにかくる

改革派出版物の劇增

す。

改革主義の眞相漸次一般人民の間に認められ、熱心なる歸依者起りぬ。一五一八年以前、獨逸全國にて年々印刷せられし書籍五十種を出でざりしが、その翌年より頓みにその數を增し、而も十中八九は改革に關係あるものとなりぬ。何れの書肆も喜んで是等の書籍を出版すれど、若し夫れ羅馬方の出版物に至ては、著者自らその費用を負擔するに非ざれば、拒絶せらるゝが常なり。一五二一年に至りては、**ルーテル**の門弟朋友にして著書を公にして盛んに新說を唱へし者甚だ衆し。**ルーテル**の新約聖書の初版の出でし少し前に、刊行せられたる**メランクトン**の名著 Loci Communes は、新敎神學の大要を組織的に說きしものにて、殊に識者の間に深き感化を予へたり。**ギユンツブルグ**の**ヨハン・エベルリン**は、**フランシス**派の修道僧にして、文章に巧みなりしが、熱心なる改革の贊成者となり、**ヴオルムス**國會の開會されし頃より、奇拔なる論文を續々出版して、大に喝采を博せり。南方獨逸の職工農民等の間

メランクトンの Loci Communes

Gunzburg の Johan Eberlin

僧侶下民の怨府となる

には、僧侶に對する嫌厭の念一段甚しく、彼等が生活上の困苦は、半は僧侶の奢侈に耽りて、其費用を下民に誅求するの結果なりと信ずるが故に、彼等は好んで僧侶攻擊の小冊子を讀み、野外にまれ、酒屋の店頭にまれ、暇あれば三々五々相集りて、時事を痛論するを樂めり。是等の議論は何時しか革命の種子を蒔きて、一五二四—五年の百姓一揆を釀すに至らんとす。

辯舌に由りて改革主義を鼓吹せし者の多かりし事は勿論なれども、又畫家が其技術を以て之を幇助せし事も亦鮮からざりき。**ルーテル**及び其兩親、又他の改革家等の肖像を多く後世に傳へたる、**ウ**市の藥店主人なりし**クラナツハ**と、當時獨逸に時めきたる最大畫伯にして、頗る眞率なる**ルーテル**の敬慕者の一人なりし、**デユーレル**の功勞は言はずもがな。天下後世に其名の知られざりし畫家にして、或は諷刺的に、又は敎訓的に、意匠を凝らして人心を啓發したる事、實に多大なりしなり。是等の畫は概ね書物の挿畫又は表紙の飾として用ゐられたり。今そ

畫家の聲援

眞理の凱旋と風する諷刺畫

の一例を擧ぐれば、眞理の凱旋と題して、多くの獨逸人が歡迎の歌をうたひつゝ凱旋者の一行を迎へんとする圖あり。行列の先登は**モーゼ**にして、**アブラハム**以下の**イスラエル**人の父祖、豫言者、使徒等、聖書を容れたる櫃を運びつゝ出で來る。**フッテン**軍馬に乘りてその後に在り。その馬の尾に一條の鎖あり。無數の僧侶を捕虜として之に繫げり。その後に法冠を失ひたる一人の大監督、落ちかゝりたる三層冠と毀れたる笏を携へたる法王、悄然として徒歩し、その後に猫、家などの首を有する多くの怪物あり。是等は僧正及び修道僧に擬へしものなり。次ぎに四福音書の記者に像どりたる四個の猛獸に曳かれつゝ、凱旋車顯はる。猛獸の一匹の背上に天使騎れり。**カールスタット**はその車の前に立ち、**ルーテル**はその側を濶歩す。その車中には、**イエス**座を占めて、斷へず『我は道なり眞理なり生命なり』と宣言す。殉教者は讃美しつつその後に從ふ。獨逸の市民は道にその上衣を布き、少年少女等は花をまき散らして、**イエス**を迎へんとす。以上はその一例に過ぎざれど

改革主義の傳播

有力なる諸侯新教に加盟す

も、吾人をして當時の獨逸人民の意向を想像せしむるに堪へたり。此の如き意匠は決して畫家の獨力案出せしものに非ず。神學者の助言に基きて畫きしものなり。**ルーテル**。**メランクトン**等も親しく畫家に指圖せしことあり。

改革主義は、猛火の枯野を焚くが如き勢にて、各州に傳播せり。修道院の中にて尤も多數の贊同者を出せしは、勿論**アウガスチン**派にして、**フランシス**派之に次ぎしが、全然反對の**ドミニック**派よりも、**ブーケル**の如き有力の人物を出しぬ。**ブーケル**は**ストラスブルグ**市に在りて牧會の任に當りし人にて、後**カルヴァン**と親交を訂せり。**ストラスブルグ**以外の自由市、即ち**アウグスブルグ**。**ニュルンベルグ**等も早くより新教主義に加盟したり。新教諸侯の中尤も勢力ありしは、勿論**サキソニア**選侯なりしが、侯の親戚にして等しく**サキソニア**の一部を領せる**ゲオルグ**侯は反對の側に立てり。**ゲオルグ**の義子なる**ヘッセン**伯**フヰリップ**は斷然新教方に加りて領袖の一人となりぬ。**ブランデン**

プルグの邊境伯、東**プロイセン**の領主なるその弟**アルブレヒト**も、亦新教に加りしが、此兄弟の加盟は他日獨逸に於ける兩宗派の權衡上に大關係を及ぼしたる事件なりとす。

第十一章　ウヰッテンベルヒ市の騒擾――革命的分子排斥せらる

改革と革命と因緣淺からず

宗教改革は、今や言論の時代を經過して、實行の時代に入れり。由來大改革は革命の種子を藏す。此兩者は假し兄弟にあらずとするも、畢竟叔姪たる因緣を免れず。宗教改革の將に實行期に移らんとするや。過激なる輩は、そを革命的の運動たらしめんとせり。かゝる傾向は、此年の春既に**ヴオルムス**市に顯はれ、六七月に至りて**エルフルト**に更に

改革運動漸く過激となる

亂暴なる騒動起りしが、同年の末頃より改革運動の中心たる**ウヰッテンベルヒ**市に於て、同一の騒動を見るに至れり。法王の破門狀の發布せられ、又皇帝の禁令の出でしに拘はらず。**ウ**市の大學は却て隆盛に赴き、學生の數一千人を越へたり。而して其學生等の國籍は十個國以上に渉り、歐洲大小の諸國にして、多少の代表者を此大學に有せざるは罕なり。彼等の此市に在るや。各自主に在る所の兄弟として親しみ、皆**バイブル**を手にして神學上の議論を上下せり。**メランクトン**は依然その聲望を青年學生の間に有せしが、實務的の才幹は彼の長所にあらず。此方面に於ては**カールスタット**が然その頭角を露はせり。彼は優きに**ライプチッヒ**の討論會の時、**ルーテル**と同行せし人なり。本名を**カールスタットのアンドレアス・ボーデンスタイン**といふ。彼は**ルーテル**の先輩にして、辯論文章に長じ、統御の才あり。然れども天性激烈、往々感情に驅られて極端に走る。夙に後進なる**ルーテル**の盛名を

カールスタット過激者流を率ゐんとす

僧侶妻帶を行ひマスの禮を廢す

の、徒らに議論に馳せてその實行に迂なるを看取し、百尺竿頭一歩を進めて、教會制度の改革に着手したり。彼は先づ僧侶の誓約を遵守すべき必要なしと唱へ、寧ろ妻帶還俗する事の神意に適へるを論じて、その實行を促がし、より、其說に隨ふて妻帶を實行する者續々輩出したり。又彼は加特力教會にて最も重要の儀式なるマスの大禮を廢して、單純なる初代教會の晩餐式を採用すべき事を論じたり。此際カールスタットを援けて一層過激の說を唱へし者は、年壯氣鋭の修道僧ツヴヰリンゲなり。その雄辯なる說教は、嘗てルーテルの稱讃を受けしことあり。ツヴヰリンゲが盛んに人民を煽動せし爲、クリスマスの前夜暴民教會に濫入して器物を破壞し、僧侶を脅かしたり。その翌日即ちクリスマス祭日に、カールスタットは新式の晩餐禮を行ひて尙保守主義に傾ける多くの市民を愕かしめたり。

ツヴヰリンゲ雄辯を揮ひて市の細民を煽動す

カールスタット。ツヴヰリンゲの二人が、ルーテルの不在と、メランクトンの温厚にして學者風なるにつけ入りて、上述の如き過激なる改革を斷行しつゝありし時に際し、更に一段詭激にして迷妄的なるツヴヰッカウの豫言者なる者、ウ市に入り來りて擘援を始めたり。ミュンツエル。ストルヒ。スチューブネルの三人是なり。彼等は、サキソニア州の西南隅に在りて織物業の盛なるツヴヰッカウ市の住民にして、且自ら神の啓示を蒙れりと稱するが故に、ツヴヰッカウの豫言者と稱せらる。彼等の主張する說は、半は宗教的にして半は共產主義に屬す。か、る運動は、十五世紀の末以來屢々獨逸の農民及び職工の間に起りし現象にして、强ち新奇の事件とは謂ふべからず。ミュンツエルは元教職に在りしが、所謂感情家にして理智乏しく、宗教上の迷妄に陷り易し。ストルヒは時計師なりしが、自ら天使ガブリエルの幻影に接せりと信じて、盛んに說教を始め、ミュンツエル、及び嘗てウヰッテンベルヒ大學に在りしスチューブネルと提携せり。彼等は共產主義を實行し、乞食を禁じ、靑樓を閉鎖し、マスの禮式を廢して、簡便なる晩餐禮を執行すべき事を唱へたり。その說の餘りに過激なりし爲、ツヴヰッカウ市

狂妄なるツヴヰッカウの豫言者

豫言者等の來歷

極端なる破壞主義

人心恟々市民は牧者を失へる羊群の如し

を逐はれしが、恰も好し、**カールスタット**の主張の稍々己れ等の說と相類せるを看て、十二月廿七日**ウ**市に來りしなり。兩者の勢力合同せし後、その運動は尙一層極端に馳せ、凡そ加特力敎會に屬する會堂內の彫刻、繪畫その他の裝飾品は、悉く之を取拂ひ、斷食日を全廢し、その日に公然肉を食ひて憚らず。小兒洗禮の無効を唱へ、且眞の基督敎徒たるものは、聖靈の敎示を蒙るが故に、官吏を置きて市政を監督せしむべき必要なく、又世俗的の學問の必要なしと主張するに至れり。彼等は兒童受洗の無効を唱へし爲に、再洗禮派の名稱を附せられしと雖も、その主張は各種の分子を包含し、中には尤も急激なる**プス**黨の感化を蒙りし點あり。**ウ**市の動搖混亂は益々烈しく、人心恟々、暴漢狼藉、秩序崩壞して歸着する所を知らず。而も此騷動は惟り**ウ**市に止まらず、**グリッマ**、**アルテンベルグ**等にも蔓延せんとす。若し選侯が速かに此騷動を鎭撫し得ざるときは、彼を敵視せし諸侯は、攝政議會の干涉を請ふて、改革運動を根本より覆さんとする計畧を回らしつゝありしなり。大

ワルトブルク城の隱士を除きて其任に堪ふる者なし

ルーテルが據りし城壁は只一個の講壇のみ

學の敎授等は呆氣に取られて袖手傍觀し、溫良なる**メランクトン**は只當惑して眉を顰むるのみ。市の役人等は途に選侯の干涉を仰ぐに至れり。侯は顧問官の一人を派して鎭靜を圖りしも、その効なし。此波瀾を鎭めて、迷へる羊を再びその羊牢に導き返さん者は、**ワルトブルグ**に潛伏せる偉人を措かて、他にあることなし。左れど侯は、公けに皇帝の禁令を蒙りたる彼を召出して、**ウ**市鎭靜の事を命ずること能はざりき。

十二月上旬**ルーテル**は**ウ**市に微行せしことあり。又その後諸友の通信によりて**ウ**市の實況を熟知し、且選侯の意中をも畧ぼ察したれば、表面上侯の反對せらるゝに拘はらず。一五二二年三月突然**ウ**市に顯はる。彼が**ウ**市に入りて第一に占領したる城壁は、只一個の講壇のみ。彼は九日の間續けさまに聖壇に立ちて、その雄辯を振ひ、立ろに**カールスタット**。**ツヴヰリング**。及び自稱豫言者を沈默せしめたり。此時に**ルーテル**の態度は、吾人の賞讃を價す。彼は毫も人身攻擊を爲さず。

ルーテルの成功と過激派の分離

舊友を罵らず。諄々積極的に福音の神髄を說き、過激亂暴に馳せて改革の本旨に戻らざらんことを勸告したり。彼は尙ほ騷動の餘波を受けし諸市に到りて同一の說敎を爲し、又**ツヴ并ッカウ**市に到りて人心を靜謐に歸せしめたり。諸市皆**ルーテル**を德とし、その勢を謝せり。但し過激迷妄の徒は**ルーテル**と分離して、その主旨を貫かんと欲し、一五二四—五年間に起らんとする百姓一揆の一遠因を爲すに至れり。

第十二章　政治上の事情及び改革運動と異分子の乖離

皇帝の不在中、獨逸の政治は攝政議會之を司れり。此議會は二十餘名の有力なる諸侯より成立し、帝の弟**フエルヂナンド**大侯其議長たり。

攝政議會の弱

新法王アドリアンの方針

兩派調和の見込なし

最初は改革運動に對して斷乎たる態度を執り、ドシ〳〵禁令を實行せん方針なりしが、議會の所在地なる**ニュルンベルグ**に於てすら此事行はれず。加之**ルーテル**が**ウ**市の騷動を鎭定せし事は、大に改革主義の信用を恢復したり。土耳古軍の西侵は獨逸諸侯の一致團結を要し、新法王**アドリアン**六世の方針は、先づ敎會內の腐敗惡弊を一掃して、獨逸の異端者を出來得る限り、羅馬敎會に復歸せしめんとするに在りしを以て、禁令の實行は荏苒月を閱して其効を見るに至らず。强いて之を行はんとする時は、內亂の起らんとする憂あるが故に、羅馬方の諸侯と雖も、尙躊躇せざるを得ざりしなり。かゝる機會に乘じて改革運動は漸次その勢力を增加せしが、一五二四年に至り、新舊兩敎の諸侯は、何れも鮮明なる旗旆を揚げて、最早和合せん見込なく、早晩分裂せんとする兆を呈せり。

然れども政治的勢力の分派未だ判然せざるに當りて、改革運動は他の異分子と分離するの不得止に立ち至れり。即ち**ウ**市の騷動が鎭壓

新教は將に政者の具たらんとす

諸の異分子改革派と分離す

騎士の失敗

せられし一五二二年より、恐るべき百姓一揆の平定せられし一五二五年に至るまでの四ヶ年間に、宗教改革は種々なる異分子と分離して、其穩健なる行徑を辿るに至りしが、夫と同時にその勢力も大に減殺され、殊に滔々たる下民の同情を失ひて、宗教は將に爲政者の具たらんとする傾向を示せり。人文學者の領袖**エラスムス**が、**ルーテル**と爭ひて、羅馬教に復歸せし爲に、人文學者の多數が、改革運動と絶縁せし事は、即ちその一なり。騎士の一團體が、名を宗教に托し政治的野心を遂げんと欲して失敗せし事、是れその二なり。教會制度を革新せんとせし急進過激なる輩は即ち第三の異分子なるが、彼等が**ルーテル**の反對を受け、終に全く彼と袂を分つに至りし事情は、既に前章に舒せしが如し。故に吾人は本章に於て他の二件につきて畧述せんと欲す。

第一騎士の失敗。獨逸の騎士團體は、政治上の危險分子なり。彼等の地位は恰も波蘭（ポーランド）の貴族に似たり。自己の利權をのみ張らん事に汲々として、國家の秩序を重んぜず。私鬪を事とし、內亂に乘じて、僥倖を

騎士團貴族と同盟市の中間に立ちて大に窮す

シッキンゲン

フッテン

シッキンゲン竟に兵を擧ゝ

待んことを冀ひ、下民を强迫して金品を掠奪す。唯上に大貴族あるが爲に、彼等は常に其制肘を蒙る。十四世紀以後市の大同盟起りて騎士の亂暴を防禦するに及び、彼等は板挾みの姿となりて益々窮境に陷りぬ。宗教改革の爲に天下騷擾せんとするや。無事泰平に苦める彼等は喜んで之と協力し、何時にても劒を拔いて起んことを願へり。**エベルンブルグ**の城主**シッキンゲン**は、その中の卓出せる人物にして、仰がれて騎士仲間の領袖となりぬ。**ブーケル**は嘗てその城內に客となりしことあり。**ヴオルムス**行の時、四百の騎士と共に**ルーテル**を護衛せんと志願せしは、即ち此**シッキンゲン**なり。**フランケン**の一門閥の出にして、詩文を能くするに由りて夙に雷名を馳せたる**フッテン**は、彼の友なり。**フッテン**は悲歌慷慨、愛國の熱血滿身に湧きて、動もすれば急激の手段に訴へんとす。**シッキンゲン**が兵を擧ぐるに至りしは、**フッテン**の勸誘に由るもの多し。一五二二年八月**シッキンゲン**名を宗教に藉りて**ランダウ**に兵を聚め、**トリエル**大監督の領內に侵入せり

騎士の失敗

人文學者の分離

人文學者に二種あり

人文學の泰斗エラスムスの小傳

（或は云ふ**ブランデンブルグ**侯**マインツ**大監督等黒幕より暗に騎士等を教唆したりと）。然るに**トリエル**大監督の能く禦ぎし事と、諸侯の援軍の速かに增加せし事と、大砲が城塞破壞に効を示せし事とに由りて騎士軍は破れ、**シッキンゲン**は戰死し、**フッテン**は瑞西に亡命して、輕軻落泊の中にその生を終はれり。此時以來騎士の勢力また振はず。彼等は已に社會に於ける獨立の一階級を成す能はざるに至りぬ。

第二、人文學者の分離。人文學の興隆は宗教改革の一原因にして、人文學者の一部が熱心に**ルーテル**の運動を歡迎せし事は、吾人既に之を述べたり。但し人文學者の中には、非宗教的のものと宗教的のものとの二派あり。前者は即ち純粹に文學のみを尊宗して道德宗教の事を顧みざる輩にして、南歐の人文學者專ら之に屬し、英獨兩國に於ける人文學者の多數及び佛國人文學者の一小部分は即ち後者に屬せり。後者の團體が此の如き方針を取るに至りしは、主として**エラスムス**の態度に歸因す。**エラスムス**は和蘭の人なり。**ルーテル**より十七歲の兄

改革運動に對せし彼の態度

にして、**ヘブライ**、希臘、拉丁の古文學に精通し、殊に拉丁文章に妙を得て、流暢典雅、當時何人も能く彼に及ぶ者なし。社會風教の不振を慨き。僧侶仲間の腐敗を憤り。筆を呵して彼等を罵詈諷誡し。讀者をして痛快と呼び、捧腹に堪へざらしめたり。一五一七年彼が出版せし註釋附希臘語新約聖書は、宗教改革家に取りて無二の寶典となり、該運動に多大の援助を予へたり。故に**ルーテル**が九十五個條を掲示し、引續きて許多の論文を公にして、羅馬教會改革の必要を喝々するや。世人は概ね**エラスムス**を**ルーテル**の先驅として、共にその志を同ふする者と信じたり。然るに**エ**氏は天性柔和にして、喧騒黨爭を忌むと甚しく、**ルーテル**流の勇氣は露ほどもなし。改革運動のやゝ過激に涉らんとするや。彼堅く口を噤み筆を收めて久しくその意見を吐露せず。法王は僧正の榮位を以て彼を誘ひしが、彼之に應せず。左りとて**ルーテル**方と名乘りて戰場に顯はれん事は、彼の肯んぜざる所なり。英に往き、獨に往き、又瑞に往きて優遊自適。超然として獨り高蹈し、唯少數

エラスムス終にルーテルの反對に立つ

の文士墨客と交りて、音信を通せしのみ。此の如く不偏不黨の態度を持すること數年に及びしが、彼は心ならずも其沈默を破りて、自己の立場を公示せざるべからざるに至れり。彼は先づ瑞西に逃げ來りしツテンに爭論を挑まれて止むなく筆を採り、その後人間の自由意志に關してルーテルと論戰し、終に斷然羅馬教會に復歸せり。兩將袂を分ちて反對の地位に立ちしより、人文學者の中その師の例に倣ひし者頗る多かりき。若し夫れ一段重大なる農民の亂及びその結果に就きては、吾人請ふ次章に於て之を詳述せむ

第十三章　農民の叛亂

一五一七年以來、騂馬の勢を以て馳せ來りし改革運動は、一五二二年

改革運動の再頓挫

ルーテル保守退嬰に傾く

の始めに至りて一頓挫し、一五二四年に至りて再頓挫せり。獨逸諸侯は宗教問題に就きて將に分裂を生ぜんとす。法王廳は此機に乘じてその勢力の挽回に努めんとす。改革運動は最早國民全體の嘱望に副ふ能はず。隨てその教會は獨逸國民の教會に非らずして、單にルーテル派の團體と見做さるゝに至れり。ルーテルは自ら孵化せし雛の生長案外速かにして、且其形の意外に巨大なるを恐れ、之を籠中に檻禁して其飛躍を防がんと欲するに似たり。彼はウヰッテンベルヒ市に革命的騷動の起りし以來、著しく保守的に傾きぬ。是より後の彼の行動は、常に周圍の事情と結果の配慮に律せらるゝが故に、自家撞着、前後矛盾の點多し。彼は出來得る限り舊き制度習慣を維持し、出來得る限り少しの變更を加へて福音主義の獨立教會を建てんと欲す。換言せば彼は舊き革囊に盛るに新しき葡萄酒を以てせんとするなり。醱酵してその囊を破らざらんことを冀ふも豈得べけむや。今より舒せんとする農民の亂は、即ち新酒醱酵の極めて猛烈なるものなり。

農民叛亂の原因は何ぞや

宗教改革は農民の叛亂を生みし母なりとは、加特力派の史家が異口同音に唱ふる所。又百姓一揆は、宗教改革以前即ち十五世紀の末頃より屢々獨逸に起りし現象なれば、一五二四―五年間の叛亂もその一に屬し、該改革と何等の關係なしと辯護するは、新教派の史家の一致する所なれども、具さに其眞相を叩けば、兩者の言何れも其背馳に當れりとは謂ひ難し。**ルーテル**は既に**キリスチヤン**の自由を說き、神の前には僧俗無差別、萬人平等なるを唱へ、聖書の教訓と良心理性の指導とに據りて、約一千年間嚴然として維持し來りし宗教界の制度習慣を打破し、法王の教權を否定せしに非ずや。宗教改革てふ美名は、改革の味方が自ら採用せしものにして、羅馬法廳の見地より觀れば、**ルーテル**は勿論叛逆の張本人ならんのみ。悲慘なる生活狀態に苦しみ、僧俗司權者の不條理千萬なる羈軛の下に呻吟せる農民が、**ルーテル**の唱道せし宗教上の民主々義に隨喜して、その心靈の救濟を得ると同時に、物質上の救濟を得んと企圖せしは、決して不合理の事と謂ふべからず。左れど

ルーテルは羅馬教會の謀叛人

策士ルーテルを誣ふ

農民背稅に苦む

羅馬方の策士等が意地惡しく罪を**ルーテル**一人に塗り着けんとして、此農民叛亂の張本人てふ惡名を以て、彼を傷けんとするは、恰も**ワット**・**タイラー**の指揮せし亂暴なる社會主義を以て**ウ井ツクリッフ**の所說なりと誣ひ、又**フス**黨の亂に鑑勇を振ひし**チスカ**の暴行を、**フス**の責任に歸すると一般、その不法沒常識なること智者を待て後知るを要せざるなり。

『弱い者いぢめ』は古今東西を問はず、社會不成文律の一なるに似たり。農業本位の時代漸く去り、商業將に勃興せんとして物價騰貴し、上下生活難を唱つに當り、諸侯は重歛苛稅を以て其不足を補はざるを得ざるに至れり。而してその尤も重苦しき壓迫を受けて訴ふるに道なく、濟ふに術なかりし者は、社會最下層の人民なりき。彼等と同じ階級の中より出でし**ルーテル**が、その侃々の辯、痛烈の文章を以て、盛んに羅馬教會を攻擊し、更に進んで基督教徒の自由、平等、同胞の主義を鼓吹するに當り、天下の農民翕然として之に向ひしは、蓋し自然の人情なり。若

下民が改革を歡迎せし一理由茲に在り

しルーテルの福音を以て單に心靈上に止まり、一歩も夫れ以外に及ぶべからざるものとせば、(ルーテル後窮してかくの如く說きぬ)、ルーテル自身の擧動既にその軌道を逸したるなり。況んや多くの急激なる叢ありて盛んにその實地應用策を農民の間に說法するに於てをや。

農夫等の歎願書

一五二四年六月、農民の亂はライン河の上流なる瑞西に近きシヤツフハウゼン附近に破裂せり。元軍人なりしハンス・ミユルレル之れが統率の任に擧げらる。扨その六十二個條の歎願を觀るに、凡て農事に關する穩當なる要求にして、毫も宗教的若しくは革命的の分子を含まず。吾人は反て當時の貴族が農民を犬馬扱にして、如何に無慈悲なりしかに一驚を喫するのみ。左れど此叛亂はその區域の愈々擴張せらるゝに順ひて各種の異分子と混合し、終に宗教上の主張を藉りて急激なる社會主義の革命を行はんとするに至りしなり。當時ルーテルの敎旨は中等の市民に歡迎せられしと雖も、下流の人民は寧ろカールスタット。ミユンツエル等の意見に贊同したりしなり。扨此頃カロ

異分子の混入

農民が一時優勢なりし所以

ロ帝は伊太利の北部に於て佛軍と戰爭を交へつゝありしを以て、獨逸諸侯は皆帝に援兵を送り、農民の叛亂を鎭定する爲めに迅速の處置を執ること能はざりき。是に於てか叛亂は漸次蔓延してその威を逞ふし、彼等の要求する所は凡て道理に適ひ、神意に從ひ、キリストの敎旨に合するが故に、司權者の之を容れんこと素より當然なりと揚言するに至れり。その口吻何ぞルーテルと相似たるの甚しきや。瑞西領內の暴徒中には早くよりツヰングリーの友人シヤツペレルあり。その後獨逸領に於てカールスタット、ミユンツエルを始め其他の宗教家陸續之に投じければ、その叛亂の性質が一變せしこと毫も怪むに足らざるなり。却說各地の叛民は、一五二五年の三月シユワーベン領(スワビア)のメミンゲン市に會合して、「福音主義の同胞」なりと宣言し、有名なる十二個條を決議したり。その歎願の個條は概ね穩當にして、ルーテルも最初之を視て彼等に同情を寄せ、貴族に向てその要求に應せん事を勸告せしほどなりき。その末文の一節は大に吾人が注意すべき

宗教的趣味を加ふ

十二個條の歎願

叛民の揭言ルーテルの口吻に似たり

叛徒猖獗

過激派勢力を占む

ものなり。彼等の要求にして若し神の言(聖書の文句)に違背する所あらば、喜んで之を棄つべし。諸侯も亦神の言に違背する所の特權を放棄せんことを望むといふ旨意を記せり。此は是れ**ルーテル**が**ヴオルムス**の國會に於て道破したる斷案を轉用して諸侯に迫り、以て彼等の社會的窮狀を改良せんと企圖せるに非ずして何ぞや。

叛亂は破竹の勢を以て、**ライン**河中流の諸領より、北は**ツーリンギア**に及び、東南に於ては**チロル**　**サルツブルグ**　**スタイエル**地方に延蔓せり。此時叛亂の災を免れしは、**バハリア**　**ヘツセン**其外東北の數州ありしのみ。叛徒の勢力增加するにつれて、その主張愈々過激となり、又焚燒、掠奪、殺戮を恣にし、殊に司權者に對して殘忍を行へり。且職工、犯罪人、僧侶、失職官吏、騎士等も叛徒に加り、又一二大貴族の之に加勢せしものあり。此の如く雜多なる諸分子混合するや。意見自ら一致せず。穩和派と過激派の二派に分れて互に嗜鬪せしが、結局亂暴分子の勝利に歸しぬ。然れども叛民は地方に由りてその利害を異にし、仁

烏合の農民終に大敗す

死者十萬

戰後の慘狀

君賢主の領內にては何等の不平なく、殆ど騷動を見ざりしものあり。叛徒等は統一を缺き、又彼等を操縱指揮して堂々たる戰爭を試むるに足るべき將軍なかりしを以て、一五二五年二月皇帝の軍が**パヴヰア**に大勝利を獲たる後、戰局落着して諸侯の援軍漸次歸國するに及び、烏合の農民軍は形勢益々惡しく、五月**フランケンハウゼン**に敗れ、巨魁**ミユンツエル**擒にせられ、續いて**ミユールハウゼン**に敗るゝや。北方の叛亂は已に收りぬ。南方に於ては尙諸處に微弱なる反抗を持續するものありて、翌年の春に至るまでは、全く鎭定せられざりき。

此叛亂鎭定の爲に殺戮せられたる農民の數は十萬人を越えたり。諸侯の彼等を伐ち、且つその捕虜を處刑するや。殘酷非道、筆紙に絕せり。若し亂平いで後その田園を耕耘せしむべき必要なかりせば、彼等は農民を塵にせしやも未だ知るべからず。城塞及び修道院の燼灰となりしもの一千以上村落の焚き拂はれしもの數百、家畜農具その他の動產は度々の掠奪に遭ひて其痕を留めず。田園は荒蕪に委せられ、無

領主の横暴前に倍す

開けて悔つしき玉手匣

治者富者の福音

數の寡婦と孤兒とは、到る處飢餓に瀕せんとす。然り而して貴族の多數は、その生き殘れる農民を遇すること以前に異ならず。否叛亂前よりも一層甚しき苦境に陷りしもの多し。『衣食足而知禮辱』とは千古の確言なり。宗教上より觀じ來れば、農民の亂は、貧弱なる被治者が、彼等の吾血を絞りて自己の榮耀榮華を恣にせる虐君の行爲を、正義なる神明に訴へたるなり。然るに暴力萬事を裁決して正邪は共に其賞罰を蒙らず。敗者が神明の存在を疑はんと欲するは自然の數のみ。**ルーテル**の福音も、彼等に取りては、開けて悔やしき玉手匣となり了んぬ。爾來彼等が**ルーテル**の說を以て單に治者富者に對する福音として、之を冷淡視するに至りしも無理からぬ次第と謂ふべし。殊に**ルーテル**は初め幾分の同情を農民に表しながら、其叛亂の稍革命的となり、暴行續出するを視るや。殆ど狼狽して極力農民を罵り、誹り、且詛ひ、貴族に激勵して彼等を片端より撃殺し、餘孽なからしめよと痛言せり。此檄文の出でしは一五二五年五月の半頃なれば、貴族等が彼の助言によ

ルーテルの一大過失

羅馬教徒新教徒の蹉跌を利用す

フリードリッヒ選帝侯の薨去

りて一層殘忍を敢てせしものとは云ふべからざるも、兎に角此極端無慈悲なる一篇の論文は**ルーテル**の一大失策にして、彼の品性上に一大汚點を留めしものたるや明けし。下層の人民は是より**ルーテル**。メランクトン等を憎み、改革運動の樞機は貴族の掌中に握られ、神學者は憐むべき婢僕の地位に下りぬ。現今獨逸に行はるゝ官立教會は實に此時に胚胎せしものなり。

獨逸の改革主義が、農民の叛亂の爲に一大蹉跌を爲すや。加特力教會は其機に乘じて鋭意勢力の挽回を圖れり。彼等はその叛亂を以て改革運動の自然的結果なりと論じて諸侯の恐怖心に訴へしより、久しく兩派の間に躊躇してその去就を決しかねたる貴族等は斷然舊教方に從屬する事となりぬ。

吾人は此章を結ぶに先だちて尙二事件の附記すべきものあり。一は一五二五年の五月、聰明を以て名高かりし**フリードリッヒ**選帝侯が逝去せられて、其弟**ヨハン**侯がその後を襲がれし事にして、二は**ルー**

ルーテルの結婚敵に攻撃の材料を供ふ

テルの結婚なり。同年の六月彼は元尼なりしカタリナ・フォン・ボーラと結婚せり。ル氏は此時四十二歳。是より先き彼は既に僧侶獨身制度の非なるを論ぜしことあるが故に、自ら其持論を實行すればとて別に怪むに足らざる譯なれども、恰も農民の叛亂漸く收りて左なきだに彼の心事を誤解し、其行動を非難する者多かりし時なりしを以て、私かに之を歎きしもの少からず。既に不和の間柄となりしエラスムスは得意の嘲弄を以て、之を冷評し、羅馬方の文士コホリオスは農民の失敗をルーテルの結婚と對照して暗にその人望を傷けんと試みたり。メランクトンが、ルーテルの突然なる結婚沙汰を聞きて杞憂を懷きしは一應尤の次第と謂ふべし。

教會の統治權諸侯の手に歸せんとす

再洗禮派

第十四章　前後二回のスパイエル國會

宗教改革の運動が、既に人文學者の同情を失ひ、詭激なる再洗禮派と分離し、更に多數の平民に敵視せらるゝに至りしを以て、此運動を操縦すべき實權は各州領主の掌に歸し、中等階級及び上流の人民、主として之に從へり。獨逸國内に、統一せる國立教會を設立せんとする希望は最早水泡となり了りぬ。(註。再洗禮派は尤大にして十餘種に分れたる宗教團體の總稱にして、各團體の唱ふる所の意見固より一致せず。中には使徒時代の共產主義を採用せんと企てしものあり。要するに幼兒洗禮が聖書に違背せる惡習慣にして、教會腐敗の大原因茲に存すと爲し、斷乎として之れに反對し、かゝる洗禮を受けし者は成長後改めて受洗すべき必要ありと主張せしより、アナバプチストの名稱を附せられしなり)。

農民の叛亂起りし以來、諸侯はルーテルの說に革命的分子の存せざ

新教徒の迫害の端緒

るやを氣遣ひしが、就中舊教方の貴族は之を恐れ憎むこと甚しく、舊教徒其機に乘じて盛んに中傷の語を放ちしより、南方に於ては既に公然**ルーテル**派の牧師信徒等を迫害し、彼等を絞殺し、且その財産を沒收するなどの事件續出したり。一五二五年の七月**デッサウ**に舊教諸侯の會合ありて加特力同盟を結びしかば、新教諸侯も恐慌して、同年の十月先づ**ヘッセン**伯**フ井リップ**と**ヨハン**選帝侯との間に防禦同盟の約

新教徒同盟

ヘッセン伯フ井リップ

束成立し、翌年の春に至り、その他の貴族及び諸市此盟約に加はりぬ。此新同盟は主として**フ井リップ**の斡旋に成りしものなり。伯は年尚壯く、その領地小にして列侯間に於ける地位高からざるも、政治家としての才幹見識に至ては、當時新教諸侯中の巨擘たり。性急にして往々過失なきにあらざれども、今後大に活動せんとする新教派の人物は正しく此人なり。

上述の如く新舊兩派の諸侯分裂して、互に相反目し、動もすれば干戈を以て相見へんとする時に際し、即ち一五二五年十二月**アウグスブル**

第一スパイエル國會ー新教派の優勢

グに國會召集せられしが、兩派の諸侯何れも之に參列せし者寡く、殆ど流會同樣の姿となりぬ。翌年六月**スパイエル**に開催されし國會は**ルーテル**が評して『最も大膽且自由なる國會』といへりしものなり。新教徒は委員を擧げて教儀及び制度に關する重要なる改革案を提出し、議長たりし**フエルヂナンド**大侯始め、舊教諸侯の反對あるに拘はらず。斷然之を通過せしめ、尚舊教方の提出せし**ヴオルムス**勅令の實施に異議を唱へ、宗教大會を召集して萬事を決着するまで、信仰上の事柄に就ては、各領主が神と皇帝とに對して適宜と認むる樣處理すべき事を決議したり。此最後の決議は小事の如くなるも、實は重大の關係を含めり。何となれば宗教問題の處分を各領主の意見に一任して皇帝及び中央政府をして一切之に干渉せざらしめんとする傾向顯然たればなり。扨此**スパイエル**國會に於て、新教方の氣焔が何故斯の如く熾なりしやといふに、法王**クレメント七**世が、全く帝の反對の側に立ちて**フランシス**王を扶けしを以て、帝は將に一方には大に**ルー**

宗教政治の地方分權

宗教改革若干各領地に實施せらるる

テルを利用せんとし、他方には兵力を以て法王を困めんと欲せしが爲なり。一五二七年帝の軍隊羅馬を占領し法王を聖アンゼロ城に圍む。此時西班牙人の中には法王の領地權を停止せよと帝に勸めし者さへありき。明治四年に至りて終に斷行せられたる法王の俗權停止の問題が、既に四百年以前に唱へられしは奇と謂ふべし。

一五二六年のスパイエル國會に於ける新教徒の勝利は、暗に一五五五年の宗教和約の結果を豫表するもの丶如し。新教諸侯はスパイエルの決議を隨意に會釋して、各自の領内に於ける宗教上の變革を斷行せしが、中には政治上の都合、若くは經濟上の利害より打算して、新教に改宗し、寺領及び之に附屬せし財産を沒收せしもの少しとせず。北獨逸はブランデンブルグ選侯領、マインツの大監督領、サキソニアの侯領、ブルンスウ并ツクヴォルフエンビユルテルを除くの外、悉く新教に屬せり。斯の如く新教徒が、傍若無人の勢を以て、其勢力を扶植しつ丶ありし間に、舊教徒は何故之を坐視せしかといふに、帝は一五二七

フエルヂナンド大侯ボヘミアとホンガリーを兼攝す

パックの密書僞造事件

年以來一五二九年に至るまで、佛王及びその同盟者と戰を交へて殆ど寧日なく、プエルヂナンド大侯は一五二六年より翌年にかけて、ボヘミア及びハンガリーの王位繼承權を獲んが爲に、全力を傾注しつ丶ありしが故なり。同年二月大侯は遂にその目的を達し、ボヘミアとハンガリー王位を兼攝せり。爾來該國はハプスブルグ家の管轄に屬し、現今に於ける墺太利、匈牙利聯合帝國の基礎を成しぬ。

久しく恨を呑んで新教諸侯の我儘を忍びし羅馬方の諸侯はフエルヂナンド大侯の凱旋を待ち、プレスラウに一大會議を開きて陰かに畫策する所あらんことを期したり。新教諸侯は切りに舊教方の事情を探知して、相應の防禦を爲さんと焦燥つ丶ありしが、此際少からず新教方の不利益を釀し丶はパックの密書僞造事件なり。パックはサキソニアのゲヲルグ侯の秘書官なりしが、偶々ヘッセン伯と邂逅せしことあり。伯は敵の樣子を探るに好き機會なりと信じ、舊教方に開戰の意志あるべしと詰問せしに、元來性質の良からぬパックは、忽ち惡心を

ルーテル僞作たるを看破す

起し、伯の賢察に誤りなき旨を答へ、證據として其秘密條約書を盗み出して伯に送らん事を誓へり。勿論**パック**はその報酬として巨額の金を受領すべき約束なりき。素より**パック**のいへりし如き秘密條約なるものは、事實上存せしにあらず。彼はそを僞造してその報酬を一攫せんと欲せしのみ。心有一疑字。幻影亦眞象の古語に洩れず。既に疑察の雲に掩はれたる**フ井リップ**の眼は、徐ろに**パック**の僞造書を看破するの力なく、深く信じて私かに之を**ヨハン**選侯と**ルーテル**とに示せり。その條約文には、最初**ハンガリー**に攻め入り、**ブエルヂナンド**を敵視して之に代はらんとする僭王**ジヨン・ツアポリア**を破り、然る後**サキソニア**選侯に向ひて**ルーテル**の引渡を迫り、若し之に應せざるときは兵力に訴へんといふ一項あり。選侯及び**ルーテル**はその僞物なる事を主張せしも、**フ井リップ**は固く執て動かず。使者を**ハンガリー**に送りて**ツアポリア**と同盟を結び、尙進んで佛王**フランシス**と同盟を約束したる後、伯は出師の準備に着手せしが、**ルーテル**は選侯に說きて兵

フ井リップ伯の合縱策

帝と法王との提携策に復せんとす

其理由

を動かさゝらしめたり。やがて伯は**パック**の爲に欺かれしを覺りしが、時期已に後れ、伯の處置は明かに羅馬方諸侯の知悉する所となりて彼等の憤怨を增加せり。此時以後羅馬方の領地內に於ける新敎徒に對する迫害頓に劇しくなり、又一五二九年の第二**スパイエル**國會に於て、舊敎徒が强固なる反對の態度を持するに至りしは、**フ井リップ**の過失に因るもの大なりと謂はざるべからず。

佛王との第二回戰爭中に、**カロロ**が法王に對する關係に著しき變化を來せり。換言せば帝は種々なる事件に關して法王の助力の必要を感せしなり。英國の**ヘンリ**八世が、その后**カザリン**(**カロロ**帝の伯母)を離婚せんと欲して、その裁可を法王に求めし事は即ちその一なり。**デンマルク**國に於ける**ルーテル**敎徒の爲に廢せられし、帝の義兄弟**キリスチアン**二世を王位に復せしむべき事是れその二なり。獨逸に於ける三大監督領が(**マインツ**、**トリエル**、**ケールン**)俗領地に變更せらるゝときは、皇帝の地位頗る危殆なり。寺領として之を保存し置く事

は法王の利益なると同時に、又實に皇帝の利益なり。是れ第三の必要なり。**カロロ**が此の如く、法王に接近すべく餘儀なくされつゝありし時に際し、法王も亦帝と提携せずしては伊太利に雄視し、且異端者を處分する事の困難なるを具さに覺りしを以て、兩者は再び一致協力して土耳古軍の西侵に備へ、獨逸の宗教問題を解決せんとするに至れり。恰も好し佛王**フランシス**が**マドリッド**幽閉中に締結せし、否、實は强迫的に締結せしめられたる和約を、法王の後援に由りて無効と宣告せし爲に起りし戰爭は、結局帝の勝利に歸し、一五二九年**カムブレー**の和約（**カロロ**の伯母と**フランシス**の母が重に談判の局に當りし爲に貴女の和約と稱せらるゝもの）に由りてその局を結べり。**フランシス**は賠償金を拂ひし上に伊太利、**フランダース**、**アルトワ**に對する要求を放棄したり。

一五二九年の貴女の和約

第二スパイエル會議に於ける舊教派の優勢

斯の如く**カロロ**帝は、佛王の勢力を伊太利その他の地方より驅除し得て意氣天を衝かんとし、法王との提携舊態に復して異端者に對する政策判然確定せしを以て、今や**スパイエル**に獨逸國會を召集して、一時寛容し置きたる一五二六年の決議を飜さんと欲するなり。一五二九年二月下旬より開かれし此國會に於ては、加特力教徒多數を制し、且帝の後援を頼みて頗る優勢となりしより、新教徒は毫も其意見を貫くこと能はず。終に左の如き決議を通過したり。即ち**ルーテル**派の諸州に於ては、加特力派の運動を寛容すべし。之に反して加特力派の諸州にては、**ルーテル**派に改宗するを許さゞるは勿論、**ルーテル**派の領内に於ても既に爲し終りたる改革以外、夫れ以上の改革を行ふを許さゞる事を決議したるなり。最後の一項は、明かに舊教僧侶の改宗を豫防し、又寺領の沒收を禁止するの旨意と知るべし。此決議が新教徒に取りて一大不利益なるは言を待たず。況んや南獨逸に勢力を得んとしつゝある**ツヰングリー**派、及び下流の人民に歡迎されつゝある再洗禮派の如きは、國法上殆ど存在の餘地を留めざるに於てをや。**ルーテル**派の辯士等は叫べり。『此は全く片手打の處置なり。恰も我等の

舊教徒の斷乎たる決議案

新教徒の死活問題

プロテスタントの稱起る

手足を束縛し置きつゝ、加特力派の反動(其頃將に起らんとしつゝありし)をして其勢力を逞ふせしむるに外ならず』と。舊教議員は之を聽きて平氣なり。蓋し彼等の目的瞭かに爰に存すればなり。

屈從せば新教派は最早自滅なり。反抗せんか。則ち武力を以て爭ふの覺悟なかるべからず。彼等は熟議の末抗議書に調印し、四月二十二日之を國會議場に朗讀せり。新教徒を羅馬加特力教徒と區別して**プロテスタント**と稱するは實に此時の抗議に始まる。其意蓋し不同意なるが故に其決議に從ふ能はず。此決議は多數に由るといふと雖も、實は兩派意見の衝突なり。一派の所信を以て他派を屈服せんと企つるは非なり。結局神の命か、皇帝の命か、二者その一を擇ばざるべからざる場合には、我等は前者に從はんのみといふに在り。最後の一個條は、宗教改革の徒が據て以て司權者に逆はんとする時に用ふる最も恐るべき武器なり。彼等は以上の抗議を爲すと同時に、竊かに防禦同盟を締結したり。扨抗議書に署名せし十四の自由市の中には**ツ井ングリー**派に屬するものあり。彼等は一時各自の頭上に落ち來らんとする危難に備へんが爲、止むなく**ルーテル**派と同盟したるなり。永く之を維持せんには、更めて融和の策を講ぜざるべからず。その成行如何は請ふ之を次章に讓らむ。

十年振りにカロロ帝獨逸國會に臨まんとす

第十五章

マルブルグの會見——獨、瑞新教徒の提携成らず

スパイエルに於ける第二國會は、睨み合ひの儘にて解散せられ、兩者の軋轢一層激烈となりぬ。是に於てか最後の裁決を與ふべき責任は、**カロロ**帝の双肩に懸れり。一五三〇年に開催せらるべき國會には、皇帝親しく臨御ありて、十年以來紛糾せる難問題を解決せんとす。若し

獨、瑞兩國新教徒の大團結を圖らんとす

獨逸神學者の反對

武力を以て相爭はん場合には、新教徒果して勝算ありや。此は甚だ覺束なし。況んや既に締結せられたる同盟者の中にすら、其向背未だ定まらざる者あるに於てをや。然らば則ち此際**ウ井ッテンベルヒ**の神學者等と、**チューリッヒ**の神學者等を一堂に會して、其提携を約束せしめ、之に由りて瑞西及び南獨逸の新教徒を**ルーテル**派と連合せしめん事、刻下の急務なりとす。**マルブルグ**會見の目的即ち此に存す。左れど今一層審かに事實の發展を語らんか。一五二九年の國會に提出されし新教徒の抗議は、倉皇の際に同意者を糾合せしものにて、南獨逸の諸市とは、同年の六月**ローダッハ**に合議して、教理上の打合せを爲さん筈なりき。抑も**ルーテル**派の諸侯と**ツ井ングリー**派の諸市との同盟は、獨逸方神學者の反對あらんことを豫期して、彼等に秘し置かれしが、その事の公にせらるゝや。彼等の憤慨果して非常にして、平和温厚を以て聞えたる**メランクトン**すら、深く其不都合を歎じ、若し此事なかりしならば、舊教諸侯は**ルーテル**派と折衝することを肯んせしならんといへり。かゝる形勢なりしを以て、**ローダッハ**に催ふされたる會議は、遂に畫餅に屬しぬ。されど主として調停に盡力せんとせし**ヘッセン**伯は、尚その失敗に懲ずして、**マルブルグ**城に兩派神學者の會見を催ふする事に決せり。

調停に熱心なる政治家ヘッセン伯

土耳古軍の西侵

宗教問題に關して、獨逸の諸侯等が頻りに暗鬪しつゝありし時に當り、東方に彼等の共敵顯はれたり。勇猛なる土耳古勢が**ハンガリー**に侵入して暴威を逞ふせしより、**ハンガリー**は援を墺太利に求めしが、**フェルヂナンド**大侯空しく機を失ひて充分の援兵を送る能はず。新月旗は**ハンガリー**の原野を覆ひ、**ソリーマン**二世の猛卒到る處に出沒し、殆ど無人の野を行くが如く、終に其國境を越え、墺太利に入り、その首府**ヴィエンナ**の壘壁の前に陣せり。諸侯急を聞き大に懼れ、宗教上の爭論を中止し、兵を聚めて之を救ふ。十月半に至り**ソリーマン**漸く斷念し、圍を解きて東歸せしが、**ハンガリー**の大半は依然その支配を仰げり。

新舊兩派の諸侯兵力を合せて土軍を驅逐す

マルブルグに於ける兩國神學者の會見

ツヰングリーの性格

瑞西國と羅馬法王との關係

兩派神學者の會見は、恰も土軍が雑府を包圍しつゝありし際、**ヘッセン**領の**マルブルグ**に於て行はれたり。此會見は一に**ツヰリップ**の斡旋に成りしものにして、其動機が主として政治上の必要に基ける事は、既に上文に述べしが如し。左はいへ此會見の成功するや否やは、兩派神學者の意見によりて決せらるべきものにして、**ツヰリップ**の辣腕も、此點に於ては殆ど揮ふの餘地なきが如し。**ツヰングリー**は**ルーテル**より僅かに二ヶ月の弟にして、一四八四年正月元旦に生る。彼は半は人文學の感化、半は愛國愛世の精神に驅られて、宗教改革を唱へ初めしが、その性質**ルーテル**將た**カルヴヰン**と大に異る處あり。又兩氏の如き深厚なる宗教上の經驗と苦心とを嘗めざるが故に、彼の宗教觀は自ら淺薄の嫌なき能はず。瑞西國は法王に取りて傭兵の出處なるを以て、法王は瑞西教會に對して極めて寛大なる方針を執り、他の邦々には到底見るべからざるほどの特別の處置鮮しとせず。**ツヰングリー**が改革を唱へし後に於ても、法王の彼を遇すること、全然**ルーテル**

此會議に對するツヰングリー及びルーテルの態度

Oecolampadius, Bucer, Hedio

と其趣を異にす。左れど**ツヰングリー**は、法王の懐柔手段に乗らずして、傭兵の習慣が瑞西の國風を茶毒するを看破し、極力之に反對したり。**ルーテル**には毛頭政治家たらん野心なく、徹頭徹尾、宗教家の本領を墨守し、政治上の成行に對しては殆ど無頓着なりしが、**ツヰングリー**は則ち然らず。彼は幼少の頃より、自治共和を以て國體と爲せる邦に育ちしを以て、政治に對する感興自ら深く、宗教改革の運動を經營するにも、寧ろ政治家たり經世家たる見地より、之を行はんと企てたり。是れ彼の長所にして又短所なり。一五三一年**カッペル**に戰死せしは、彼が經世家たる立場をさへ離れて、更に參謀指揮官の任に當らんとせしに坐するが如し。かるが故に**ヘッセン**伯の招待を受くるや、**ツヰン.グリー**は欣喜雀躍**エコラムパヂウス**　**ブーケル**　**ヘヂオ**等を率ゐ、危險なる敵地を通過して**マルブルグ**に來れり。**ルーテル**　**メランクトン**等は最初より此會見を怡ばず。又その成功の覺束なきを卜知せしも、**ヘッセン**伯に對する義理にほだされて、終にその招きに應じた

ルー氏最初より成功を危む

伯の苦心

る次第なり。農民の叛亂以來、**ルーテル**は民主々義若くは社會主義を嫌忌すること蛇蝎も啻ならず。左れば政治家の魂膽に頓着せざる**ルーテル**が、共和主義の瑞西及び南獨逸の自由市との提携を欲せず、寧ろ之を避けんとする事毫も怪むに足らず。加之**マルブルグ**會議の難關たらんとする聖晩餐式の問題に關しては、既に一五二七—八年に亘りて劇しき筆戰を交へし經驗もあれば、此點に於て双方折合はん事亦頗る困難なりと信ぜしに似たり。

此會見は十月三十日に始まり十一月五日に終りぬ。**フ井リップ**は有らゆる手段を悉して双方の融和調停を計らんと欲し、或は彼等を一堂に會せしめ、或は二人づゝ別室にて對談せしめ、故らに**ツ井ングリー**をメランクトンに配し、**ルーテル**をエコラムパヂウスに配しなどせし甲斐ありて、十五個條の中十四個條までは双方の同意を得て調印濟となりしが、晩餐式の一事に就きては、百方術を竭すも其効見へざりき。**ツ井ングリー**はいはく。晩餐式は**キリスト**の死を紀念する所の

晩餐式に關する意見の相違

一は合理主義に立ち他は神秘主義にかくる

加特力教のTransubstantiationノルーチルのConsubstantiationとは相似て一ならず

式なれば、緊要の意義は其時用ふる所のパン又は葡萄酒その物に存せずして、之を受くる人の信仰に存すと。**ルーテル**其說を斥けていはく。信仰の必要は申すまでもなけれど、その聖式に吾人が用ふる所のパンは尋常のパンに非ずして**キリスト**の肉なり。その葡萄酒は普通の葡萄酒にあらずして**キリスト**の血なり。此の如く**キリスト**の血を啜り肉を食ひて靈なる活ける**キリスト**に交通する事、是れ晩餐式の眼目なりと。然らば如何にしてパンを指して**キリスト**の肉といひ葡萄酒を指して**キリスト**の血といふやとは、**ツ井ングリー**の再三質問せし所にして、今日の吾人にも尤も合點し難き點なれども、**ルーテル**は此神秘的事實に非常の重味を置きしが如し。若し僧侶讀經の功德に由りて、二個の物質忽ち變じて肉となり血と化するといはゞ、是れ取りも直さず加特力教の教理に同じ。**ルーテル**は此變質說を採らず。靈物共存の說を主張せり。パンはパン、酒は酒なれども、靈なる**キリスト**の血肉同時にその中に存す。譬へば鞘の中に刀の藏せらるゝが如

ヘッセン伯の長大息、ツヰングリーの落涙

其後猶獄を極めんとする合理主義とドグマ主義の衝突の兆候顯はる

し。彼此說を持し、頑然として動かず。**ツヰングリー**は、聖書中に之に類せる譬喩的說明詞多きを唱へて、百方自說を辨ずれども、**ルーテル**は斷乎として屈せず。論理に窮するときは、『是れ我體なり』てふ語を白墨もて卓上に大書せしものを指示し、默して他語を發せざりき。是に於てか連日の討議も終にその効なく、會見は不調和に了り、**ヘッセン**伯は長大息して宗教家の融通利かざるを嘲ち、**ツヰングリー**は淚を呑んで歸國の途に上れり。

ルーテル派と**ツヰングリー**派とは是より分離して各々異りたる行徑を辿らんとす。獨逸に於ける羅馬教會を分裂せしめたる**ルーテル**は、彼の存命中既に新教會分派の端緒を開き、今後愈々過激ならんとする**ドグマ**爭ひの手ほどきを爲せり。新教々會の前途豈閑惰ならずとせんや。此時に當りて**カロロ**は、威風堂々、意氣揚々、赫灼たる希望を懷きつゝ、**アウグスブルグ**の國會に臨まん爲獨逸に來らんとす。

マルブルグの會見より數週間の後、再び**シユヴアバツハ**に會議を開

Schwabachの會議亦不調和に終はる

きて責めて新教諸侯と南獨逸諸市との連合丈にても維持せんと試みしが、**ルーテル**は曩きの**マルブルグ**の議題たりし十五個條に、更に二個條を加へて十七個條の**ドクマ**を起草し、その一條をも削減する事なからしめんと熱心諸侯に勸めしを以て、此會議も亦不折合に了れり。彼は政治上の掛引に對して、全く超然たる態度を持し、飽くまで武力に訴ふるの非なるを唱へ、一意皇帝に服從して平和なる裁決を待たん事を勸告したり。

第十六章　一五三〇年の**アウグスブルグ**國會

一五三〇年五月、**カロロ**五世帝は、**アルプス**山の**ブレンナー**峠を越え

カロロ帝十年目に獨逸に來る

て獨逸に入り來れり。**ヴオルムス**國會以來既に十春秋を閲しぬ。弱冠の君は今や立身の齢に達し、政治に、戰爭に、將た外交の掛引に、幾多の經驗を積みて、胸中の經綸亦誇るに足るものあるを自信するが如し。西班牙の臣民は、以前と打て變りて泰平を謳歌し、法王は已に帝の藥籠中の者となり、**フランシス**は二回まで敗戰して屈辱的和約に調印し、皇弟**フエルヂナンド**は**ハンガリー　ボヘミア**を兼攝して、威望隆々私かに未來の獨逸皇帝を以て任せし事は、**カロロ**も、將た自らも、異存なき點なり。連勝將軍は敗北を想はず。成功に重ぬるに成功を以てせし**カロロ**は、獨逸の宗教問題につきて預じめ明確なる政策を持せしや否やは疑問なれども、終局の成功に對しては深き自信を有せしが如し。**カロロ**の事を爲すや。千思萬考。左顧右眄。有らゆる手段を盡せし後に非ざれば、非常手段を採らず。此點に於ては、**ヘッセン**伯との懸隔天淵も啻ならず。帝爲人寡言沈着。森儼冒すべからざるの威風あり。『帝が一個年中に發する所の語は、**ルーテル**が一日中に呶々する

カロロの得意想ふべし

帝の沈默とルーテルの饒舌

帝の樂觀は不知に基く

アウグスブルグ市の概況

所よりも恐くは寡からむ』。横着なる**ル**氏が皇帝を尊敬せし所以幾分か此點に存す。此時帝に從ひて獨逸に來りし法王の勅使**カムペッヰオ**僧正は、最早温和なる手段に由りて新教徒を羅馬教會に復歸せしむべき見込なきを信じ。速かに武力を以て彼等を威壓せん事を帝に勸め、百方その心を動さんと試みしに拘はらず、帝が案外樂天的なる希望を該問題の成行に屬せし所以は、自ら獨逸語を解せず、隨て獨逸人の性質を了解する事の不充分なるに坐せしが如し。

アウグスブルグ國會の召集令はその年四月八日の日附を以て發布せられたり。**アウグスブルグ**市は**ドナウ**河に合せんとする**レッヒ**河の左岸に在り。南獨逸に於ける重要なる一都會にして、伊太利海岸と北獨逸の諸市の中間に位する貿易市の首位を占む。殊に當時は該市が繁榮の頂點に達せし時代にして、その名聲歐洲全土に聞えしほどの富豪寡からず。**ヴエルゼル**。**フッゲル**兩家の如きは、その中の筆頭にして、王侯と姻親を結べり。**カロロ**帝は五月十五日、**アウグスブルグ**市

サキソニア選帝侯ヨハンの剛直

政治家として亡兄に及ばざると選し

新教諸侯の態度稍不穩なり

に近きレッヒ河に架したる橋に到着し給へり。重立ちたる諸侯は陛下を此橋上に出迎へぬ。隨行せしカムペギオ僧正が祝辭を捧げしとき、諸侯の多數は跪きしが、獨りヨハン選帝侯のみは直立して其式に與る事を肯んぜざりき。侯は亡兄フリードリッヒ侯と異り、公然新教徒となり、親しくルーテル　メランクトンとも交はりしが、政治家としての才幹に至ては、亡兄に比して殆ど稚兒の如し。是より先き、帝は途中インスブルック逗留の際、侯を招きて豫じめ熟談する所あらんと欲せしに、侯は之に應ぜざりき。以上の二件は、將に開催せられんとする國會議場に捲き起るべき風雲を豫表するにあらざるべきか。

國會が正式に開かれしは六月二十日なりしが、帝は開會前私かに新教諸侯の重なる人々を招きて、國會開會中市内に於てルーテル派の說教者に說教せしめざる事を要求し、且將に擧行せられんとする舊教の大禮には、新教諸侯も加はらんやうに告げ給ひしに、彼等は兩つながら之を拒絕せり。溫和手段を以て平和に局を收めんと欲する帝も、新

アウグスブルグ信仰告白書の由來

告白書の主旨

教徒の頑固不穩なる態度を觀て、事體の稍々面倒なるを察し給ひぬ。此國會に於て討論すべき重要問題は、土耳の侵擊に備ふる事と、宗教界の紛紜を解決すべき事なりしが、帝は開會の當日宗教問題を先きにすべき事を宣言し、ルーテル派の異議並に信仰の要領を約かに記して、陛下の手許に差出すやう命じ給へり。ヨハン選侯は、かねて左る必要あらんかと推測せられし故、メランクトン初めその他數名の神學者に信仰告白書の起草を命じ置かれしなり。是れ新教の歷史上に有名なるアウグスブルグの信仰告白書にして、ルーテルの信仰問答と共に該派教會の信仰の基礎となりしものなり。此書は專らメランクトンの腹案に成り、ルーテルは脫稿後に閲覽せしのみ。思想文章共に穩當を旨とし、矯激を避け出來得る限り、新教と羅馬教との間に存する差違の少きを示さんと努めたり。起草者の本意は、その教會の爲に萬古不易の信仰の綱領を示さんとするに在らず。寧ろ彼等が、世人就中羅馬教徒より蒙れる誤解を辯證し、兩者の唱ふる所がその根本に